

二本木遺跡群4

—二本木遺跡群春日地区県第12次埋蔵文化財発掘調査—

(熊本地方合同庁舎A棟新営工事に伴う)



2011

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会は、熊本地方合同庁舎A棟新営工事に伴い、平成18年度、平成19年度の2箇年にわたり、発掘調査を実施しました。奈良時代前半から平安時代にかけての堅穴建物や奈良時代後半から平安時代（鎌倉時代初頭）にかけての掘立柱建物を多数検出しました。併せて井戸や土坑等を多数検出すると共に、多量の土器類や瓦も出土しました。その中には、輸入陶磁器、硯、土馬等特殊な遺物も出土しています。

この地の周辺には、「飽田国府」や「飽田郡衙」など官衙推定地があり、250m程度のKAB（熊本朝日放送）の建物の下には、8世紀中頃から9世紀初頭にかけての大規模で整然とした建物群が見つかっており、官衙関連の建物と位置づけられています。

さて、今回報告する「二本木遺跡群4」は、熊本地方合同庁舎A棟新営工事において、設計変更により工事が追加になった部分の発掘調査の報告です。わずかな面積ですが、奈良時代から平安時代の土器が多数出土しましたし、各時代の生活跡が多数見つかりました。隣接地の調査の再確認もおこなわれました。今までの周辺の調査や今後調査される発掘資料と併せてこの地域の歴史の解明の一助となると考えております。

この周辺は、新幹線関連の整備事業に伴い、現在も調査が継続され、日々遺跡に対する知見も深まり、ますます遺跡の重要性が明らかになってきました。

一方で「二本木遺跡群」に残されていた貴重な遺構群が姿を消しました。記録保存という形ではありますが、本報告が地域の発展とともに、未来に地域の貴重な歴史の情報として引き継がれ生かしていくことを望んでおります。

平成23年3月31日

熊本県教育長 山本 隆生

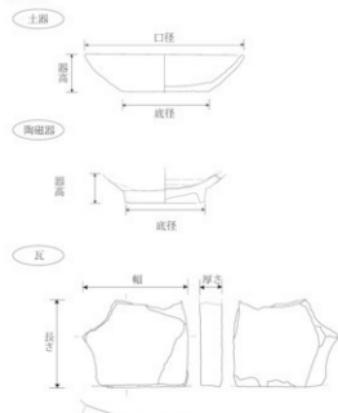
例 言

- 1 本書は、熊本県熊本市春日2丁目の月星化成熊本工場跡地であり、熊本地方合同庁舎A棟建設予定に所在する二本木遺跡群第12次調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、上記事業に伴い、国土交通省熊本管轄事務所の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、全額国土交通省熊本管轄事務所が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県教育文化課文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成21年度に実施し、整理報告作業を平成21～22年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、熊本県都市計画課から提供された図版、並びに国土地理院発行の2万5千分の1地形図等をもとに作成した。また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き、遺跡の測量の基準点測量及び水準測量は株式会社坂井測量設計コンサルタントに委託して実施した。
- 6 現地での写真撮影は亀田 学、福田 拓也、山川 宏が行った。遺構実測は前記3人の他、坂井 由葉、吉川 ゆかり、尾崎 公治、竹馬 武、梅林 将貴、尾崎 公祐、上村 強、園村 和也が実施

凡 例

- 1 方位／座標 地図座標第II系（日本地図系）を基準とし、方位もそれに準じた。
- 2 遺跡地区名 遺跡全体の地区（第3図）の通りである。調査区により地区名の表記が異なっていたが、それを踏襲した。VII区は調査地点の中に起点を設け、VIII区は基本の南北調査区で発掘調査を実施している。
- 3 遺構名略号 次の通りである。SI；堅穴建物、SA；櫛列、SB；掘立柱建物、SD；溝、SK；土坑、P；ピット（柱穴ばかり）、SX；その他（土塙墓・不明土坑など）。
- 4 遺構図版 標高は東京湾平均海面（Tokyo Peil [T.P.]）に基づく。
- 5 遺構図版 縮尺 遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャッシュョン及びスケールで示した。
- 6 遺構図版 線種 遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また乱擾および調査区範囲については一点破線で示し、古い遺構で同時に見えない縦線を二点破線で示した。
- 7 遺構図版 スクリーントーン 断面については斜線で示している。また、これに該当しないものは各図面上で凡例を示した。
- 8 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では一ラインの外側をポイントとしている。

遺物凡例



した。現地での削削作業は、先程引けた方々の他、武田 昭男、池田 秀盛、城戸 博長、木村 つよし、藤田 征也、羅 美鳳、松下 義章、榮嶋 強が行った。遺物の実測は、土器を岩下 恵美子、金子 美代子、竹原 由里子、前田 佳代子、川井田 久子、平川 忠里子、測上 久史、赤星 和美、横矢 晋二郎、陶磁器を川井田、丸平 幸が行った。石器を横矢、遺物の版下作成については、川井田、遠山、福田、測上、戸田 紀美子、横矢、製図は、遺構を主に川井田、永田、礼香、横矢、土器を平川、測上、川井田、横矢が実施した。遺物洗浄・接合・復元は今福 英子、永山 邦子、木村 ゆり子、中村 正子、高田 清香子、中村 典子等が行った。

遺物の写真撮影は、村田 百合子、亀田が行い、これを平川、測上が剪裁した。

7 本書の執筆は、亀田が行った。

8 整理後の保管は熊本県文化財資料室で保管している。

9 本書の編集は、熊本県教育文化課文化課が行い、赤星・川井田・平川・横矢、測上の援助を得て亀田が担当した。

例

9 遺構図版 平面図・断面図でのPは、土器を指す。その他の遺物はそれぞれ凡例で示した。

10 遺物図版 縮尺 遺物実測は原則として土器は1/3、石錐の破片は1/2で掲載した。

11 遺物図版 線種 外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または一点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を重ねて示し、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂鉄の動きを示している。

12 遺物図版 スクリーントーンによる顔料・網掛けの表現 立面には5%網かけ、黒色で立面上に無い場合は15%の網かけ、暗文（文様を意識したヘラによる磨き）は10%の網かけで示している。

黒色土器は内側を黒色化しているものをA類・黒色B。外面を黒色化しているものをB類で黒色Bとして図版に明記している。遺物包含層の黒色を包C層と署名している。

13 遺物図版 取回し痕跡 断面の内側に破線、磁器の場合は釉薬の表現として断面に斜線を入れている。

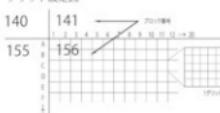
14 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項にて注記している。

15 写真図版 22-1は第22図1のことを示す。

二本木遺跡群ブロック設定

二本木山丘陵遺跡群														
二本木遺跡群														
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105
106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120
121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135
136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150
151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165
166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180
181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195
196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210
211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225
226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240
241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255
256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270

グリッド設定図



本 文 目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1	7 遺物包含層出土遺物	6
第1節 調査による経緯と経過	1	第3節 VII区の調査の成果	6
第2節 調査の組織	1	1 調査の概要	6
第Ⅱ章 道路の環境	1	2 基本土層	6
第Ⅲ章 調査の成果	1	3 奈良～平安時代前期の遺構	6
第1節 調査区の位置と概要	1	(1) 壑穴建物	6～7
1 調査区の位置	1	(2) 土坑	7～8
2 第8次調査概要	1	(3) 振立柱建物	8～9
3 第12次調査概要	1	(4) 潟	9
第2節 VII区の調査の成果	1	4 平安時代後期～鎌倉時代の遺構	9
1 調査の概要	1	(1) 土坑	9
2 基本土層	1	(2) 潟	9
3 織文時代	1	5 遺物包含層出土遺物	9
4 奈良～平安時代前期の遺構	2	第Ⅳ章 調査のまとめ	10
(1) 壑穴建物	2～3	第1節 第8次調査と第12次調査の分析	10
(2) 土坑	3～4	(1) 区画について	10
(3) 振立柱建物	4～5	(2) 振立柱建物について	10
5 平安時代後期～鎌倉時代の遺構	5	(3) 壑穴建物について	10
(1) 振立柱建物等	5～6	(4) 陶磁器からみた第8次調査区	10
6 中世後期～近世の遺構	6	第2節 まとめ	10～11
(1) 振立柱建物	6		

表・図面・写真図版 目次

表（遺物観察表）

表1 VII区出土遺物観察表1（壙穴建物）	表6 VII区出土遺物観察表6（ピット・遺物包含層）
表2 VII区出土遺物観察表2（壙穴建物・土坑）	表7 I・VII区出土遺物観察表1（壙穴建物・土坑・ピット）
表3 VII区出土遺物観察表3（土坑・振立柱建物）	表8 I・VII区出土遺物観察表2（遺物包含層・土坑）
表4 VII区出土遺物観察表4（振立柱建物等）	表9 I・VII区出土遺物観察表3（土坑・溝）
表5 VII区出土遺物観察表5（振立柱建物・ピット）	

図 面

Pl. 1 第1図	周辺遺跡分布図（古代）(1/25,000)	第14図	VII区218-SP・32-SX 遺物出土状況
第2図	二木本遺跡群第12次調査位置図(1/5,000)		平面・断面図(1/20)
Pl. 2 第3図	調査区位置図2・グリッド図(1/600)	Pl. 7 第15図	VII区遺物包含層III b・IV層検出
第4図	VII区基本土層図、調査区壁面上層図(1/60)		振立柱建物配置図(1/100)
Pl. 3 第5図	VII区遺物包含層III b・IV層検出壙穴建物配置図(1/100)	第16図	VII区145-SB・146b-SB・147-SB・150-SB 平面・断面図(1/80)
第6図	VII区01-SI 平面・断面図(1/40)・かまど断面図(1/20)	Pl. 8 第17図	VII区148b-SB・151-SB・152-SB・153-SB・154-SB 平面・断面図(1/80)
Pl. 4 第7図	VII区02-SI 平面・断面図(1/40)・かまど断面図(1/20)	Pl. 9 第18図	VII区155-SB・156-SB・157-SB・158-SB・159-SB・ 163-SB・149-SA 平面・断面図(1/80)
第8図	VII区41-SI 平面・断面図(1/40)	Pl. 10 第19図	VII区46-SB・48b-SB・47-SA・73-SA・75-SA 平面・断面図(1/80)
第8-2図	VII区41-SI かまど造成時の振方平面図(1/40)	第20図	VII区160-SB・161-SB・162-SB 他平面・断面図(1/80)
Pl. 5 第9図	VII区42-SI 平面・断面図(1/40)	第21図	56-SP 平面・断面図(1/20)
第9-2図	VII区42-SI かまど造成時の振方平面図(1/40)	Pl. 11 第22図	VII区出土織文土器実測図(1/3)
第10図	VII区111-SI 平面・断面図(1/40)・かまど断面図(1/20)	第23図	VII区01・02・41・42-SI 内出土遺物実測図(1/3)
第11図	VII区遺物包含層III b・IV層検出ピット群平面図(1/100)	Pl. 12 第24図	VII区111-SI 出土遺物実測図(1/3)
Pl. 6 第12図	VII区遺物包含層III b・IV層検出土坑配図(1/100)		
第13図	VII区土坑平面・断面図(1/40)		

第 25 図	VII区土坑内出土遺物実測図 (1/3)		Pl. 20 第 42 図	I区・VII区北側調査区 20003-SB・20004-SB・20005-SB 平面・断面図 (1/80)
第 26 図	VII区 218-SP 内出土遺物実測図 (1/3)		Pl. 21 第 43 図	VII区南側調査区・I区III a 層検出遺構 平面・断面図 (1/40)
Pl. 13 第 27 図	VII区掘立柱建物ビット内出土遺物実測図 (1/3)		Pl. 22 第 44 図	I区・VII区構配図 (1/80)
Pl. 14 第 28 図	VII区ビット内出土遺物実測図 (1/3)		Pl. 23 第 45 図	VII区北側調査区堅穴建物内出土遺物実測図 (1/3)
第 29 図	VII区出土遺物実測図 (1/3)		第 46 図	VII区南側調査区III b 層検出土坑内出土遺物 実測図 (1/3)
Pl. 15 第 30 図	VII区・I区堅穴建物配置図 (1/160)		第 47 図	I区 10053-SB・VII区北側調査区 07・08-SP 内 出土遺物実測図 (1/3)
第 31 図	VII区北側調査区・I区 68-SI・68 (b・c・d)-SI・50-SI 51-SI・90-SI・63-SI 平面・断面図 (1/80)		第 48 図	VII区III a 層出土遺物実測図 (1/3・1/2)
Pl. 16 第 32 図	I区・VII区北側調査区 88b・88-SI 平面・断面図 (1/80)		Pl. 24 第 49 図	VII区南側調査区 54-SK (01-SK) 内出土遺物実測図 (1/3)
第 33 図	VII区北側調査区 88b-SI かまど平面・断面図 (1/20)		第 50 図	VII区南側調査区III a 層検出遺構内出土遺物実測図 (1/3)
第 34 図	I区 55-SI 平面・断面図 (1/80)		Pl. 25 第 51 図	I区輸入陶器出土分布図 (1/1, 200)
第 35 図	I区 55-SI かまど断面図 (1/20)		Pl. 26 第 52 図	I区輸入陶器・国産陶器出土分布図 (1/1, 200)
第 36 図	I区 64-SI・97-SI 平面・断面図 (1/80)		Pl. 27 第 53 国	I区国産陶器出土分布図 (1/1, 200)
Pl. 17 第 37 図	VII区南側調査区III b 層検出遺構 平面・断面・土層図 (1/40)		第 54 国	大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶器編年 (2004)
Pl. 18 第 38 図	I区・VII区堅立柱建物配置図 (1/150)		Pl. 28 第 55 国	VII区包III・IV 層検出掘立柱建物変遷推定図 (1/200)
第 39 図	I区・VII区北側調査区 10053-SB・他 SD 平面・断面図 (1/80)		Pl. 29 第 56 国	二木本遺跡群第 8 次調査遺構変遷推定図 (1/1, 000)
Pl. 19 第 40 図	VII区北側調査区III b 層検出ビット群配置図 (1/40)		Pl. 30 第 57 国	I区主要遺構配置図 (1/500)
第 41 図	I区・VII区北側調査区 20001-SB・20002-SB 平面・断面図 (1/80)			

写 真

- Ph. 1 調査区周辺写真
 1 二木本遺跡群周辺航空写真 (南から)
 2 二木本遺跡群調査 I区俯瞰航空写真
 3 調査区VII区 (南西から)
 4 調査区VII区 (南から)

Ph. 2 VII区堅穴建物調査状況

- 1 調査区東側堅穴建物調査状況 (東から)
- 2 01-SI 調査状況 (南東から)
- 3 01-SI かまど袖崩落状況 (南から)
- 4 01-SI かまど調査状況 (南東から)
- 5 02-SI 検出状況 (南東から)
- 6 41・42-SI 検出状況 (東から)
- 7 41・42-SI かまど検出状況 (東から)
- 8 42-SI かまど検出状況 (東から)

Ph. 3 VII区堅穴建物・土坑・掘立柱建物調査状況

- 1 41-SI かまど造成時掘方状況 (東から)
- 2 41-SI かまど造成時掘方状況 (東から)
- 3 111-SI 調査状況 (南東から)
- 4 111-SI かまど検出状況 (南東から)
- 5 41b-SK 完掘状況 (東から)
- 6 79-SK 完掘状況 (南から)
- 7 80-SK 検出状況 (西から)
- 8 III b・IV 層検出掘立柱建物 (柱穴) 検出状況 (南西から)

Ph. 4 VII区掘立柱建物等・VII区調査状況

- 1 VII区 III a 層検出掘立柱建物 (柱穴) 検出状況 (南西から)
- 2 VII区 218-SP 土師器環出土状況 (南から)
- 3 VII区 II b 層検出掘立柱建物 (柱穴) 検出状況 (南東から)
- 4 VII区 32-SX 骸骨出土状況 (北から)
- 5 VII区 南側調査区全景 (北西から)
- 6 VII区 北側調査区構造検出状況 (南東から)
- 7 VII区 北側調査区III b 層検出構造調査状況 (南東から)
- 8 VII区 68-SI・68b-SI 土層断面 (南東から)

Ph. 5 VII区調査状況

- 1 10053-SB P-4 (220-SP)・07-SP 他検出状況 (南東から)
- 2 北側調査区III b 層調査状況 (南東から)
- 3 88b-SI かまど検出状況 (南西から)
- 4 88b-SI かまど袖粘土検出状況 (南西から)
- 5 南側調査区III b 層調査状況 (北東から)
- 6 南側調査区III a 層構造検出状況 (北から)
- 7 南側調査区 54-SK (01-SK) 土層断面 (北東から)
- 8 南側調査区 54-SK (01-SK) 完掘状況 (北から)

Ph. 6 VII区出土遺物立面写真

Ph. 7 VII区出土遺物俯瞰写真

Ph. 8 VII区出土遺物写真

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過

今回報告する調査地である旧月星化成株式会社熊本工場跡地では、熊本地方合同庁舎の建設工事に伴い、国土交通省營繕事務所（ないし県地域政策課）からの依頼に基づき、平成15年5月12日から19日まで確認調査（平成15年6月10日付け教文778号で報告）を実施している。その結果、平成18年1月20日付け国九整備營技第36号の調査依頼により、文化財保護法第99条（発掘調査の通知）を提出し、平成18年7月から平成19年3月まで本調査を実施した。（「二木本遺跡群Ⅲ」県文化財発掘調査報告第256集）

その後、設計変更に伴い、協議を実施したうえ、文化財保護法94条の通知（発掘（工事）の通知）（平成21年10月22日教文1933号）があり、平成21年10月10日付け教文2075号で発掘調査を実施する旨の通知を行い、防火水槽建設部分（VII区；平成18～19年度調査I区の西側隣接区域）に伴う発掘調査を実施した。

オイルタンク建設部分（Ⅷ区；平成22年1月29日から31日まで建設工事の間に国土交通省營繕事務所及び、施工業者前田建設工業等の協力で調査を実施した。

第2節 調査の組織

【平成21年度】

現地調査・整理作業

主体者 山本 隆生（熊本県教育長）
責任者 米岡 正治（文化課長）
総括 村崎 孝宏（文化財調査第1係長）
事務 宗村 士郎（教育審議員）、辛川 雅弘（主幹兼総務係長）、山田 京子（参考）
調査担当者 亀田 学（主任学芸員）、遠山 実香（嘱託）、福田 拓也（嘱託）
整理担当者 版田 和弘（文化財資料室長）、亀田 学（主任学芸員）、戸田 紀美子（嘱託）、水田 礼香（嘱託）

【平成22年度】

報告書作成

主体者 山本 隆生（熊本県教育長）
責任者 小田 信也（熊本県文化課長）
総括 村崎 孝宏（文化財調査第1係長）
事務 宗村 士郎（教育審議員）、元島 茂（高校教育課長補佐・総務係担当）、山田 京子（高校教育課参考）
整理担当者 亀田 学（主任学芸員）、赤星 和美（嘱託）

第Ⅱ章 遺跡の環境

二木本遺跡群は、熊本県熊本市春日、二木本、田崎本町に位置する。東西に700m、南北に1.5kmに広がる縄文時代後・晩期から近世・近代にまたがる遺跡群である。

花岡山から東に伸びる丘陵の先端に北岡神社がある。古墳時代後期（6世紀後半以降）に横穴墓が営まれ、7世紀代にかけて墓域が続き、8世紀にかけての遺物も出土する。古代の遺跡群の北端にあたる場所であり、飛鳥時代前期までの墓域が営まれる。奈良時代頃の墓等があつた可能性がある。

西側には花岡山・万日山があり、丘陵が南東方向にせり出しており、境界を作り出している。古墳群の後には古代の墓域になっていた可能性がある。

南側は坪井川が東西方向に蛇行している部分で区切られる。

遺跡の南側には延命寺があり、境内には原位置は保っていないが塔心礎がある。

また、調査区の約250m東側の坪井川左岸には官衙関連の建物も検出されており、周辺は8～9世紀の官衙関連区域と推定され、金具、鍔、鍔頭、中国製輸入陶器等が出土している。

さらに、二木本遺跡群の北側の京町台地上には7世紀後半から9世紀にかけての瓦が出土する伝大寺道遺跡群も存在し、官衙や寺院関連の遺跡もある。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査区の位置と概要

1 調査区の位置（第1・2・3図）

二木本遺跡群のはば中央の万日山と坪井川に挟まれた所に位置する。月星化成本工場（旧熊本紡績（綿糸紡績）工場）跡の敷地内に位置する。現在の工場の合同庁舎A棟の主要建物が建てられている部分が県第8次調査（熊本県文化財調査報告第256集）で、今回調査したⅧ区は建物の西側に接するオイルタンク建設部、Ⅶ区は南西部にやや離れている合同庁舎A棟の防火水槽建設部分にあたる。

2 第8次調査概要

奈良時代から江戸時代の遺構を検出した。奈良時代後葉半から後葉にかけての堅穴建物と井戸と溝、奈良時代後葉から平安時代にかけては、溝及び掘立柱建物群を検出している。中国風の陶器類（越州窯青磁や白磁、絵釉陶器等）も多数出土しており、奈良時代中葉に遡る軒丸瓦や軒平瓦の破片、鍾等の金具、金銅製鉢や鐵製鍬等が出土している。西側に住居エリア、東側に住居・倉庫エリアが8世紀中葉段階以降に溝等で区画ごとに機能分化ができていた可能性がある。

また、南東側には11～12世紀後半の井戸と区画溝がある。北東側に墓等も検出しており、鎌倉時代にも居住地及び墓域として利用されている。室町時代になると調査区北側に東西南向に北側を区画する溝（北側に屋敷が開闢）が、調査区南東部で南北に東西方向を区切ると推定できる（東側に屋敷が展開）が検出されている。

3 第12次調査概要

奈良時代半ばから平安時代前期の堅穴建物11軒以上、掘立柱建物17棟以上（推定）、土坑10基以上を検出した。古代後期から中世では、平安時代後期の掘立柱建物5棟、櫛列（掘立柱建物）を検出し、4時期以上の時期が推定できる。中世後期から近世の面では柱穴を検出し、掘立柱建物も存在したと推定できる。

第2節 Ⅶ区の調査の成果

1 調査の概要（第1・2・3図）

奈良時代半ばから平安時代前期では堅穴建物5軒以上、掘立柱建物15棟以上、土坑3基を検出した。平安時代後期から中世では、掘立柱建物5棟、櫛列（掘立柱建物の可能性がある）を検出し、4時期以上の時期が推定できる。基本的に、堅穴建物から掘立柱建物への変遷が追えると考えられる。中世後期から近世の面では柱穴を検出し、掘立柱建物も存在したと推定できる。

2 基本上層（第4図）

遺構の重複が顕著で基本層位を図示するのが困難であるが、調査区壁面断面図を提示し説明する。

合同庁舎宮内省工事に伴う盛土1m、I層は月星化成本工場（旧熊本紡績（綿糸紡績）工場）造成や解体時の堆积層、IIa層は近世層と推定できる灰褐色色シルト7.5YR4/2である。IIb層はIIa層の肩よりやや褐色色が強い土で中世後期まで遡る可能性がある。IIb層（暗褐色色シルト7.5YR3/2）は古代後期から中世初期を中心とした層位と考えられ、IIIa層（暗褐色色シルト7.5YR3/3）は8世紀前半から9世紀後半にかけての層と推定できる。IIIb層はやや黄褐色色シルトが混ざる縄文時代から8世紀にかけての時期と推定でき、IV層は黄褐色色シルトで縄文時代晩期以前の層で二木本遺跡群では現在のところ地山層と認定できる。

3 縄文時代

（1）概要（第22図、Ph.7）

調査区の東側の古代の堅穴建物である01-S1、02-S1周辺から縄文時代後期から晩期の黒色磨研土器及び粗製土器が出土している。02-S1の下層は、堅穴建物を建てる際に整地されていると推定したが、その一部が縄文時代の土坑（第7回参照）であった可能性も考えられたが、明確にできなかつた。

(2) 遺物 (第 22 図、Ph. 7)

第 22 図 2・3 は浅鉢または鉢で、内外面を横方向に磨いている。黒色磨研土器様式である。第 22 図 5 は粗製土器の深鉢で外面に横方向の貝殻による条痕が顕著に残存する。第 22 図 4 は深鉢の胴部下半の一部と推定でき、竪方向の貝殻による条痕が残存する。第 22 図 1 は深鉢の底部と考えられる。

4 奈良～平安時代前期の遺構

(遺物包含層Ⅲ a ~ Ⅳ 層検出遺構)

概要 (第 5・11 図、Ph. 1・2)

遺物包含層Ⅲ a 層上面～IV 層間に検出した遺構である。調査区内に竪穴建物 5 軒以上を検出した。2 軒以上重複して住居の範囲と推定できる箇所が 2 箇所あった。位置関係からは同時に 2 軒、2 時期以上にわたって竪穴建物が建っていたと推定できる。

8 世紀中葉から後葉と 9 世紀初頭を中心とした時期と推定できる。ただし、遺物包含層から奈良時代前段 (8 世紀前葉) の須恵器等が出土していることから、その時期の竪穴建物が存在した可能性が高いた。

掘立建物も 8 世紀後半からはじまり、9 世紀後半から 10 世紀までの期間で替えられながら継続していたと推定できる。遺構の重複等で出土物の十分な取り上げ困難であったため、建物の時期決定を行いくつも、大局的には竪穴建物から掘立柱建物へ移行したと考えられる。

(1) 竪穴建物 (第 5 図、Ph. 2・6・7)

概要 竪穴建物を 5 軒以上検出した。また、検出した段階では、東側にあと 2 軒程方形のプランを検出したが、浅く住居構造を把握できなかつたため整地層と考えた。しかしながら、他に数軒存在した可能性がある。

01-SI (第 5・6・23 図、Ph. 2・6・7)

位置 調査区の東側中央に位置する。月星化成熊本工場 (旧熊本紡績 (織機製造) 工場) 造成や解体時の推乱層により上部が削平されている。後述するが、推定床面や 02-SI より一回り小さいこと、その位置関係等から 02-SI を縮小したと考えられる。

形態 かまどに向かって幅・長さとも約 2.1m のほぼ正方形の掘り方を持つ小形の建物である。

柱穴 4 本柱を主柱穴とする構造である。柱の掘り方は 18~25cm で、柱底層は約 8cm、深さ 8~15cm である。東西間距離約 1.2m、南北北柱間距離約 1.0m での配置は建物の掘り方の平面形のやや南側に偏る。北側の空間を有効利用しようとした柱配置と考えられる。

かまど 西側に造付けのかまどを持つ。検出した段階では、かまどの焼成部側の袖部が焼け一部崩落している状況であった。袖部は袖部の外側に貼付けて化粧をしている程度で、袖自体は黒褐色土色のシルト層で造られている。02-SI のかまどの中側に約 20~25cm の幅で床面を新たに築いている。北側の袖部に向かって右側の袖部の基底部には、建物床面から約 15cm の高さに厚さ 3cm の粘土層が見られ、袖部は造り変えられていると推定できる。

遺物出土状況 上層から黒色土器 A 類の碗 (第 23 図 4) が出土している。また、土師器環は回転台土器脚を含み、細片であるが後出する土器があるものも混じる。埋土を切り込んで柱穴等を検出していることから、混入と考えられる。須恵器は、高台付き环が埋土上層から出土している。やや直線的に立ち上がる口縁部を持つことから 8 世紀の中葉から後葉と考えたい。網田編年 IV 期 (第 4 段階)、大宰府編年 III 期併行と位置づけられる。

小結 かまどの重複状況や床面等から考えて 02-SI を縮小した建物と考えられる。時期的には出土遺物の時期と大差ないと考えられ、8 世紀中葉から後葉にかけて機能した建物と考えて良いと思われる。

02-SI (第 5・7 図、Ph. 2・6・7)

位置 調査区の東側中央に位置する。01-SI と重複して検出した。月星化成熊本工場 (旧熊本紡績 (織機製造) 工場) 造成や解体時の推乱層により上部が削平されている。床面が 01-SI に削平された可能性があるが、かまどの袖の面等からみると 1~5cm 程度の床面と推定できる。その点と 02-SI は 01-SI より一回り大きいこと、その位置関係から 01-SI はこの建物を縮小したと考えられる。

形態 かまどに向かって幅・長さとも約 2.3~2.5m のほぼ正方形の掘り方を持つ小形の建物である。

柱穴 掘り方は東西柱間距離約 1.15m、南北柱間距離約 1.0m で柱は掘り方の平面形には東側及び南側に偏る。特に東側の空間 (かまど周辺) を有効利用しようとした柱配置である。

かまど 西側に造り付けのかまどを持つ。検出した段階では、01-SI のかまどのすぐ後にかまどの粘土を検出した。焼成部も残存していた。特に北側の袖部が焼け一部崩落している状況であった。袖土は袖部の外側に貼付けて化粧をしている程度で、袖自体は黒褐色土色のシルト層で造られているのは 01-SI とほぼ同様の造りである。袖部の幅は約 20cm で、燃焼部の深さは約 50cm の楕円方形で深さは 4cm 程度である。煙道と思われる一部が残存している。

遺物出土状況 かまど袖部から須恵器の杯が出土しているほか、トレンチを設置した際に確認した遺物が多く、詳細な出土状況を示していないが、廃棄された状況の土器が多い。トレンチ内出土遺物 (第 23 図 15・16・17・18) は整地層内から出土した土器と考えられる。01-SI の遺物及び柱土上層から柱穴に伴う遺物が、混入している可能性があることも注意を要する。

小結 土器型式から見ると、第 23 図 18 は内面暗文を施し底部外面にヘラ削りを施しており 8 世紀末から 9 世紀にかけてのものであるが、他の土器は奈良時代でも前葉から中葉までのものと推定される。最初に記述した土器を 01-SI などに伴う混入と考えるなら奈良時代中葉の年代と推定できよう。網田編年 IV 期 (第 4 段階)、大宰府編年 III 期併行と位置づけられる。

時期的には出土遺物の時期と大差ないと考えられるが、01-SI との重複関係から 8 世紀中葉頃機能した建物と考えられる。

41-SI (第 5・8・23 図、Ph. 2・6・7)

位置 調査区の南東側に位置する。調査区外の南側及び東側に遺構の統きが伸びて行くと推定できる。検出時に平面的に 5cm 程土層を下げすぎて検出しているが、遺物包含層Ⅲ b 層上面から掘削していると考えられる。ただし、建物検出面の上位に存在するはずのⅢ b 層が明確に認識できなかった。(第 4 図)

形態 南側及び東側が調査区外に伸びており、全体の規模は不明である。かまどに向かって幅 1.1m 以上、長さ 2m 以上の方形の掘り方を持つ小形の建物である。

柱穴 南側及び東側が調査区外に伸びており、主柱穴の配置をつかむのは困難である。床面で検出できた柱穴は 2 基で、42-SI 等との位置関係等から考へて東側の柱穴がこの建物に伴うものと推定できる。この柱穴は直径 25cm、柱直跡は約 7cm、深さ 12cm である。

かまど 西側に造り付けのかまどを持つ。検出した際に東西にトレンチを設置したため、かまどの袖部の一部を掘りてしまつたが、基底部付近まで粘土で袖部を作成している状況が検出できた。

最初に検出した段階では粘土のかたまりの全てが一連のものと考え、42-SI の竪穴建物のものと推定した。しかしながら、粘土を除去して掘り込みが 41-SI と 42-SI の両方に確認できたため、42-SI と 41-SI の両方のかまどの粘土と判断すべきと考え直し、かまど造成痕跡等を考え、かまどの袖部を推定で復原した。

袖 袖は約 35cm の基底部のみ残存する。焼成部は長方形明る部分で約 45cm、深さ 25cm 程度である。理土は黒色系の土壌で灰等が堆積している土を含むと推定できる。また、かまどの袖造成時で土壌状に長軸約 70cm、短軸約 40cm、深さ約 20cm 掘り込んでいた事がわかった。

遺物出土状況 窪部から赤彩の土師器杯 (第 23 図 20)、埋土下層から須恵器 (第 23 図 19)、埋土上層から土師器杯 (第 23 図 23) が出土している。下層部分は流れ込み、上層は埋められていると考えられる。

小結 埋土からは、(第 23 図 20・23) のように直線的に上方にやや開きやや外反する口縁を持つ土師器が出土している。埋土下層の遺物から見てこの建物は網田編年 V 期 (第 5 段階)、大宰府編年 V 期併行を中心とする時期と考えられる。8 世紀後半から 9 世紀初頭と考えられる。

42-SI (第 5・9・23 図、Ph. 2・7)

位置 調査区の南東側に位置する。調査区外の南側及び東側に遺構の統きが伸びて行くと推定できる。41-SI 推測時に 42-SI の東側の床面が削平されている。41-SI と同様に検出時に平面的に 5cm くらい土層を下げすぎて検出している。

形態 南側及び東側が調査区外に伸びておらず、全体の規模は不明である。かまどに向かって幅約0.9m以上、長さ1m以上で方形の掘り方を持つ小形の建物である。また、貼り床と考えられ、掘り方から7cm程度床面を上げている。

柱穴 南側及び東側が調査区外に伸びておらず、主柱穴の配置をつかむのは困難である。床面で検出された柱穴は2基で41-SI等との位置関係等から考えて西側の柱穴がこの建物に伴うものと推定できる。この柱穴は径約20cm、柱痕跡は約9cm、深さ8cmである。

かまど 西側に造り付けのかまどを持つ。検出する際に東西にトレンチを設定したため、かまどの右袖の一帯を壊してしまったが、底部付近まで粘土袖部を形成している状況が検出できた。

最初に検出した段階では粘土のかまど全般的な全てが一連のものと考え、42-SIの竪穴建物のものと推定した。しかしながら、粘土を除去して掘り込みが41-SIと42-SIの両方に確認できため、42-SI、41-SIの両方のかまどの粘土と判断すべきと考え直し、かまど造成痕跡等を考え、かまどの袖部を推定で復原した。袖の幅は30~35cm程と推定できる。高さ30cmの基底部のみ残存する。

第2次発掘部は長さが判明する部分で約30cm、深さ20cm残存していた。埋土は黒色系の埋土で灰炭等が堆積している土を含むと推定できる。また、第1次発掘部は、長さが判明する部分で約30cm、深さ20cm残存していた。埋土は黒色系の埋土で灰炭等が堆積している土を含むと推定できる。また、41-SIと同様にかまどの袖を形成する前に土壌中に掘り込みが確認できた。かまどを作成する際の基礎構成をしていると考えられる。

遺物出土状況 42-SIのかまど前部付近から須恵器(第23図24)・土器類(第23図25)が出土している。前者は端部が直線的に伸びいや古相を示す。後者は内面に縦文を施すものである。

小結 西側にかまどを持つ竪穴建物である。埋土上出土遺物全体からは、網田編年V期(5段階)、大宰府編年V期併行を中心とする時期と考えられる。ただ、第23図24等はやや古い様相を持つので、やや古くなる可能性がある。

111-SI (第5・10・24図、Ph.3・6・7)

位置 調査区の中央部に位置する。竪穴建物の柱穴に埋められており、建物の輪郭を把握するのが困難であったが、かまどの位置及び161-SB P-1(14-SP)から8世紀後半から9世紀初頭の遺物がまとまって出土していることから、建物の範囲を推定した。

形態 かまどに向かって幅約2.7m、長さ約2mのやや西側に広がる形態と推定できる。南北に設定した調査用の土層観察用窓(ペルト)から壁穴の掘り方の立ち上がりが観察できた。

柱穴 建物の大部分が竪穴建物の柱穴の掘り方に埋められており、柱配置及び構造は不明である。しかしながら、かまどに向かって左袖(西側の袖)の近くに検出されたピット(124-SP)は主柱穴の1つになる可能性がある。124-SPの掘り方は円形で径18cm、深さ16cm、柱痕跡は径8cmである。

かまど かまどに向かって左側の袖付近に粘土が3~4cmの厚さで見られた。袖の先端部の残存部か、かまどの袖部の化粧の粘土が剥れたものであるかを判断するのに困難であったが、平面配置等から南側の粘土塊をかまど袖部の先端部の残りと判断した。粘土が顕著に残存しているのは、袖部の中央の手前部分のみである。あとは袖間にわざかに粘土が混じる程度である。このことから、かまど袖部は約15cm程で土を盛りあげて表面を粘土で化粧して袖部を造る構造と考えられる。

橈成部は深さ約20cmとやや深く、底面付近に特に焼けた赤色を呈する部分があった。また、その上層には灰が土壌化したと推定できる層があり、その上は橈成されて赤色を呈する層(深さ約10cm)もあり、これが最終的な焼成面と考えられる。かまど袖部の粘土も化粧を直した跡があり、橈成部も幅約40cm、長さ約30cm程が2回掘り直していると考えられる。

遺物出土状況 かまどの袖部及び前底部周辺から遺物が出土している。第24図2~4はかまどで使用していた甕形土器が橈成部全面に転落したと推定できる。

また、遺物包含層より層上層から検出しているが、竪穴建物の柱穴を検出時にやや下面を下げるで検出したため、土層観察用窓(ペルト)も深さ5cmの竪穴部しか検出していない。また、上に記したように竪穴建物の柱穴に埋め込まれているため、建物の埋土から出土遺物を必ずしも明確でない。後に記述する161-SBの主柱穴である14-SP(161-SB P-1)に遺存状況の良好な土器群が出土している(第27図49・50・51)。これ

らは、この建物跡で使用された土器もしくは、廃棄された土器の可能性を指摘しておきたい。

小結 道構を良好に検出していないので明確でないが、北側にかまどを持つ竪穴建物であると考えられる。主柱穴は竪穴建物の柱穴により埋められているため特定できなかったが、西側のかまど袖の手前で検出された柱穴と主柱穴と考えると4本の主柱穴を持つと推定できる。建物の時期は出土遺物から、網田編年V期(5段階)、大宰府編年IV~V期併行の時期と推定できる。

(2) 土坑 (第12・13図、Ph.3・6・7)

41b-SK (第12・13図、Ph.3・6・7)

位置 調査区の南東隅に位置する。41-SIが埋没してから掘削している。土坑からの柱穴(92-SP等)で一部擾乱されている。

形態 最初に41-SIを掘削し始めたが、床面の深さが予想より深そうであつたのでトレンチを入れて確認すると、41-SIと考へて掘削した東側部分が土坑であることが判明した。不整形ではあるが、一边約1mの円形を呈し、深さは約40cmである。

遺物出土状況 地理上1・2層から残存率が1/4以上の破片の土器器、須恵器が出土している。また、埋土下層(4層)からも土器器、須恵器の坏類が出土している。比較的大きな破片が多く、人為的に埋められている。

理土が竪穴建物と区別するのが困難で、若干住居埋土の遺物もとりあげている可能性がある。

小結 出土土器を見るに少なくとも2時期には分類可能で、第25図1・4・5・7等の8世紀末から9世紀初頭を中心とするものと第25図2・6・9等の8世紀中葉から後半にかけてのものに分類できよう。この土坑の年代は埋土や出土状況から考えて、前者の時期に埋められたものと考えられる。掘削時期はほぼ同期かそれらにやや先行する8世紀末から9世紀初頭の時期と推定できる。網田編年V期(5段階) 大宰府編年V期併行期である。古段階の遺物は41-SIが埋没する段階で流入したものであろう。

32-SX (第12・14図、Ph.4)

位置 調査区の南側中央に位置する。145-SBを構成する柱穴P-5の上面を削平している。

形態 長軸62cm、短軸約50cm、深さ約25cmを測る不整形の土坑である。南西側がやや深い。

遺物出土状況 理土上層で歯骨が出土した。残存状況は比較的良好であったが、おそらく検出面がIV層上面であったため、削平された可能性があるが、埋められた状況というより、廃棄されたと見られる。

理土からは碎片のみしか出土しておらず、摩滅も著しい。流れ込んだものと推定できる。

小結 古代の土器器・須恵器の細片と歯骨が出土しているが、歯骨等の出土から考え得て、中世まで下がることもある。

また、145-SBは出土遺物や道構の重複(切り合ひ)関係から9世紀中葉と推定できるため、それより時代が下がる段階と推定できる。

81-SK (第12・13図、Ph.4)

位置 調査区の西端中央に位置する。上層が削平されていたため、IV層上面で検出した。

形態 長さが明確でいる部分は約115cm、調査区の西側に伸びる。70cm以上の長さは遺存する。深さは35~40cmである。検出した段階では土坑と思い、調査区に沿ってトレッジを設定し、理土が2層に分けられるこれを確認した。しかしながら、完掘して下層の形状を見るとどうも柱穴の痕跡を土坑と勘違いして掘削した可能性があると考えられる。

遺物出土状況 遺物は細片のみしか出土していない。流れ込みと考えられる。同化できるものも細片である(第25図16~19)。上述したように柱穴の重複の可能性もあるため、土坑とすれば、第25図16・17の遺物がや古相を示していることから、これらが土坑の時期の可能性がある。

小結 81-SKは、網田編年V~VI段階(5~6段階)、大宰府編年V~VI期併行期までの柱穴の重複で、前の段階に網田編年V期併行の土坑が存在していた可能性があると考えたい。断面図等は修正すべきであることを付け加えたい。

80-SK (第12・13図、Ph.3)

位置 調査区のやや北側中央に位置する。

形態 長軸約120cm、短軸約110cmで深さ約20cmを測る。形状から柱穴

も重複した土坑の可能性がある。

遺物出土状況 遺物はほとんど出土していない。

小結 検出した深さを考えると中世まで下がることも考えられる。

79-SK (第 12・13 図、Ph. 3)

位置 調査区の北西側で 81-SK の北東 1m に位置する。

形態 長軸方向約 96cm、短軸方向約 80cm と推定できる。深さは約 30cm である。埋土が 2 層に分けられることを確認した。ブロックを少し含み、埋め戻した可能性が高い。

遺物出土状況 第 25 図 15 は底部系切りの土師器皿である。第 25 図 13・14 は底部へ切りの土師器皿である。遺物は流れ込みと考えられる。

小結 出した遺物は、古い様相を持つもの（第 25 図 14）もあるが、

第 25 図 14 は網田編年 V 期（5段階）、大宰府編年 V 期併行期と推定でき、

8世紀末から9世紀初頭以降と推定できる。土坑はこの時期と考えられる。

ただし、第 25 図 15 は 12 世紀後半を中心とした時期と考えられる。い

ずれ流れ込みである。第 25 図 15 は混入遺物と考えたい。

110-SK (第 4・12 図、Ph. 3)

位置 調査区の西側の壁付近に位置する。一部調査区外に伸びる。

形態 東西方向 1.2m 以上、南北方向 0.7m 以上を測る。深さは、約 30cm である。

遺物出土状況 土坑と認識されてからの遺物の出土はない。

小結 81-SK に壊され（切られ）ていることから、遺物包含層等から見ても網田編年 V 期併行もしくは IV 期に比定される。

(3) 堀立柱建物（第 15・16・17・18 図、Ph. 3・4・5）

(遺物包含層Ⅲ b・IV 層上面検出遺構) (第 15 図、Ph. 3)

遺物包含層Ⅲ a・Ⅲ b 層上面で、多数の柱穴を検出した。厳密に言うと、包含層Ⅲ a 層上面から IV 層上面までに検出した柱穴である。

現地で検出した段階で、建物の復元を試みたが、測量成果等により、若干柱配列を再考したものも多い。調査区が狭いため調査区外に伸びるものも多く、今後の隣接地の調査をする際には、検証する必要がある。以下個々に、詳説する。

145-SB (第 15・16・27 図、Ph. 3)

位置 調査区の南西端に位置する。調査区外の南側に続くと推定できる。
柱配置 径 40～52cm の掘り方を持つ。柱痕跡は約 8cm である。柱穴の深さは 40cm、P-2 のみやや細かく小さく深さも約 20cm と小形である。建物の軸は、座標北よりやや西側に振れている。

遺物出土状況 P-1-P-3 (116-SP) や P-5 (32-SX の一部) から出土している遺物は、細片のみしか出土していない。流れ込みと考えられる。その中で汎化できるものから判断すると、P-1 からは土師器皿、P-3 (116-SP) の中には古字を示す第 27 図 13 の他、第 27 図 5 等が出土している。

また、当初 49-SB-P-2 から出土していると考えていた完形土器は、時期的なことや 496-SB が座標北から約 10 度振れていること等から考えて、この建物に伴う地盤の柱穴の可能性がある。

小結 3 間以上 ×2 間以上の建物と推定できる。完形土器の所産年代は、

網田編年 V 期（第 5 段階）、大宰府編年 V 期併行と位置づけられる。ま

た、柱穴出土遺物は網田編年 VI 期（第 6 段階）、大宰府編年期 VI A～VIB 期併行のものも見られる。網田編年 V ～VI 段階で 9 世紀前葉を中心とした時期と推定できる。また、153-SB の柱穴の一部を切っていることから、153-SB に新しい建物と言える。

146b-SB (第 15・16・27 図、Ph. 3)

位置 調査区の北西端に位置する。調査区外の北側に続くと推定できる。

柱配置 柱間距離約 1.8m (6 尺) である。径 30～40cm の円形の掘り方を持つ。柱痕跡は約 10～12cm である。柱穴の深さは約 30cm である。南側に東西に並ぶ柱列は柱間距離 6 尺であるが南北方向の柱列との柱間距離は 5 尺である。建物の軸は、座標北よりやや西側に振れている。

遺物出土状況 遺物は細片のみしか出土していない。流れ込みと考えられる。P-5 から出土している遺物は 8 世紀と考えられるものもあるが、黒色土器 A 類の汎化できない細片が出土している。9 世紀から 10 世紀にかけてのものと推定できる。

小結 2 間以上 ×2 間以上の建物と推定できる。流れ込みの遺物ではあるが、P-1 から赤陶を施す薄手の土師器が出土している。土器の時期は

網田編年 V ～VI 段階（第 5 ～ 6 段階）以降、大宰府編年 V ～VI 段階併行期以降と位置づけられる。

柱穴の切り合いからは 156-SB → 159-SB → 146b-SB と考えられることと、159-SB から網田編年 5 期（5 段階）、大宰府編年 V 期以降と考えられる土器が出土していることから建物の時期がやや下る可能性も考えられる。

また、柱配置から、南側に底を持つ建物と推定できる。

147-SB (第 15・16 図、Ph. 3)

位置 調査区中央の南端に位置する。調査区外の南側に続くと推定できる。

柱配置 柱間距離約 1.5m (5 尺) である。径 35～40cm の円形掘り方を持つ。柱痕跡は約 12～15cm である。柱穴の深さは約 20～30cm である。ほぼ原標北を建物の軸とする。南側に東西に並ぶ柱列は柱間距離 6 尺であるが、南北方向の柱列との柱間距離は 5 尺である。

遺物出土状況 遺物は細片のみしか出土していない。流れ込みと考えられる。時期を特定できるものはない

小結 2 間以上 ×2 間以上の建物と推定できる。柱穴の切り合いから、158-SB より新しく、148b-SB より古いことから、9 世紀中葉から 10 世紀前葉までの間に推定できる。

148b-SB (第 15・17・27 図、Ph. 3・6)

位置 調査区の西端に位置する。調査区外の北側に続くと推定できる。

柱配置 柱間距離約 1.5m (5 尺) である。径 30～50cm の円形の掘り方を持つ。柱痕跡は 10～15cm である。柱穴の深さは 30～40cm である。南側に東西に並ぶ柱列は柱間距離 5 尺であるが南北方向の柱列との柱間距離は 5 尺（やりや長い（平均 5 尺半）。建物の軸は、座標北よりやや西側に振られている。

遺物出土状況 遺物は細片が出土している。流れ込みと考えられる。P-2 から第 27 図 12 が出土している。

小結 2 間 ×3 間以上の純柱の建物と推定できる。流れ込みの遺物ではあるが、P-2 出土の土器は網田編年 VI 期（第 6 段階）、大宰府編年 VII 期併行期以降とい位置づけられる。9 世紀初め頃と推定できる。柱穴の切り合いからは 158-SB → 147-SB → 148b-SB と考えられる。

また、柱配置から南側に底を持つ建物の可能性もあると推定できる。

150b-SB (第 15・16・27 図、Ph. 3)

位置 調査区の西端である。調査区外の北西に続くと推定できる。

柱配置 柱間距離約 1.5m (5 尺) である。柱穴の深さは約 30～40cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10～15cm である。柱構造から見て純柱の建物と推定できる。建物の軸は、座標北にほぼ直角である。

遺物出土状況 遺物は流れ込みと推定できる細片が出土している。P-5 からは、やや古相の第 27 図 15 と新相の第 27 図 13 が出土している。

小結 2 間 ×2 間以上の純柱の建物と推定できる。流れ込みの遺物ではあるが、P-5 から出土土器（第 27 図 13）は、須恵器の高台付き碗で網田編年期（第 6 段階）、大宰府編年 VII 期併行期以降に位置づけられる。10 世紀前半～中葉と推定できる。

151-SB (第 15・16・17 図、Ph. 3)

位置 調査区の東部に位置する。

柱配置 柱間距離は約 1.5m (5 尺) である。径 30～40cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10～12cm である。152-SB の P-2 に重複している可能性がある。柱構造から見て純柱の建物と推定できる。建物の軸は、座標北より東に振れている。

遺物出土状況 柱穴内からは土器の細片が出土しているが、時期の判定できるような遺物がない。

小結 2 間 ×2 間以上の純柱の建物と推定できる。152-SB との位置関係や柱痕跡が明確に検出されていることから、152-SB より古くと推定できる。

152-SB (第 15・16・27 図、Ph. 3・6)

位置 調査区の東部に位置する。調査区外の北側に続くと想定される。

柱配置 柱間距離は約 1.5m (5 尺) である。径 35～60cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10～12cm である。60cm の掘り方の柱穴は重複している可能性があるが、断面観察等でも明確にできなかった。P-2 は、151-SB の北側の柱穴と重複している可能性が高い。建物の軸は、座標北より西に振れている。

柱構造から見て P-4 の掘り方が 25cm と小さく、柱列からするとやや

れることから南側に庇を持つ建物の可能性がある。建物の軸はほぼ座標北に沿っていると考えられる。

遺物出土状況 P-1から流れ込みの遺物ではあるが第27回16が出土している。

小結 2間×2間以上の建物と推定できる。145-SBと南側の柱列が繋ぐ。

遺物からは網田編年V期(第5段階)、大宰府編年V期併行期で9世紀後半から9世紀初頭以降と推定できることから、それほど時期差がないと思われる。

153-SB (第15・17図、Ph.3)

位置 調査区の西側に位置する。調査区外の北側に統くと推定できる。

柱配置 柱間距離は約1.8m(6尺)である。径30~50cmの円形の振り方の柱穴である。柱痕跡は10~12cmである。柱配置から総柱の建物と推定できる。建物の軸は、ほぼ座標北である。

遺物出土状況 遺物は繊片が出土している。流れ込みと考えられる。P-4からは礎は困難であるが、9世紀前半頃までと推定できる。

小結 2間×2間以上の建物と推定できる。柱穴の切り合いからは153-SB→145-SBと考えられる。145-SBが9世紀中葉以降と推定されるので、建物の時期は、流れ込みの遺物も合わせて考えると9世紀前葉以前と推定できる。

154-SB (第15・17・27図、Ph.3・6)

位置 調査区の西側に位置する。調査区外の北側及び西側に統くと推定できる。

柱配置 柱間距離は約1.8m(6尺)である。径30~45cmの円形の振り方の柱穴である。柱痕跡は10~12cmである。柱配置から総柱の建物と推定できる。建物の軸は、座標北よりやや東に振れていると推定できる。

遺物出土状況 流れ込みの遺物が出土している。P-1からは第27回18、P-3を切る柱穴からは第27回19・20の遺物が出土している。

小結 3間×2間以上の建物と推定できる。建物の時期は、P-1の流れ込みの遺物から考えると網田編年VI期(第6段階)、大宰府編年VI B→Ⅷ期併行期で9世紀後半から10世紀前半と推定できる。

155-SB (第15・18図、Ph.3)

位置 調査区の西側に位置する。調査区外の北側及び西側に統くと推定できる。

柱配置 柱間距離は約1.8m(6尺)である。径35~40cmの円形の振り方の柱穴である。柱痕跡は8~12cmである。P-1・P-5間距離がやや長い。柱配置から総柱の建物と推定できる。建物の軸はほぼ座標北に沿うと推定できる。

遺物出土状況 P-2から流れ込みの遺物が出土している。

小結 2間×2間以上の総柱の建物と推定できる。柱穴内出土遺物は図化できるほどのものではないが、9世紀後半から9世紀前半のものと推定できる。

156-SB (第15・18図、Ph.3)

位置 調査区西側に位置する。調査区外の北側に統くと推定できる。

柱配置 中央に東西に並ぶ柱の柱間距離は約1.8m(6尺)で柱穴の振り方は30~50cmの円形で深さ20cmである。158-SBの柱穴と重複していると推定できる。建物の軸はほぼ座標北である。

遺物出土状況 柱穴から時期の確定できる遺物は出土していない。

小結 154・155-SBが構成する柱穴をこの建物の主柱穴が襲し、158-SBに襲されていることから9世紀前半以前と推定できる。

157-SB (第15・18・27図、Ph.3)

位置 調査区の西側に位置する。調査区外の北側に統くと推定できる。

柱配置 柱間距離は約1.8m(6尺)である。径30~40cmの円形の振り方で、深さ20~50cmの柱穴である。柱痕跡は10~12cmである。建物の軸は、座標北よりやや西に振れている。

遺物出土状況 P-1から流れ込みの遺物(第27回21)が出土している。

小結 2間×2間以上の建物と推定できる。建物の時期も柱穴内の流れ込みの遺物から8世紀末から9世紀前半と推定できる。

158-SB (第15・18・27図、Ph.3)

位置 調査区の西側に位置する。

柱配置 柱間距離は約1.8m(6尺)である。径35~50cmの円形の振り

方で、深さ25~40cmの柱穴である。柱痕跡は10~15cmである。総柱の建物と推定できる。

遺物出土状況 流れ込みの遺物は各柱穴から出土している。図化できるものとしては、P-1・4・6から流れ込みの遺物が出土している。建物の軸は、座標北よりやや西に振れていると推定できる。

小結 156-SBの柱穴にP-1-4が切られていると考えられる。建物の時期はP-1の遺物が新しい様相があるので、9世紀前半から中頃(大宰府編年VI B期、網田編年VI期(6段階))と推定できる。

159-SB (第15・18図、Ph.3・6)

位置 調査区中央やや西側に位置する。

柱配置 柱間距離は約1.5m(5尺)である。径30~50cmの円形の振り方で、深さ25~40cmの柱穴である。柱痕跡は8~15cmである。建物の軸は、座標北よりやや西に振れている。

遺物出土状況 流れ込みの遺物がP-2・3・4から出土しているが、時期の判定できるものは、大宰府編年V期、網田編年V期(5段階)である。

小結 東側の中間柱が突出でないが、2間×2間以上の建物と推定できる。東側の152-SBを構成する柱と列が繋ぐ事から、ほぼ同じ時期の可能性がある。8世紀末から9世紀初頭まで上なる可能性がある。

149-SA (第15・18図、Ph.3)

位置 調査区の南東端に位置する。

柱配置 3基並ぶ柱位を確認したのみである。柱間距離は約1.5m(5尺)である。径50cmの円形の振り方で、深さ25~50cmの柱穴である。柱痕跡は10~15cmである。建物の軸は、座標北より東に振れている。

遺物出土状況 柱穴内からは流れ込みの繊片しか出土していない。

小結 柱列2間しか出土していないが、位置的に振り方の規模も比較的大きいことから2間×2間以上の建物と推定できる。時期的には151-SBの建物の時期と類似することから8世紀後半から9世紀前半の時期の可能性がある。

5 平安時代後期～鎌倉時代の遺構

(遺物包含層III a層上面検出遺構)

概要 (第19図)

掘立柱建物2棟及び檜列3箇所以上検出した。狭い範囲の調査であり、確定できないが、10世紀中葉以降、13世紀を中心とする時期の建物になる可能性がある。

(1) 掘立柱建物等 (第19図、Ph.4)

46-SB (第19図、Ph.4)

位置 調査区の西側に位置する。調査区の北側に統くと考えられる。

柱配置 柱間距離は南北約1.2m~1.35m(4尺~4尺半)、東西約1.5m(5尺)である。径30~50cmの円形の振り方で深さ20~60cmの柱穴である。柱痕跡は12~18cmである。建物の軸は座標北より10度東に振れている。(N~10°E)

遺物出土状況 遺物は、P-1・P-2・P-5等から出土しているが、いずれも流れ込みの遺物と考えられる。P-2から彩色を施した土器壺(第27回31)、土器壺(第27回33)、P-1からは黒色土器A類壺(第27回32)や須恵器壺(第27回30)が出土している。

小結 建物は西側に庇が付く2間×2間以上の掘立柱建物と推定できる。遺構の時期は、柱穴内の遺物から考えて網田編年VI期(第6段階)(大宰府編年VI B期)以降だとわかる。検出面から考えるとそれより後出すする10世紀後半から13世紀までと推定できる。

48b-SB (第19図、Ph.4)

位置 調査区の中央部に位置する。調査区外の南側に統くと考えられる。

柱配置 柱間距離は約1.5m(5尺)である。径30~40cmの円形の振り方で深さ20~40cmの柱穴である。柱痕跡は10~12cmである。建物の軸は座標北より10度東に振れている。(N~10°E)

遺物出土状況 図化に耐えにくい流れ込みの遺物が出土している。

小結 建物は南側に庇が付く2間×2間以上の掘立柱建物と推定できる。建物の時期を決める遺物が見当たらないが、10世紀から13世紀までと

推定できる。47-SAの状況と遺物包含層の状況からは12～13世紀と考えて良いと思われる。

47-SA (第19・27図、Ph. 4・7)

位置 調査区の西側に位置する。柱列を確認したのみである。西側及び北側に統くと推定できる。

柱配置 3基並ぶ柱列を確認したのみである。柱間距離は1.5mである。北側の2基の柱穴は径35～40cmで、南側の柱の掘り方の径が25cmとやや小さい。建物の軸は座標北より10度東に振れている。(N=10°-E)

遺物出土状況 柱穴内から流れ込みの遺物が出土している。須恵器坏の底部(第27回36)のは、第27回36が出土している。東播系須恵器と考えられ、13世紀を中心とした時期と推定できる。

小結 南側の柱穴の掘り方が他の柱穴に比べて小さいことから、南側に底を持つ建物の可能性がある。建物の時期については、東播系須恵器捏跡(こねばき)が遺入品でなければ、柱穴出土土器から13世紀頃と推定できる。他の土器は9世紀中葉以降であろうが、それよりは時代が下ると考えられる。

75-SA (第19・27図、Ph. 4)

位置 調査区の北に位置する。東西に柱列を確認したのみである。東側及び北側に統くと推定できる。

柱配置 3基並ぶ柱列を確認したのみである。柱間距離は2.1mである。東側の2基の柱穴は径35～40cmの柱穴で、西側の柱の掘り方の径が25cmとやや小さい。建物の軸は座標北より10度東に振れている。(N=10°-E)

遺物出土状況 柱穴内の50-SP(P-2)からは須恵器坏(第27回41)、58-SP(P-4)からは土師器坏(第27回42)及び綠釉陶器(第27回43)が出土している。

小結 西側の柱穴の掘り方が他の柱穴に比べて小さいことから、西側に底を持つ建物の可能性がある。建物の時期については、緑釉の時期からを考えると網田編年VII期(第6段階)、大宰府編年VIII期併行期以降10世紀前葉を中心とした時期以降と考えられるが、47-SAの検出状況から遺物包含層の状況からは、12～13世紀まで下る可能性がある。

73-SA (第19・27図、Ph. 4)

位置 調査区の西に位置する。南北に柱列を確認したのみである。東側及び北側に統くと推定できる。

柱配置 3基並ぶ柱列を確認したのみである。柱間距離は1.5mである。東側の2基の柱穴は径35～40cmで、西側の柱の掘り方の径が25cmとやや小さい。建物の軸は座標北より5度東に振れている。(N=5°-E)

遺物出土状況 柱穴内からは第27回40の椀が出土している。

小結 北側の柱穴の掘り方が他の柱穴に比べて小さいことから、北側に底を持つ建物の可能性がある。建物の時期については、網田編年VII期(第6段階)、大宰府編年IX期併行期以降10世紀前葉から中葉を中心とした時期以降と考えられる。

6 中世後期～近世の遺構

(包含層 II b 層検出遺構)

概要(第20図)

整然とした柱配置をしていないが、掘立柱建物や櫛列の可能性があるものを3種程度検出した。狭い範囲の調査であり、確定できないが、14世紀から近世にかけての時期の建物になる可能性がある。

(1) 掘立柱建物(第20図、Ph. 4・6・7)

162-SB (第20・27図、Ph. 4・7)

位置 調査区中央に位置する。

柱配置 東側中央の柱穴を検出できなかったが、5基の柱穴を検出した。柱穴の掘り方は35～45cmで、深さは12～25cm、柱間距離は1.8mである。建物の軸は座標北より40度東に振られている。(N=40°-E)

遺物出土状況 柱穴内から白磁の細片第27回2が出土している。

小結 建物の東側の柱穴を検出していないが、柱穴の深さが深いことから、2間×2間以上の櫛柱の建物の可能性がある。北東隅の柱穴の南側に統く柱穴が検出できなかったが、南側に建物が統く可能性があると

考えられる。建物の時期は白磁の出土から13世紀を中心とした時期以降と想定できる。

161-SB (第20・27図、Ph. 4・6・7)

位置 調査区中央に位置する。

柱配置 東側中央の柱穴を検出できなかったが、南東側は複数でIV層まで削平されていること等から5基の柱穴を検出した。柱穴の掘り方は20～40cmで、深さは20～30cm、柱間距離は1.5mである。建物の軸は座標北より30度東に振れている。(N=30°-E)

遺物出土状況 柱穴内から白磁の細片第27回2が出土している。

小結 建物は北側及び南側に統くと推定できる。柱穴の深さが深いことから、配置は不明であるが2間×2間以上の櫛柱の建物の可能性がある。建物の時期は白磁の出土から13世紀以降と想定できる

160-SB (第20・27図、Ph. 4・7)

位置 調査区中央に位置する。3本の柱列から構成される。南北方向の柱列は必ずしも平行でなくならぬと思われる。

柱配置 柱穴の掘り方は25～30cmで、深さは8～23cm、柱間距離は1.5mである。

建物の軸は座標北より平均17度東に振れている。(N=17°-E)

遺物出土状況 立穴内から須恵器・土師器の細片、黒色土器A類の細片が出土している流れ込みの遺物と考えられる。

小結 南北方向の柱列は必ずしも平行でなく、並びは悪いが調査区の北側及び南側に統くと左右に柱列がまっすぐになり、一棟の建物になる可能性として提示するにどめる。即ち、用途は別にして3列の柱列(櫛)になる可能性も高い。

7 遺物包含層出土遺物(第29図)

8世紀中葉から9世紀中葉頃【網田編年IV～VII期(4～7段階)】、大宰府編年IV～VII期併行期】までの土師器及び須恵器の比較的残存度の良い物を図示した。

また、第29回13・15・16は白磁である。第29回13は白磁V類で磁器区分D期、第29回15は白磁V類で磁器区分D期、第29回16は白磁V類で磁器区分D期である。

第29回14・17は青磁で、いずれも外間に連串の浮き彫りを持つものである。第29回14は青磁IV類で、磁器区分C期、第29回17は青磁IV類で、磁器区分C期と推定できる。

第29回18は面間に布目を持つ平瓦、第29回19は面間に布目を持つ丸瓦である。

第3節 VII区の調査の成果

1 調査の概要

第12次調査は、第8次調査のI区の西側張り出し部の北側及び南側を5m程拡張した調査区である。本来は設計変更に伴うもので本調査という形であるが、狭小の調査区ということで、表土を重機で工事に伴い掘削してもらい、半ば工事立ち会いという形で調査を実施した。

奈良時代から平安時代前期にかけて、堅穴建物6軒、土炕7基、平安時代前期の掘立柱建物2棟等を検出した。

2 基本土層(第37図)

VII区とほぼ共通する。IIa層はやや褐色が強い土で中世後期～近世までかかる可能性がある。IIb層(褐色シルト)は中世前期を中心とした解剖と考えられ、IIIa層(黒褐色シルト)は8世紀前半から9世紀後半にかけての層と推定できる。IIIb層はやや黄色褐色シルトが混ざる繩文時代から8世紀にかけての層と推定でき、IV層は黄褐色シルトで繩文時代晚期以前の層、二木本造跡群では現在のところ地山層と認定できる。

3 奈良～平安時代前期の遺構

(遺物包含層Ⅲ b ～Ⅳ層検出遺構)

概要 (第30・38図、Ph.4・5)

遺物包含層Ⅲ b 層上面～IV層までに検出した遺構である。調査区内に堅穴建物5軒以上を検出した。2軒以上重複していて住居の面積と推定できる箇所が2箇所あり、また、位置関係から同時に2軒、2時層以上にわたって堅穴建物が建っていたと推定できる。

8世紀中葉から後葉と9世紀前半を中心とした時期と推定できる。ただし、遺物包含層から奈良時代中期（8世紀中葉）の須恵器が出土していることから、その時期の堅穴建物が存在した可能性が高い。

同じく、掘立柱建物は8世紀後半から9世紀後半から10世紀までの時期と推定できる。遺構の重複により、出土遺物の十分な取り上げが困難であったとしても、大局的には堅穴建物から掘立柱建物へ移行したと考えられる。

(1) 堅穴建物 (第30・31図、Ph.4・5)

概要 (第30図)

調査区内にI区の堅穴建物の続きを2軒、II区では検出していなかったが、新たに4軒以上を検出した。北側の調査区は堅穴建物の重複が顕著で長い間堅穴建物を利用していた区域であることが改めて認識できる。

8世紀中葉から後葉と9世紀初頭を中心とした時期と推定できる。ただし、遺物包含層から奈良時代中期（8世紀中葉）の須恵器が出土していることから、その時期の堅穴建物が存在した可能性が高い。

掘立柱建物も9世紀前半ではじまり、9世紀後半から10世紀までの時期と推定できる。遺構の重複により、出土遺物の十分な取り上げが困難であったことや9世紀前半の土器型式の細分化ができていないため、掘立柱建物と堅穴建物が同時に存在したと考えなければならない状況ではある。しかし、堅穴建物から掘立柱建物への変遷という大局的な流れは想えると考えられる。

68-S1 (第30・31・45図、Ph.4・5・8)

位置 北側調査区の中央に位置する。I区から続く建物の北東部分を検出した。

形態 幅・長さともに約3.6mのほぼ正方形の掘り方を持つ小形の建物である。

柱穴 掘り方は南北柱間距離約2.0m、東西柱間距離約2.4mの4本柱を主柱穴とする堅穴建物と推定できる。北側にやや空間を持つ。

かまど かまどは検出されていない。90-S1と50-S1に焼されているため、検出されていないと考えられる。西側及び北側に造り付けのかまどを持つ可能性が高い。

遺物出土状況 墓土から第45図1～3等の流れ込みの遺物が出土している。第45図1以外は細部である。

小結 時期的には建物の重複関係や流れ込みの遺物等から考えて、網田編年IV期（第6段階）、大宰府編年IV～V期併行と位置づけられる。50-S1の遺物を流れ込みと見て8世紀後半から9世紀初頭を中心とした時期の建物と考えて良いと思われる。

68b-S1 (第30・31・45図、Ph.4・5・8)

位置 北側調査区の中央に位置する。I区から続くと推定できる建物の北東部分を検出した。68-S1のすぐ北側である。90-S1、50-S1、51-S1、68-S1等に北側及び西側を焼されているが、7軒以上切り合う二番目に古い建物である。

形態 幅・長さともに建物が重複しており不明である。南北には4.6m以下、東西には6m以下ということが判明できない。

柱穴 建物が重複しておれば柱穴は不明である。ただ、東西に柱があるものが主柱穴とすれば、柱間距離は約1.2mである。

かまど かまどは検出されていない。90-S1、50-S1等に北側及び西側を焼されていて不明である。

遺物出土状況 墓土から第45図4～9等の流れ込みの遺物が出土している。

小結 時期的には建物の重複関係や流れ込みの遺物等から考えて、網田編年IV～V期（第4～5段階）、大宰府編年IV～V期併行と位置づけられる。8世紀中葉から後半を中心とした時期の建物と考えて良いと思われる。建物配置から考えるとやや8世紀後半に近い時期の可能性がある。

8世紀中葉から9世紀初頭を中心とした時期の建物と考えて良いと思われる。そうすると重複する建物は、8世紀中葉から9世紀初頭を中心とした時に建て替えられた可能性が高い。

68c-S1 (第30・31・45図、Ph.4・5・8)

位置 北側調査区の中央に位置する。I区から続くと推定できる建物の一部分を検出した。68-S1のすぐ北側である。堅穴建物の掘り方の立ち上がり等も不明である。68b-S1、68-S1、90-S1、50-S1、51-S1等に北側及び西側を焼されていて不明である。7軒以上切り合う一番古い建物である。

形態 幅・長さとも建物が重複しており不明である。特に68-S1、69-SD等に重複してプランを復元できない。南北には4.2m以下、東西には4.5m以下ということしか判明できない。

柱穴 建物が重複しておらず不明である。ただ、北東側の柱穴しか検出できていない。柱径約28cm、深さ約16cm、柱底径は約10cmである。

かまど 検出されていない。重複する堅穴建物に焼されているため不明である。北側ないし西側に存在した可能性がある。

遺物出土状況 墓土から第45図10～12等の流れ込みの遺物が出土している。第45図10・11の土器は9世紀前半以降であるが、混入品であると考えられる。

小結 時期には建物の重複関係から考えて、網田編年IV～V期（第4～5段階）、大宰府編年IV～V期併行と位置づけられる。8世紀中葉から後葉を中心とした短い期間に建て替えられた可能性が高い。

68d-S1 (第30・31図、Ph.4・5)

位置 北側調査区の中央に位置する。I区から続くと推定できる建物の一部分を検出した。68b-S1のすぐ北側である。堅穴建物の掘り方の立ち上がり等も不明である。68-S1、68b-S1、68c-S1等に北側及び西側を焼されていて不明である。7軒以上切り合う一番古い建物である。

形態 幅・長さともに建物が重複しており不明である。南北には2.3m以下、東西には3m以下ということしか判明できない。

柱穴 建物が重複しておらず不明である。

かまど 検出されていない。もう一つの堅穴建物に焼されているため不明である。

遺物出土状況 墓土からは、時期の判明できる資料が出土していない。

小結 時期的には建物の重複関係から考えて、網田編年IV期（第4段階）、大宰府編年IV～V期併行と位置づけられる。そうすると重複する建物は、8世紀中葉から9世紀の間に狭い範囲に何度も建てられたと考えられる。

68b-S1 (第30・32・45図、Ph.5・8)

位置 調査区東側に位置する。I区88-S1の西側に位置する。

形態 幅・長さとも今後の調査区建物が重複しており不明である。南北には2.8m以下、東西には2.7m以下ということしか判明できない。

柱穴 建物が重複しておらず不明である。88-S1で検出された柱穴からすると2本柱の可能性が高い。

かまど 調査区東側で検出した。建物の掘り方の西側の造り付けのかまどである。袖の東側部分は工事断面のみ明確には検出できなかったが、I区で明確に検出されていないことから、5cmくらい伸びる程度である。燃焼した部分が柱径約24cm、深さ約10cm検出されている。また、袖部下部には墨書き跡も見られ、袖部を構築する際の地図と見られる。

遺物出土状況 墓土から第45図13・14・15等の流れ込みの遺物が出土している。第45図13・14は黒色土器A類である。柱穴等の遺物が混入した可能性がある。

小結 時期的には建物の重複関係（88-S1）や流れ込みの遺物等から考えて、網田編年IV～V期（第4～5段階）、大宰府編年IV～V期併行と位置づけられる。8世紀中葉から後半を中心とした時期の建物と考えて良いと思われる。建物配置から考えるとやや8世紀後半に近い時期の可能性がある。

(2) 土坑 (第37図、Ph.5・8)

11-SK (第37・46図、Ph.5・8)

位置 南側調査区の西端に位置する。一部を116-SP・11c-SPに焼されている。

形態 不整形ではあるが、長軸一辺65cm以上、短軸一辺約60cmの土坑である。円形を呈し、深さ25cm以上検出されたが、本来は35～40cm程で

あると推定できる。

遺物出土状況 赤彩の土師器坏の破片が出土しているが、ほとんど甕の細片である。流れ込みの遺物のみである。

小緒 出土土器を見るに第14国1の甕も包含層IIIb層と接合しているため、古い遺物が混入したと考えられ、土坑の時期は網田編年IV～V期(第4～5段階)、大宰府編年IV～V期併行と位置づけられる。8世紀中葉から後半を中心とした時期の建物と考えて良いと思われる。建物配置から考えるとやや8世紀後半に近い時期の可能性がある。

12-SK (第37図、Ph. 5)

位置 南側調査区の西側に位置する。西側を11-SKに東側を54-SKに接している。

形態 不整形ではあるが、一辺約0.7m以上、推定約80cmの土坑である。周丸方形円形を呈し、深さ約40cmである。

遺物出土状況 細片のみ出土している。流れ込みの遺物のみである。

小緒 土坑の時期は網田編年IV～V期(第4～5段階)以前、大宰府編年IV～V期併行以前と位置づけられる。8世紀中葉にさかのばる可能性がある。

14-SK (第37・46図、Ph. 5)

位置 南側調査区の東側に位置する。上層面を98-SK、98b-SKに西側を13-SPに切られている。

形態 不整形ではあるが、一辺約70cm以上、推定約80cmの土坑である。周丸方形円形を呈し、深さ約40cmである。

遺物出土状況 細片のみ出土している。流れ込みの遺物のみである。

小緒 土坑の時期は網田編年IV～V期(第4～5段階)以前、大宰府編年IV～V期併行以前と位置づけられる。8世紀中葉にさかのばる可能性がある。

(3) 堀立柱建物 (第38図)

(包含層IIIa・IIIb層上面検出遺構)

遺物包含層IIIa・IIIb層上面で、多数の柱穴を検出した。厳密に言うと、包含層IIIb層上面から柱穴上面までに検出した柱穴である。

現地で検出した段階で、建物の復元を試みたが、測量成果等により、若干柱配列を再考したものも多い。調査区が狭いため調査区外に伸びるものが多く、今後の隣接地の調査をする際には、検証する必要がある。以下個々に詳説する。

10053-SB (第38・39図、Ph. 5・8)

位置 北側調査区の西端に柱穴(220-SP)がかかる建物である。調査区外の北側に統くと推定できる。

柱配置 柱間距離は約2.4m(8尺)である。径約75～90cmの掘り方を持つ。柱痕跡は30cm以下である。柱穴の深さは南西の隔柱で約80cm、P-2のみや東に掘り方で小さく深さも約60cmである。建物の軸は、座標北よりやや東に振れている。

遺物出土状況 P-1(121-SP)～P-2(220-SP)まで遺物が出土しているが、堅穴建物が埋設してから掘削しているとすると、それらの遺物が掘り方の埋土に混入している可能性が高い。

小緒 今回検出されたP-1・P-2も北に長い柱穴で不整形になる。また、P-3も北側に長い不整形、P-1・P-2も断面の形状や掘り方の下場の形状が2段掘り状になっていることから、2つの掘り方が重複していると考えられ、建て替えが行われていた可能性が指摘できる。

また、時期的なこととしては網田編年期(第5段階)、大宰府編年期V期併行と位置づけられる遺物が多い。しかしながら、これらの土器群は、堅穴建物の埋没時期を示していると考えられ、建物の時期はやや下ると考えられる。第8次調査報告(10053-SB P-4; 220-SP出土遺物377; 報文P30)等から網田編年VI期(第6段階)、大宰府編年期VI期併行の時期と考えられ、9世紀前半以降と考えられる。

20001-SB (第38・41図)

位置 I区西側調査拡張区の141-I-1・2(二木本遺跡群III 熊本県文化財報告第256集 P4 第1図、第2図参照)に位置する。

柱配置 柱間距離は約2.1m(7尺)である。径約25～40cmの掘り方を持つ。深さは20～40cmで、柱痕跡はうまく検出できていない。堅穴建物掘削時に検出されたもので、堅穴建物に伴う柱穴の可能性があるとも考えられるが、配置及び20002-SB等と考え合わせると堅穴建物廃絶後の堀立柱建物と考えたい。建物の軸は、ほぼ座標北である。

遺物出土状況 堪穴建物が埋没してから掘削しているとすると、それらの遺物が掘り方の埋土に混入している可能性が高い。

小緒 3間×2間以上の堅穴建物として提示したが、すぐ南側に

が、配置及び20002-SB等と考え合わせると堀立柱建物と考えたい。建物の軸は、ほぼ座標北である。

遺物出土状況 堪穴建物が埋没してから掘削しているとすると、それらの遺物が掘り方の埋土に混入している可能性が高い。

小緒 2間×2間の堅穴の建物として提示したが、すぐ北側に20001-SBと並んで配置されている建物(20002-SB)が存在する。北側に長く続く建物の可能性も指摘しきたい。そうすると2間×4間の建物になる。また、時期的なこととしては52-SIが埋没してからの建物であること、20002-SBとの位置関係を考えると桁が揃うこと等から、ほぼ同時期と考えられる。柱穴の重複により10053-SBより20002-SBが古い。

一方、52-SI 墓出土土器は網田編年IV～V期(第4～5段階)、大宰府編年期VI期(第5段階)～V期併行と位置づけられる。これらの土器群は堅穴建物の埋没時期を示していると考えられ、建物の時期はやや下ると考えられる。

それらのことから建物の時期は網田編年VI期(第6段階)、大宰府編年期VI期併行の時期を中心とした時期と考えられ、9世紀前半かや上ると考えられる。

20002-SB (第38・41図)

位置 I区西側調査拡張区の141-I-1・2(二木本遺跡群III 熊本県文化財報告第256集 P4 第1図、第2図参照)に位置する。20001-SBの北側1間(2.1m 7尺)分離して位置する。

柱配置 柱間距離は約2.1m(7尺)である。建物の軸はほぼ座標北である。径約20～50cmの掘り方を持つ。柱痕跡は約10cm、深さ約40cmである。一部堅穴建物掘削時に検出されたもので、堅穴建物に伴う柱穴の可能性があるとも考えられるが、配置及び20001-SB等と考え合わせると堅穴建物廃絶後の堀立柱建物と考えたい。建物の軸は、ほぼ座標北である。

遺物出土状況 堪穴建物が埋没してから掘削しているとすると、それらの遺物が掘り方の埋土に混入している可能性が高い。

小緒 2間×2間以上の堅穴の建物として提示したが、すぐ南側に20002-SBと並んで配置されている建物(20001-SB)が存在する。南側に長く続く建物の可能性も指摘しきたい。(20001-SB 参照)

また、時期的なこととしては20001-SBとの位置関係を考えると桁が揃うこと等からほぼ同時期と考えられる。(20001-SB 参照)

20003-SB (第38・42図)

位置 I区西側調査拡張区の141-I-1・2(二木本遺跡群III 熊本県文化財報告第256集 P4 第1図、第2図参照)に位置する。20002-SBとほぼ重複するように位置する。

柱配置 柱間距離は約2.1m(7尺)である。径約20～40cmの掘り方を持つ。柱痕跡は約10cm、深さ約20～40cmである。一部堅穴建物掘削時に検出されたもので、堅穴建物に伴う柱穴の可能性があるとも考えられるが、配置及び20002-SB等と考え合わせると堅穴建物廃絶後の堀立柱建物と考えたい。建物の軸は、ほぼ座標北である。

遺物出土状況 堪穴建物が埋没してから掘削しているとすると、それらの遺物が掘り方の埋土に混入している可能性が高い。

小緒 2間×2間以上の建物と推定できる。北側に長くと推定できる。20002-SBに柱の掘り方が一部壊されていることから20002-SBより古い時期と考被される。(20002-SB 参照)

20004-SB (第38・42図)

位置 I区西側調査拡張区の141-I-1・2(二木本遺跡群III 熊本県文化財報告第256集 P4 第1図、第2図参照)に位置する。10053-SBの北側1間(2.1m 7尺)分離して位置する。

柱配置 柱間距離は約2.1m(7尺)である。側柱は径約35～40cmの掘り方を持つ。柱の間柱は径20～25cmで側柱と比べて小さい。柱痕跡は約10cm、深さ約30～50cmである。一部堅穴建物掘削時に検出されたもので、堅穴建物に伴う柱穴の可能性があるとも考えられるが、配置及び20002-SB等と考え合わせると堅穴建物廃絶後の堀立柱建物と考えたい。建物の軸は、ほぼ座標北である。

遺物出土状況 堪穴建物が埋没してから掘削しているとすると、それらの遺物が掘り方の埋土に混入している可能性が高い。

小緒 3間×2間以上の建物と考えられる。建物内蔵の柱の掘り方が側柱より小さくことから床架(柱)の可能性がある。

また、時期的なこととしては20002-SBの柱の掘り方に横唐(切ら)れ、

20003-SB を壊して（切って）いるという重複関係を考えると建物の時期は、建物の時期は網田編年期（第5～6段階）、大宰府編年期V～VI期併行の時期を中心とした時期と考えられ、9世紀前半を中心とした時期と考えられる。

20005-SB（第38・42図）

位置 I区西側調査拡張区の141-I-1・2（二本木遺跡群III 熊本県文化財報告第256集 P4 第1回、第2回参照）に位置する。10053-SBの北側1間（2.1m・7尺）分離れて位置する。

柱配置 柱間距離は約1.8m（6尺）である。建物の軸はほぼ座標北である。径約45～60cmの掘り方を持つ。柱痕跡は約10～15cm、深さ約40～50cmである。一部堅穴建物掘削時に検出されたもので、堅穴建物に伴う柱穴の可能性があるとも考えられるが、堅穴建物廃絶後の掘立柱建物と考えたい。建物の軸はほぼ座標北である。

遺物出土状況 壑穴建物が埋没してから露出しているとすると、それらの遺物が掘り方の埋土に混入している可能性が高い。

小結 2間×2間以上の建物と考えられる。純粋の建物の可能性が高い。また、時期的なこととしては10053-SBに埋蔵（切ら）されているという重複関係を考えると建物の時期は網田編年V～VI期（第5～6段階）、大宰府編年期V～VI期併行の時期を中心とした時期と考えられ、8世紀末～9世紀前半を中心とした時期と考えられる。

まとめ 壑穴建物との前後関係の詳細は、現地調査で必ずしもつかみきれていないが、柱穴の深さ等を考えると大勢的には壗穴建物の廃絶後、8世紀末から9世紀前半以降、この地区は堅穴建物が建て替えられ、しかも柱穴の規模から見て、10053-SBに代表されるように比較的大規模な建物が建てられる区域であると考えられる。

また、時期的には9世紀前半以降としたが、周辺の状況から、10世紀に下る可能性も考えたい。

（4）溝（第37・38図、Ph. 5）

08-SD（第37・38図、Ph. 5）

位置 南側調査区中央に北西方向から西南西方向に伸びる。I区から続く溝であると思われる。

形態 今回検出した部分からは形態を推定するのは、困難であるが、幅50cm以上、2m以上の溝である可能性が高い。検出面は、IIIb層上面である。

遺物出土状況 今回調査した箇所には遺物は出土していないが、I区では出土している。出土遺物は、土師器甕、环等の流れ込みの細片しか出土していない。

小結 溝の時期は流れ込みの遺物ではあるが、あえて推定すると、網田編年V期（5段階）、大宰府編年V～VI期併行期にあたり。

溝はI区の394-SD、395-SD、399-SD等に続くと考えられる。検出面が不明だったが、IIIb層上面から掘り込んでいたことからも上記の推定期を裏付けるものと言える。

4 平安時代後期～鎌倉時代の遺構

概要（第43図）

南側調査区内に5基以上土坑を検出した。98-SK等の様に比較的浅い土坑と02-SK・5Kの様に深い土坑を検出した。いずれも方形を呈するもので前者の一部は墓の可能性があり、後者は貯藏穴で、後から埋められた状況のものであると考えられる。

（1）土坑（第43図、Ph. 5・8）

54-SK（01-SK）（第43・49図、Ph. 5・8）

位置 南側調査区の中央や西側に位置する。一部調査区外南側に続いている。遺物包含層IIIa層上面から検出している。VII区調査時点では01-SKで遺物等を取上げている。

形態 一致約1.6mの隅丸形の土坑である。深さ85cmを測る。埋土は2層に大別できるが、軽石ブロック状の土を含み明らかに人为的に埋められている。

遺物出土状況 完形に近いものは含まれないが、量的には須恵器、土師器等を中心に出土している。

小結 平面プランが方形に丁寧に掘られている事や深さが85cmと深いことや埋め戻されている事等から貯蔵穴の可能性がある。

出土土器を見ると型的には4段階以上の幅広い時期のものが含まれる。一番古い様相は、第49図20・9・1・19等、次の段階は第49図16・18・3等、さらに次の段階が第49図4・7・11・12等である。

遺物の大勢としては、土坑の時期は網田編年IV～V期（第4～5段階）、大宰府編年IV～V期併行と位置づけられる。検出面や土坑周辺の遺構の分布から見て、肉面磨きを丁寧に施している第49図21等を黒色土器A類の破片を見て、10世紀前半から中葉の時期と比定したい。

98-SK（第43図、Ph. 5）

位置 南側調査区の東側に位置する。I区から続く西側の輪郭が一部検出できていない。遺物包含層IIIa層上面から検出している。

形態 長軸約1.3m、短軸1mの隅丸形の土坑である。深さ26cmを測る。遺物出土状況 底面より5cm程度いた状況で口径16cmの完形の土師器坏（桙）（黒8次報告P63、第61回323）が出土している。

小結 平面プランが方形に丁寧に掘られている事や完形の土器が1つ出土していることを考慮すると、墓の可能性がある。遺物の時期としては口径15.4cmと大型化していることから12世紀前半を中心とした時期と比定したい。

98b-SK（第43図、Ph. 5・8）

位置 南側調査区の東側に位置する。東側が98-SKに續いている。南側が検出されていない。遺物包含層IIIa層上面から検出している。

形態 径80cm以上のやり隅丸形を呈する楕円形の土坑と考えられる。深さ約20cmを測る。

遺物出土状況 流れ込みの土器の細片が出土している。

小結 遺物は周辺からの流れ込みの可能性が高く、遺構の上限を示すに過ぎない。時期は重複関係や形態や深さ等から見て、98-SKよりやや小さのぼるとしか推定できない。土坑の性格としては墓の可能性もある。

（2）溝（第44図、Ph. 4・5）

115-SD（第43・44図、Ph. 4・5）

位置 I区西側拡張区の西側に位置する。北側調査区西端、南側調査区東側を通る南北や東側に掘られる溝を検出する。調査区外北側・南側に続いている。遺物包含層IIIa層上面から検出している。

形態 幅約45cm、深さ約45cmのU字状を呈する溝である。北側から南側に流れていると推定できる。方向は南側については座標軸の南北方向に沿うがI区西側拡張区の中央付近で東側に屈曲する。埋土は2層に分けられるが、流れ込みの土で埋まつたと考えて良いと思われる。

遺物出土状況 流れ込みの細かい破片が出土している。やや古い様相を示すと考えられる第50回9等の黒色土器B類が出土している。

小結 115-SDに確認して溝があることが、北側調査区や南側調査区で確認される。少なくとも2時期である。また、I区西側拡張区で115-SDに切られた南北方向に伸びる溝がある。I区西側拡張付近で方向をかえている事から、区画の変更等の可能性も指摘されよう。

溝の時期は黒色土器B類を伴っている事が10世紀後半から12世紀にかけてのものと推定できる。

5 遺物包含層出土遺物

遺物包含層IIIa層出土土器は、様々な段階の遺物が出土している。遺構の頂で触れた遺物以外のものと比較的残存率の良いものを図化した。（第50回）

第48図1は須恵器坏で10世紀前半、第48図2は須恵器坏の部、または盤と推定できる。第48図4は底部系切りの坏、第48図6は横方向へラミガキを施した土師器坏、第48図7は内面に布目を持つ丸瓦である。第48図9は土甕、第48図10は石鍋の破片である。最初に穿孔部分に注目して、把手の一部とも見られたが、磨いている部分も不自然で、石鍋の破片を再加工していると見るのが妥当と思われる。用途は不明である。

第Ⅳ章 調査のまとめ

第1節 第8次調査と第12次調査の分析

(1) 区画について（第56・57図）

二木本遺跡群のように官術と推定される遺構を検出する際に気をつけるのは、区画の問題であろう。

区画する遺構としては溝である。ここでは第8次調査で検出した遺構に注目したい。まずは、110・56・57・59-SDで南北方向にはX=23,950付近を東西に走っているものである。南北方向に走ってY=28,980～28,990にかけて東西を区切っている溝である。56-SDの遺物出土状況から見ると中世の混入遺物はあるものの出土状況から見ると網田編年でIV～V期（4～5段階）の時期に埋まった可能性が高い。遺物の式様から見ると57-SIが56-SIより古い。前後関係が逆になる可能性がある。

また、調査区の南側に西北西から東南東に向かって伸びる溝も大きな区画である。この溝の方向は一部南側で検出されている堅穴建物の掘り方の方向に類似する。また、南側で復元されている堅柱の建物の主輪方向の掘れにも近い。

東西を区画する南北溝のうち、112-SDや326-SDは切り合いで（重複）関係の検討は必要であるが、8世紀中頃へ後半にかけての須恵器等が出土しており、古くなる可能性がある。252-SD, 317-D, 318-SD等は網田編年V期（5段階）併行期を中心とする時期と考えられる。325-SDは遺物から網田編年VI期（6段階）併行期で大府府編年VII期併行期と考えられ9世紀後半を中心とする時期と考えられる。他にも黒色土器や高さの高い楕円形の土師器を出土する溝も見られ、10～11世紀にかけての溝（46-SD, 43・233-SD, 493-SD等）も見られる。ただ、重複した複数の溝からは、系差り底の土師器や瓦器等の12世紀後半以降と推定できる遺物は見られない。

建物を囲む溝（雨落ち溝）としては、102・370・406・412-SD等がある。102-SDからは黒色土器A類の楕円形が出土しており、10世紀前半から中葉と考えられる。370-SD, 406-SD, 412-SDからは、赤彩の土師器や薄手の土器が出土しており、網田編年V～VI期（5～6段階）（大府府編年V～VII期併行期）8世紀末から9世紀にかけての時期と推定できる。調査区の中央には、規模は2間×4間を中心とした南北に長い建物が中心と位置している。時期的には壁画が整然となる時期と考えられる。また、建物を囲む溝の種類やその他の堅立柱建物の構造等から考えて、建物を囲む溝がないものも9世紀以降を中心とする建物と推定でき、ピットの重複が多いことや重複した東西及び南北方向の溝等を考慮する上や46・48-SD等10世紀から11世紀にかけての区画がIV～V段階の遺物の西側に比較的直線的にしかも前時期より南北方向を指向して造られていると考えられる等から9世紀から11世紀にかけて建物が造られてると推定できる。

(2) 堅立柱建物について（第55・56・57図）

基本的には堅穴建物から堅立柱建物への変遷と考えられる。ただ、網田編年V期（5段階）（大府府編年V期併行）の段階で機能系による併存を考えた場合には否定できる現状はない。

堅立柱建物については、掘削面で検出し、逐次新しい時期の遺構を掘削して、遺構面をしつらうしながら、遺物包含層の状況も検討しながら発掘をしなければならないのは自明である。しかしながら、二木本遺跡群は、遺物包含層の残存も良く、遺構面は少なくとも古代でも2～3面、中世でも数面あると考えられるが、明確に認識できない。また、中世の遺構も古代の遺構も掘削面の深度や沖積地という立地での土の認識がかなり困難である。そのため、掘削時における、埋土への混入等を考えると掘取の時期を特定するのに容易ではない。

しかしながら、いわゆる網田編年V期（5段階）には、堅立柱建物は現れる。柱穴出土遺物等から10023-SD及びその西側の建物がその時期と推定できる。10001-SB, 10002-SB, 10005-SBは次の段階にかけての建物と推定できる。12世紀後半以降の建物は、第8次調査では特定しにくいが、(1)区画で記述したように10～11世紀の建物群は存在していたと考えられる。

建物の性格としては、I区中央部付近は、鉄の鍊前が出土している点や落ち溝の痕跡が見られる頃等を考えると、全部の建物とは言えないとしても倉庫機能を持つ建物の可能性がある。

また、VII区は狭小の調査区であり建物復元が難しいが、堅柱の建物が

いくつか存在する可能性は指摘できよう。また、I区の南側については、建物の方向がやや東にふれているものの堅柱の建物が復元できており、また柱穴から見てあと数棟の堅柱の建物を復元できる可能性がある。また、既前も出土していることからこれらも倉庫の区域であった可能性を指摘して置きたい。南北方向の建物が多いことも関係している可能性がある。

もう一つ指摘しておかなければならぬのは、掘り方の大きな建物が10053-SD以外検出できていない点である。熊本駅西側や第34次溝査のSB-12・13・20、35次調査区の3間×5間の規模の建物に匹敵するものが10053-SBのみである。第39次調査や合同令谷H2種調査区でも大形の掘立柱建物はないようである。電車通りの調査区で掘り方の大きな建物が検出されているが、大型の建物が密集しているような状況ではない。

また、付け足しではあるが、X=23,989.5、Y=28,968付近で約50cm四方の礫石及び周辺に約7cmくらいの粗石を点検出している。時期的に限定するのは難しいが、検出レベルから考えて10～11世紀のものと推定できる。第57図に位置を点で示している。

(3) 堅穴建物について（第56・57図）

二木本遺跡群第8次調査（以下「8次調査」）及びVII区の調査及び7区の松原区の調査及び熊本市二木本遺跡群市調査第34次（以下「34次調査」）・39次調査区（以下「39次調査」）の成果を見ると今回調査をした部分は、まず、堅穴建物が8世紀前半から建てられた区域である。また、8次調査II区2001-SI, 2004-SK等は前葉から中葉にかけての出土遺物を持ち、2016-SK, 2018-SKも同様な時期までさかのぼると推定できる。

I区では埋土に混入はあるものの、50-SI・51-SI・880-SI・61-SI等8世紀前葉以前にさかのぼると考えられる建物が多い。今回調査したVII区でも同様で、9世紀初頭までは、堅穴建物が重複して出土している地点が2ヶ所存在する。（1号・2号住居、4～14・17号住居）、国土標準標尺Y=29,000の西側に堅穴建物が集中している傾向がある。

大きさについては、大小様々である。34次調査の堅穴建物の大きさは8世紀前半以前、8世紀後半の堅穴建物は5m近いものも多いが、8世紀末から9世紀初頭にかけては3・4-SI等数軒の建物に過ぎない。重複関係による複数状況によるが、8次調査のI区の西側拡張区はや古い時期の堅穴建物が大きく、新しい時期のものが3m以下の小型の建物と言える。VII区も同様なことが言えそうであるが、I区中央部II区について、古い時期に多くの小型の建物が存在するようである。現状では、時期差に開拓的なエリアとしての機能差が加わって複合的な関係を有していると見たい。

(4) 陶器器からみた第8次調査区（第51・52・53・54図）

8次調査区の古代から中世の中国製陶器及び縄繩・灰陶陶器の10mごとの分布を図にした。時期は大府府編年による。（表未完例）

大府府編年V～VI型式（磁器区分Aの古段階）では北西部と南東部分に集中する。これは、141-6・5・6グリッドに東西に伸びる135SDとおそらくそれに伴う建物の影響であろう。141・1・J-3・4付近が多いのは、南北方向の区画の構の存在した事を表すものと思われる。

磁器区分A期では、北半分から中央付近で分布が大きくなる。東側の分布は堅立柱建物の影響である。西側は南北方向の溝による区画のためであろう。縄繩陶器の分布は量的に少ないながら10004-SB周辺に及び135-SD周辺に数点見付かっているのも磁器区分A古からA古段階の傾向に近い。

12世紀（磁器区分C期）以降は41-SD; X=23,935付近に東西に伸びる溝（41-SD）及び66-SE（141-1-5グリッド）付近調査区中央部からやや北側にかけて分布する。

また、南東隅にも磁器区分C期には白磁が分布する。これは、東に伸びた堅立柱建物の影響とも考えられる。

第2節 まとめ（第51・52・53・54・55・56・57図）

熊本市教育委員会第34次調査の報告書で指摘しているようにこの合同庁舎の敷地付近は、東を官衙区域、西を居住区域と推定されている。

今則、狭小な調査区ではあったが、県第8次調査区をどう評価するかの材料は得たと考えられる。ただ、狭い調査区であったため、道幅の広がりや評価の点では難点が多い。今回遺跡をどう評価するかに重点を置くあまり過大評価や事実誤認もある点を了承して頂き、まとめをしたい。

合同庁舎敷地西側は、県第8次調査II区に代表されるように堅穴建物の重複が多い区域である。8世紀中葉から9世紀前半にかけて居住域であろう。熊本市教育委員会第39次調査の細長い調査区でも確認されたようにVI区でも特に東側は堅穴建物が集中している状況が確認できた。また、VI・VII区で確認されたように掘立柱建物を推定できた。その始まりは、網田編年V撰（大宰府編年V期併行）で、堅穴建物との同時併存に関しては課題は残るが、現状では大局的には堅穴建物から掘立柱建物への移行として把握できよう。

掘立柱建物は2間×4間程度の小規模建物中心で、しかも南北に長い建物が中心であった。調査区の南側は堅穴建物もやや散在した状況で、区画の方向が古くからや東に伸びている状況であった。

I区南側で復元された掘立柱建物（10053-SB）も3間×3間の細柱の建物で周囲から縫前の一部が出土していることから倉庫的な機能を持つ物で、他にも純柱の建物が復元できそうため、I区調査区南側からVI区にかけては倉庫的な機能を持つ区域であった可能性を指摘した。

この地点から300m南東の熊本市教育委員会の第29次調査では9世紀後半の縦柱の建物と東西に異なる構を横出している。こうした区域の分析を進めなくてはならないが、以下のように考えておきたい。

すなわち、当該区域は時期的には機能差を指揮できようが、居住域で一部に倉庫の機能を持つ建物がいくつか存在する区域であるとまとめられる。

また、計画的な区画、いわゆる整然とした区画とは敵愾には難しいが、8世紀代から大きく溝で区画され、少なくとも10世紀以降（9世紀後半の可能性もある）は溝で長方形に計画的に区画された区域になったと考えられる。

また、12世紀以降は、I区の北側の41-SD周辺及び中央部、南東隅に分布することから、調査区中央部にも掘立柱建物があった可能性が高い。66-SEや247-SE（141-P-1グリッド）を周辺に建物群が存在したのであろうが、これらを構成している柱穴がIV層まで到達していないものもあつたであろうし、調査では復元が難しかつたと考えられる。

（主な参考文献）

- 1.『二本木遺跡群IX』熊本市教育委員会 2009
- 2.『二本木遺跡群X』熊本市教育委員会 2009
- 3.『二本木遺跡群III』熊本市教育委員会 2007
- 4.『二本木遺跡群II』熊本市教育委員会 2007
- 5.『二本木遺跡群 第22次調査区』『熊本市埋蔵文化財調査年報』
熊本市教育委員会 2007
- 6.網田龍生「古代肥後の土器」『大江遺跡群1』熊本市教育委員会 2007
- 7.網田龍生「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究』
龍田考古会 1994
- 8.網田龍生「肥後における回転台土器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 中世土器研究会 1994
- 9.山本信夫「北部九州の7～9世紀中頃の土器」古代土器研究会第1回シンポジウム資料 奈良国立文化材研究所 1992
- 10.『太宰府市史』考古資料編 1999
- 11.舟山良一「牛頭窓跡群出土須恵器」、中島恒次郎「年代推定のための手続き」九州土器研究会第11回シンポジウム資料 2000
- 12.舟山良一・松本敏三・池田栄史『須恵器集成図録』第5巻
西日本編 1996
- 13.山口信夫「大宰府城坊跡XV-陶磁器分類編-」
太宰府市教育委員会 2000
- 14.『大宰府条坊跡26』第225次調査 太宰府市教育委員会 2004

卷之三

VI区出土遺物観察表2(堅穴建物・土坑)

目次 番号	遺物名	グリッド番号	出土場所	種別	寸法 (cm)	位置	寸法 (cm)	高さ (cm)	構成	構 造 (%)	施 土	施 成	色 色 国	保 存 状 態	保 存 号		
23	42.5	SS-W5	壁面 - 雨落 - 北西 柱下 - 壁面	土坑器	井	井干形 - □	(13.6)	2~	ヘアドリーパンダ	50~ナダ~70ミキ(ナダ)リテリ	井干形 - 黒色地	井干形 - 黒色地	井干形 - 黒色地	井干形 - 黒色地	1/100T 134~		
23	42.5	SS-E5	柱下 - 壁面	土坑器	井	井干形 - 一形	(10.6)	28	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 98~		
23	42.5	SS-W5	雨落 - 下 - トレンチ - 北西 壁面 - 雨落	土坑器	井	口縁 - 一形	(27.7)	5.7~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 263~		
23	42.5	-	壁面 - 北西	土坑器	井	井干形	(7.0)	1.8~	田山ナダ - ハラカツメタケナダ	田山ナダ - ハラカツメタケナダ	井石 - 雪母	井石 - 雪母	井石 - 雪母	井石 - 雪母	1/100T 7~		
23	42.5	SS-W5	壁面 - 井干形 - 北西	土坑器	井	井干形 - 一形	(17.0)	6.8~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 129~		
23	42.5	10.5	壁面 - 雨落	土坑器	井	口縁 - 一形	(10.7)	2.1~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 7~		
23	42.5	33.5	壁面 - 雨落	土坑器	井	井干形 - 一形	(7.6)	1.9~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 36~		
23	42.5	10.5	壁面 - 雨落	土坑器	井	井干形	(9.4)	1.7~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 27~		
24	1	111.5	井干形 - 地上	土坑器	井	口縁	-	3.9~	田山ナダ	田山ナダ	井石 - 黒色地	井石 - 黒色地	井石 - 黒色地	井石 - 黒色地	1/100T 154~		
24	2	111.5	W5	壁面 - 雨落 (底) 井干形 - 地上 (井干形)	土坑器	井	井干形	-	10.2~	平井切引 - 田山ナダ - 田山ナダ - 井干形 - 地上	平井切引 - 田山ナダ - 田山ナダ - 井干形 - 地上	外表面 - 黄色地	外表面 - 黄色地	外表面 - 黄色地	外表面 - 黄色地	1/100T 344~	
24	3	111.5	SS-W5	井干形 - 井干形	土坑器	井	口縁 - 一形	(16.0)	11.2~	40	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黒色地	井石 - 黒色地	井石 - 黒色地	井石 - 黒色地	1/100T 338~
24	4	111.5	W5	井干形 - 井干形	土坑器	井	口縁	(25.7)	2.8~	田山ナダ	田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 339~	
24	5	111.5	井干形 - 井干形 (7)	土坑器	井	井干形	-	3.7~	田山ナダ	田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 335~		
24	6	111.5D	W5	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形 - 井干形	-	7.7~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ - 井干形 - 地上	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ - 井干形 - 地上	外表面 - 黄色地	外表面 - 黄色地	外表面 - 黄色地	外表面 - 黄色地	1/100T 333~	
24	7	111.5D	W5	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形 - 井干形	(24.2)	-	11.1~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 337~
25	1	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	口縁 - 一形	(13.2)	2.9~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 182~	
25	2	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形	-	2.1~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 122~	
25	3	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	口縁 - 一形	(13.2)	3.2~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 223~	
25	4	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形 - 井干形	-	7.6	26~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 223~
25	5	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形	-	(9.5)	1.1~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 223~
25	6	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形	-	1.0~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 223~	
25	7	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形 - 一形	-	1.9	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 221~	
25	8	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形 - 一形	(8.4)	3.8~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 198~	
25	9	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形	-	(10.0)	3.4~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 206~
25	10	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形	-	(6.9)	0.2~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 204~
25	11	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形 - 一形	(13.0)	4.0~	田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 191~	
25	12	41.5K	SS-ED	井干形 - 井干形	土坑器	井	井干形 - 一形	(14.0)	0.2	27	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 191~
25	13	77.9K	W5-W10	壁土 - 壁	土坑器	井	井干形	-	(7.6)	0.95~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 181~
25	14	77.9K	W5-W10	壁土 - 壁	土坑器	井	井干形 - 一形	-	(9.4)	1.6~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	井石 - 黑色地	1/100T 185~
25	15	77.9K	W5-W10	壁土 - 壁	土坑器	井	井干形	-	(7.1)	1.0~	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	田山ナダ - 田山ナダ - 田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 183~
25	16	81.9K	W5-W10	壁土 - 壁	土坑器	井	口縁	-	2.3~	田山ナダ	田山ナダ	井石	井石	井石	井石	1/100T 183~	

表2

目次番号	遺物名	グリッド番号	出土層位	種別	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	構成	面型 (%)	地 土	表面	色 調	個 数	備 考	保存 状 態		
27	24	158.30	W010 p.1	土器類	片	直形一窓台	—	(6.0)	2.1~ 田輪ナデ	田輪ナデ	雲母(褐色)	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 (5) 1097/2-31-1 黄褐色 (5) 1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	57 30	7	
27	25	158.30	W010 p.4	土器類	片	直形	—	—	2.5~ 田輪を入れる 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	113	23	
27	26	158.30	W010 p.1	土器類	片	口縁	—	—	1.6~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	72	30	
27	27	158.30	W010 p.1	土器類	片	瓦	—	(5.5) 1.9	(原)(5) 1.9	(原)(5)タキ （原）209.50の土器 （原）1097/2-31-1 黄褐色	瓦	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	102	7
27	28	46.90	W010 p.1	土器類	片	人井形	—	(7.6)	1.2~ 田輪ナデ、窓台ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	120	30	
27	29	46.90	W010 p.1	土器類	片	口縁一窓台	—	(10.4)	6.4 3.1	田輪ナデへラウンドり窓台 田輪ナデへラウンドり窓台	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	13	32
27	30	52.50	W010 p.1	土器類	片	口縁一窓台	—	(13.5)	(0.2)	田輪ナデへラウンドり窓台 田輪ナデへラウンドり窓台	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	121	6
27	31	46.90	W010 p.1	土器類	片	直形	—	(5.1)	田輪ナデ 田輪ナデへラウンドり窓台	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	13	31	
27	32	46.90	W010 p.1	土器類	片	直形一窓台	—	(6.1)	1.6~ 田輪ナデへラウンドり窓台	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	34	71	
27	33	46.90	W010 p.2	土器類	片	口縁一窓台	—	(15.0)	—	田輪ナデへラウンドり窓台 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	36	176
27	34	46.90	W010 p.2	土器類	片	直形	—	—	2.1	田輪ナデへラウンドり窓台 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	14	33
27	35	46.90	W010 p.2	土器類	片	直形	—	—	0.0~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	30	53	
27	36	47.50	W010 p.3	土器類	片	直形一窓台	—	(25.6)	—	田輪ナデへラウンドり窓台 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	35	146
27	37	47.50	W010 p.2	土器類	片	口縁一窓台	—	(7.6)	1.3~ 田輪ナデへラウンドり窓台	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	128	195	
27	38	46.90	W010 p.2	土器類	片	直形	—	—	3.3~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	162	94	
27	39	72.50	W010 p.3	土器類	片	直形	—	(12.0)	—	田輪ナデへラウンドり窓台	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	18	40
27	40	72.50	W010 p.3	土器類	片	直形	—	(14.9)	8.2	田輪ナデへラウンドり窓台	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	127	177
27	41	72.50	W010 p.3	土器類	片	直形	—	(18.0)	3.1~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	203	141	
27	42	72.50	W010 p.4	土器類	片	直形	—	(11.0)	3.1~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	80	—	
27	43	72.50	W010 p.4	土器類	片	口縁	—	(18.0)	—	田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	71	114
27	44	160.30	W010 p.3上層	土器類	片	直形	—	—	0.0~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	51	37	
27	45	160.30	W010 p.5	土器類	片	直形	—	—	1.4~ 田輪ナデ	田輪ナデ	丸	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	丸	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	64	—	
27	46	160.30	W010 p.6	土器類	片	瓦	—	(7.7) 9.3	(原)(5) 9.3	(原)(5)直形窓台 （原）1097/2-31-1 黄褐色	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	70	7
27	47	161.30	W010 p.5	土器類	片	直形	—	—	2.2~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	113	23	
27	48	161.30	W010 p.5上層	土器類	片	直形	—	—	2.1~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	161	25	
27	49	161.30	W010 p.5上層	土器類	片	直形	—	(7.6)	5.9	田輪ナデへラウンドり窓台 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	48	—
27	50	161.30	W010 p.5上層	土器類	片	直形	—	(14.5)	2.2	田輪ナデへラウンドり窓台 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	49	76
27	51	161.30	W010 p.5上層	土器類	片	直形	—	—	8.2	1.6~ 田輪ナデ	田輪ナデ	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	角	(5) 1097/2-31-1 黄褐色 （内）1097/2-31-1 黄褐色	1.5	50	154

層位	標高	遺物	遺物名	グリッド	出土層位	種別	形状	形 位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	断面	面 素 (%)	面 素 (%)	地 士	鉄成	色 艶	質 素	保存状	基準	地 号	説				
27	52 (16) W0	西側	柱頭	1	直筒	柱	斜形	—	—	10-	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	74	12	7			
27	53 162.98	西側	柱頭	5	直筒	柱	斜形	—	—	21-	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	73	44	7			
27	54 162.98	W0	柱	3	直筒	柱	斜形	—	(8.5)	(8.0)	(8.0)	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	78	7			
28	1 211.9P	W0	柱	1	直筒	柱	斜形	H	口径~高台	15(2)	9.6	5.2	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ・圓筒ナデ・ナデ	圓筒	111.9P	上	6								
28	2 25.9P	東側	柱	3	直筒	柱	斜形	H	口径~高台	—	(8.0)	36-	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	1/354.4/10.4K	1/354.4/10.4K	7	
28	3 70.9P	W0	柱	5	直筒	柱	斜形	H	口径~高台	—	(8.7)	20-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ・鑿	圓筒	1/354.5/10.4K	1/354.5/10.4K	7								
28	4 113.9P	W0	柱	—	直筒	柱	斜形	H	口径~高台	—	(8.6)	18-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	5 172.9P	W0	柱	—	直筒	柱	斜形	H	口径~高台	—	(8.2)	20-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	6 196.9P	W0	柱	—	直筒	柱	斜形	H	口径~高台	—	(8.4)	19-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	7 194.9P	W0	柱	—	直筒	柱	斜形	H	口径~高台	—	(8.4)	21-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	8 212.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	(7.4)	19-	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	—	—	
28	9 213.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	7.0	18-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	10 130.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	12(1)	(8.0)	3.1	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	1/3	356	7								
28	11 131.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	(8.0)	3.1-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	12 136.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	(8.5)	3.1-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	13 136.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	(16.2)	—	55-	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	—	—								
28	14 130.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	(15.5)	23-	圓筒ナデ・工具ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	15 134.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	(8.8)	21-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	—	—									
28	16 134.9P	W0	柱	—	黑土土器	桶	斜形	H	口径~高台	—	—	—	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	—	—	
28	17 215.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	—	85-	把手柄+子口付き壺	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	把手柄	—	—
28	18 215.9P	W0	柱	—	黑土土器	桶	斜形	H	口径~高台	—	—	30-	圓筒ナデヘラウリ鑿	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	—	—								
28	19 176.9P	W0	柱	—	土桶	桶	斜形	H	口径~高台	—	(7.0)	11-	圓筒ナデ	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	圓筒	—	—

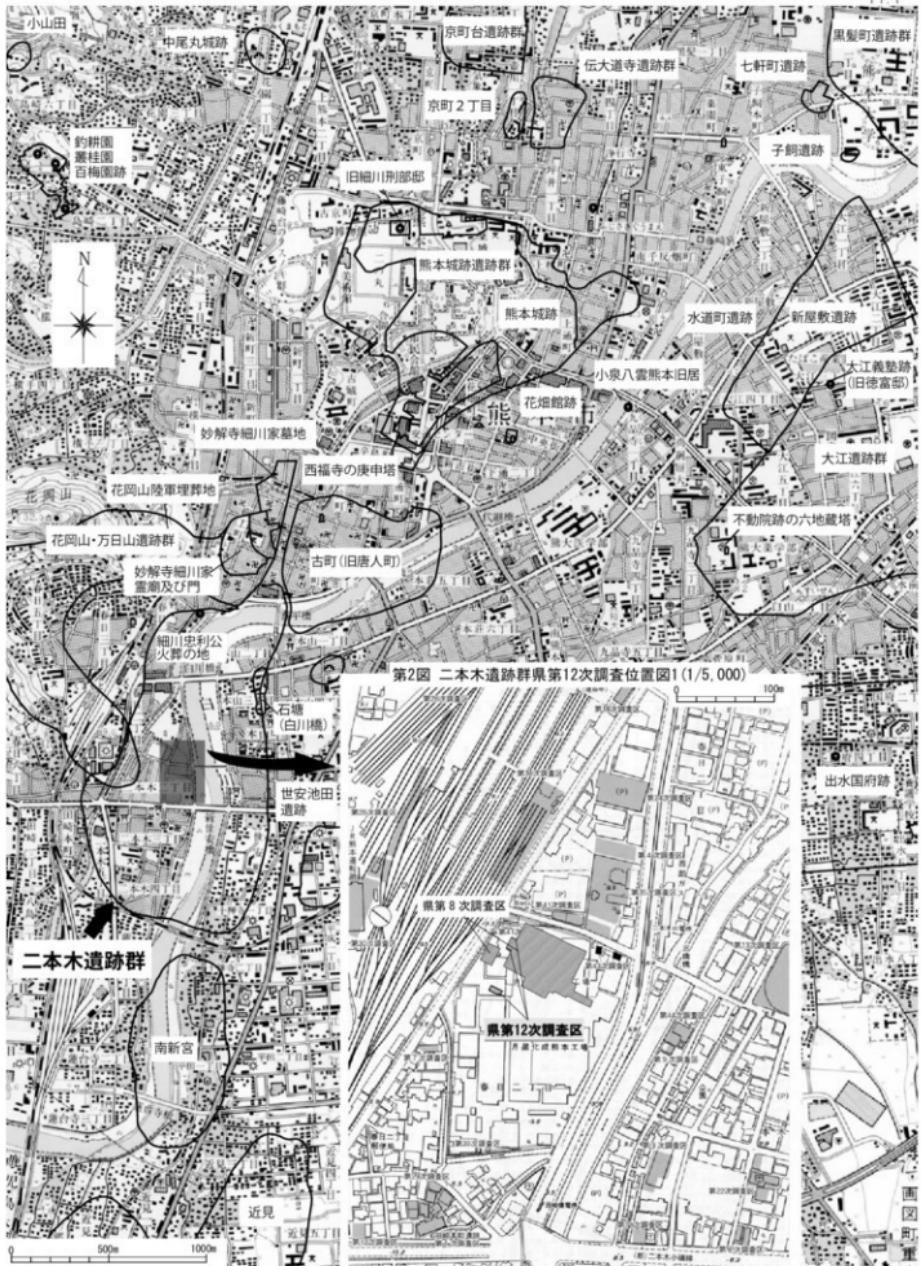
VI 図 鉢 観察表5(掘立柱建物)

目次番号	遺物名	グリッド番号	出土場所	層別	種類	保有者	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	構成(%)	断面	地質	色	圖	備考	保存状態	登録番号	
28 20	219 SP N0. W05	—	土坑	H. 直縫	—	(92) 1.6~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	1/4	160 252	—	
28 21	72.9P N0. W05 地方	—	土坑	H. 直縫	—	—	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	1/3	69 142	—	
28 22	72.9P N0. W05 北	—	土坑	H. 直縫	—	(124) 1.7~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/162 T	68 126	
28 23	63.9P —	東	土坑	H. 直縫	—	(82) 1.5~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	1/8	116 259	—	
28 24	220 SP N0. W05 西側	—	土坑	H. 口縫~直縫	—	(132) 1.020, 3.4~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	1/4	67 140	7	
29 1	—	NO. W10 西端部(N0~V面)	土坑	H. 口縫~直縫	—	(12.0) 7.02, 2.4	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/5	120 351	—
29 2	—	NO. W10 北側	土坑	H. 口縫~直縫	—	(7.0) 1.7~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	1/3	140 302	—	
29 3	—	西側 NO. W10 北側	土坑	H. 口縫~直縫	(11.4) 6.62, 2.8	田端ナデ	—	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/8	141 137	—
29 4	—	NO. W10 北側	土坑	H. 口縫~直縫	(17.0) 12.22, 4.9	田端ナデ	—	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	1/6	118 65	—	
29 5	—	NO. W10 北側上面	土坑	H. 口縫~直縫	—	102 2.1~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	3/4	149 141	—
29 6	—	NO. W5 北側	土坑	H. 口縫~直縫	(12.8) 7.1, 5.2	田端ナデ	—	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/2	139 79	—
29 7	—	NO. W5 北側	土坑	H. 口縫~直縫	(13.1) 9.1, 2.6~	田端ナデ	—	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/6	138 185	—
29 8	—	NO. W10 北側上面	土坑	H. 口縫~直縫	(7.0) 4.0~	田端ナデ	—	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	3/4	142 141	—
29 9	—	NO. W5 北側	土坑	H. 口縫~直縫	(16.2) 9.0, 4.0~	田端ナデ	—	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/4	143 151	—
29 10	—	西側 NO. W10 北側	土坑	H. 口縫~直縫	(10.0) —	田端ナデ	—	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/3	150 6	—
29 11	—	NO. W10 北側	土坑	H. 口縫~直縫	—	(8.6) 2.1~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/4	121 80	—
29 12	—	NO. W10 北側	土坑	H. 口縫~直縫	—	(8.6) 1.5~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/4	122 189	—
29 13	—	—	西側 北側	H. 直縫	—	7.0 2.5~	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/3	147 5	6
29 14	—	西側 北側	直縫	H. 直縫	—	—	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/4	146 53	7
29 15	—	西側 北側	直縫	H. 直縫	—	—	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/3	145 53	7
29 16	—	西側 直縫	直縫	H. 直縫	—	—	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/3	144 197	—
29 17	—	—	西側 直縫	直縫	—	—	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/3	148 5	7
29 18	—	—	西側 直縫	直縫	—	—	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/8	82 5	7
29 19	—	—	西側 直縫	直縫	—	—	田端ナデ	—	—	角 (N175/96) に引け	角	角	角	内面は赤色をしているか不明 (N175/96) に引け	—	1/8	83 5	7

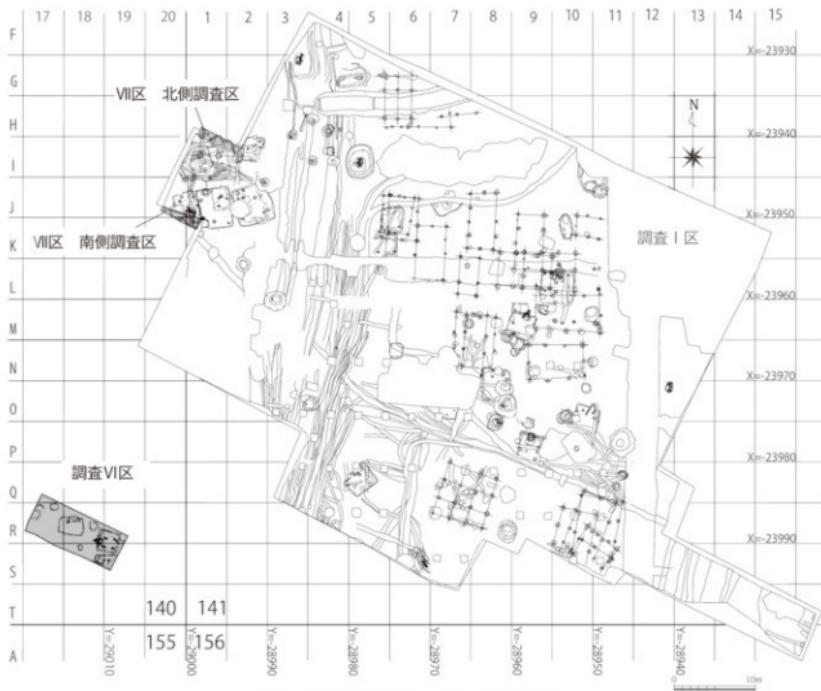
遺物 番号	遺物 名	層別	出土場所	標高 (cm)	標位 (cm)	寸法 (cm)	形状	材質	性質 (%)	構築 (%)	施土	被成 (%)	色	色	色	性質	実測 値	算定 値
46-1	VII区 —	北	包田山腰 遺物層	片	口縫 直縫	—	直縫ナデー不方角ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石-雪白	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	中世-古代	—	—	—	—	0.7	7.1
46-2	VII区 —	南	包田山腰 遺物層	片	口縫-直縫 直縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	内面に塗られた墨跡あり	—	—	—	—	1.5	7.4
46-3	VII区 —	南	包田山腰 遺物層	片	口縫-直縫	—	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直石-青白-石切口	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.2	7.1
46-4	VII区 —	南	包田山腰 土器群	片	口縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石-青白-石切口	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.2	7.1
46-5	VII区 —	南	包田山腰 土器群	片	口縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石-青白	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.4	7.6
46-6	VII区 —	北	包田山腰 土器群	片	口縫-直縫	—	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直石-青白-石切口	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.5	7.4
46-7	VII区 —	南	包田山腰 土器群	片	直縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石-青白-直縫	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.5	7.4
46-8	VII区 —	南	包田山腰 土器群	片	口縫-直縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石-青白	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.5	7.4
46-9	VII区 —	北	包田山腰 土器群	片	直縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石-青白	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.5	7.4
46-10	VII区 —	南	包田山腰 土器群	片	口縫-直縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	2.3	7.4
46-11	VII区 [K20(前)]	—	包田山腰 土器群	片	口縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	2.3	7.4
46-12	VII区 [K20(前)]	—	包田山腰 土器群	片	口縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.8	7.3
46-13	VII区 [K20(前)]	—	包田山腰 土器群	片	口縫	—	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直石-青白-石切口	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.6	7.4
46-14	VII区 [K20(前)]	—	包田山腰 土器群	片	口縫-直縫	—	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直縫ナデー端ナデ-不方角ナデ	直石-青白-石切口	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.8	7.4
46-15	VII区 [K20(前)]	—	包田山腰 土器群	片	直縫	—	直縫ナデー端ナデ	直縫ナデー端ナデ	直石-青白	良	(内)25/98(外)25/98 (内)25/98(外)25/98	外底面に墨跡あり	—	—	—	—	1.8	7.4

I·VII区出土遺物觀察表3(土坑·溝)

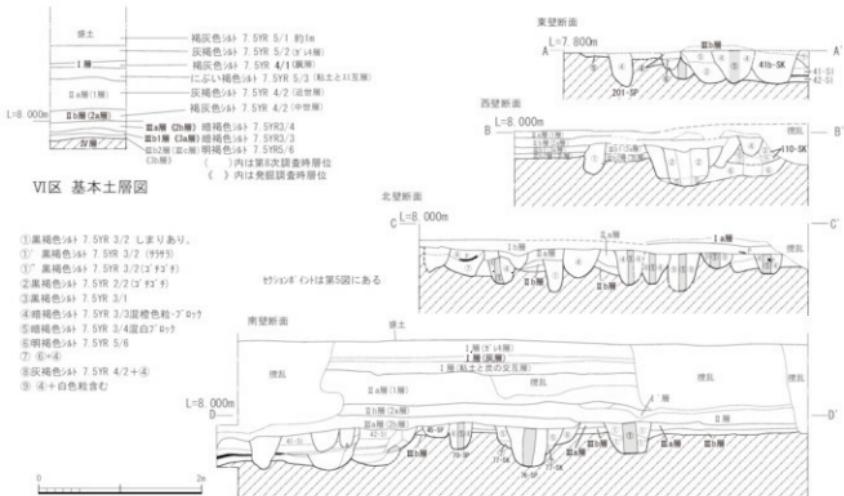
844 *中日文化比較研究* (2008年春号) 第26卷・第3号



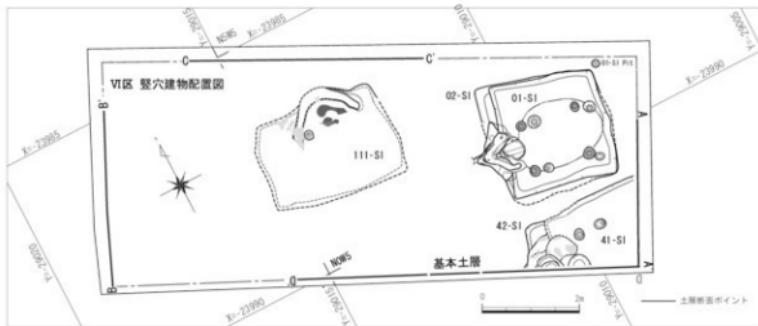
第1図 周辺遺跡分布図（古代）（国土地理院）1/25,000 熊本改変
(調査年次は、県は県○次、県のないものは熊本市調査区)



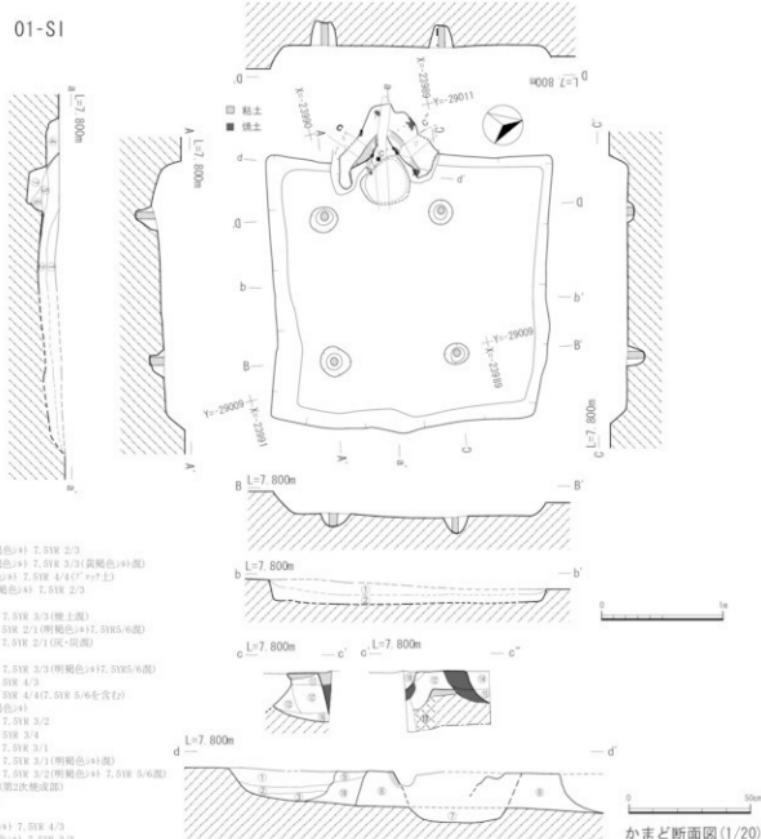
第3図 調査区位置図2・グリッド図(1/600)



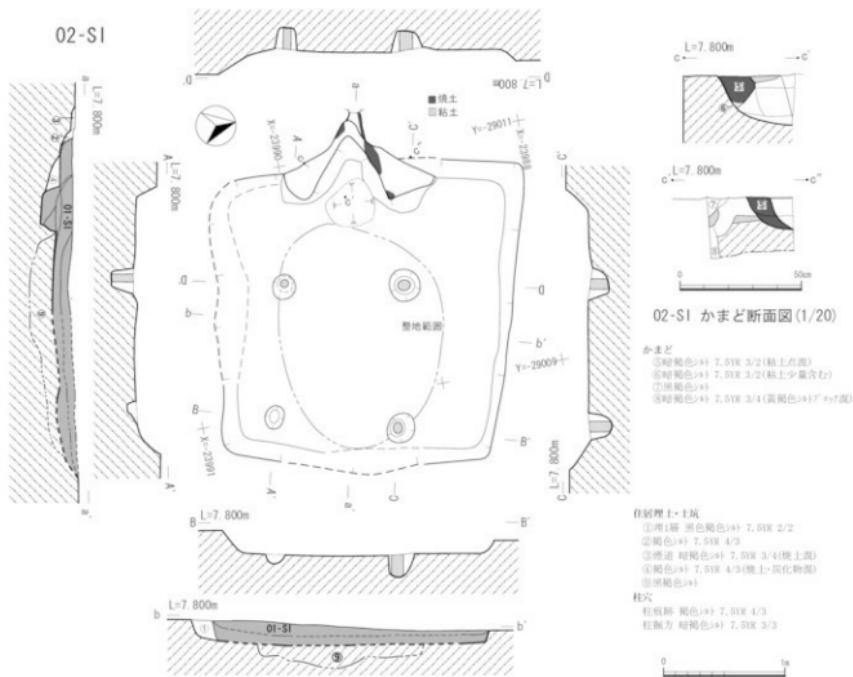
第4図 VI区基本土層図・調査区壁面土層図(1/60)



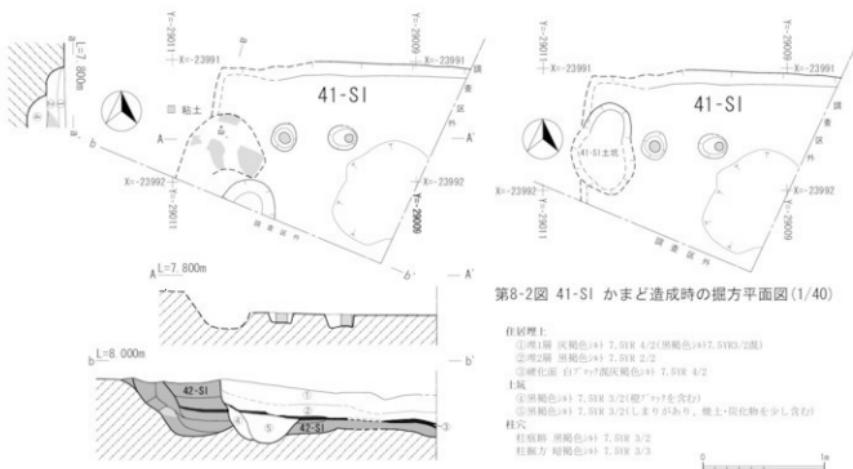
第5図 VI区 遺物包含層Ⅲb・IV層検出突穴建物配置図(1/100)



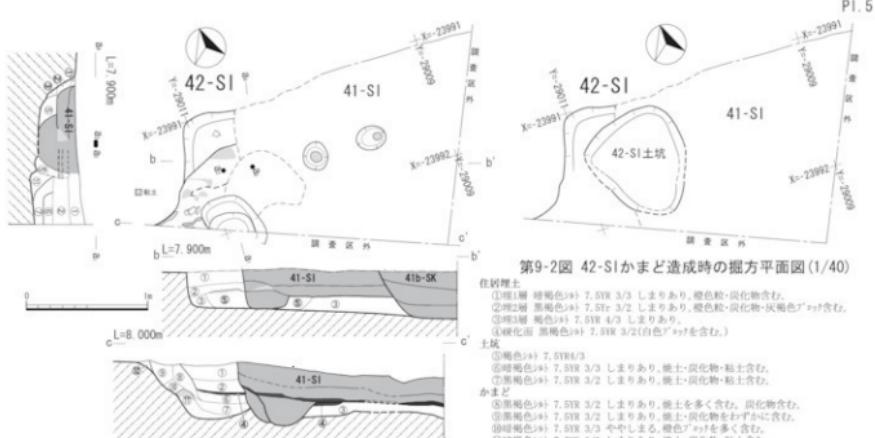
第6図 VI区 01-SI 平面・断面図 (1/40)・かまど断面図 (1/20)



第7図 VI区 02-SI平面・断面図(1/40)・かまと断面図(1/20)



第8図 VI区 41-SI平面・断面図(1/40)



第9図 VI区42-SI平面・断面図(1/40)

第9-2図 42-SIかまど造成時の掘方平面図(1/40)

住居土層
 ①褐色層 壤褐色(?) 7.SYR 3/0 しまりあり、礫包粒・炭化物含む。
 ②褐色層 黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、褐色粒・炭化物・灰褐色(?)を含む。
 ③埋立層 褐色(?) 7.SYR 4/3 しまりあり。
 ④炭化層 黑褐色(?) 7.SYR 3/2(白色?)を含む。)

土壤層
 ⑤褐色シルト 7.SYR 3/0

⑥暗褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物・粘土含む。

⑦黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物・粘土含む。

⑧暗褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物を多く含む。

⑨黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物をわずかに含む。

⑩暗褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物・粘土含む。

⑪黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物を多く含む。

⑫黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物含む。

⑬暗褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物・粘土含む。

⑭黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物を多く含む。

⑮暗褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物・粘土含む。

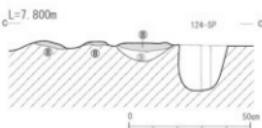
⑯黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物を多く含む。

⑰黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物含む。

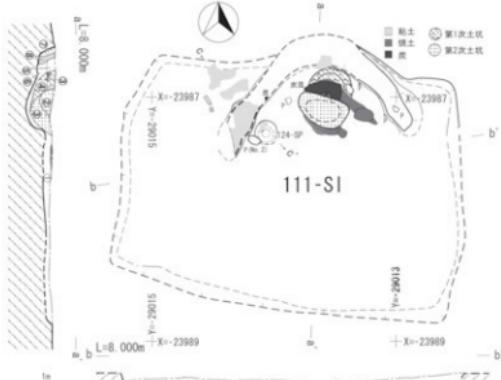
⑱黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物を多く含む。

⑲暗褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物を多く含む。

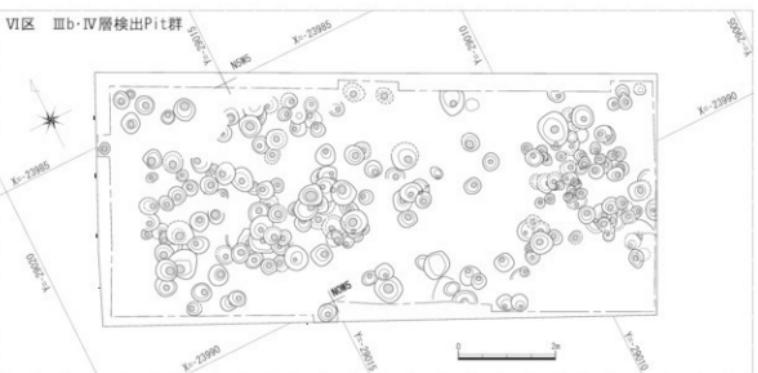
⑳黒褐色(?) 7.SYR 3/2 しまりあり、微土・炭化物を多く含む。



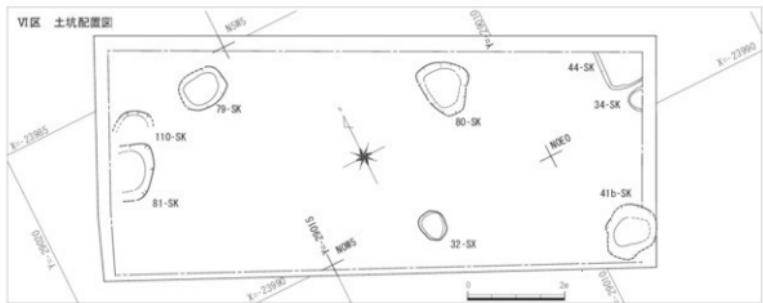
111-SI かまど断面図(1/20)



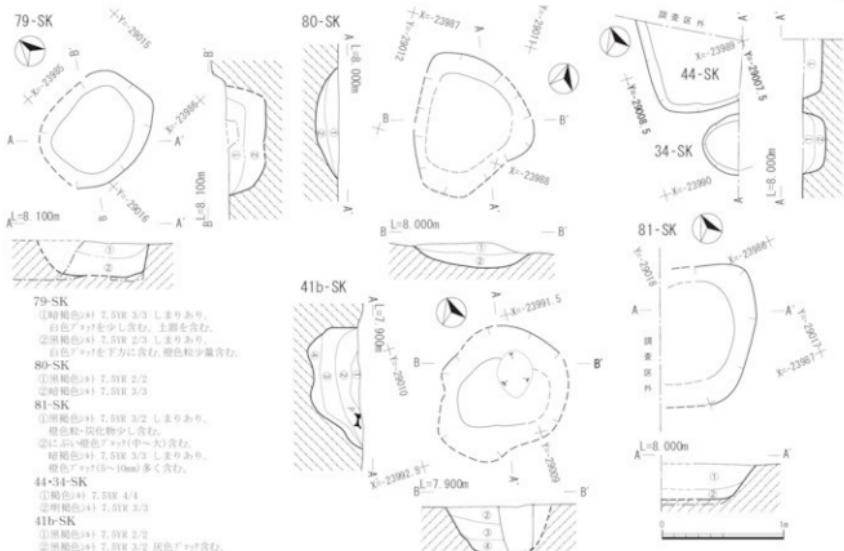
第10図 VI区111-SI平面・断面図(1/40)・かまど断面図(1/20)



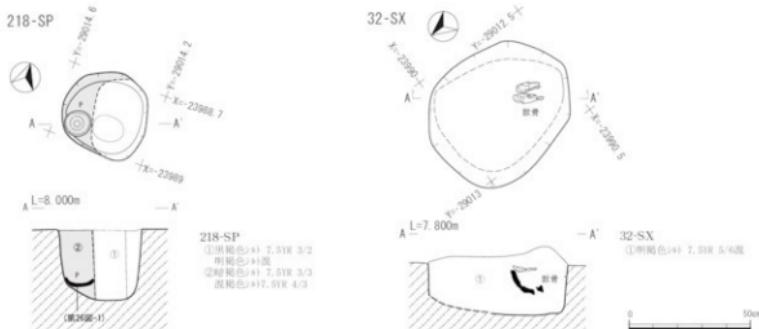
第11図 VI区遺物包含層IIIb・IV層検出ピット群平面図(1/100)



第12図 VI区遺物包含層IIIb-IV層検出土坑配置図(1/100)

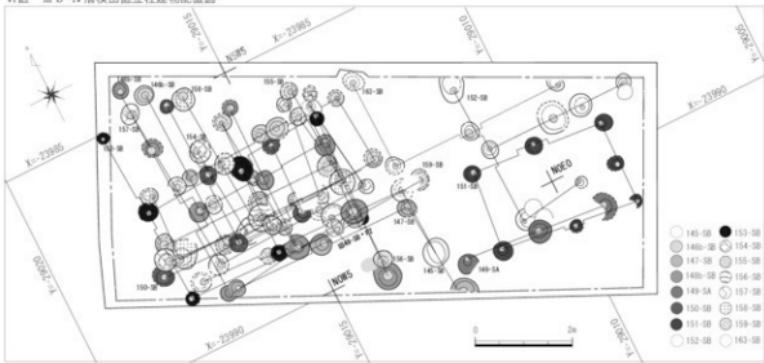


第13図 VI区土坑平面・断面図(1/40)

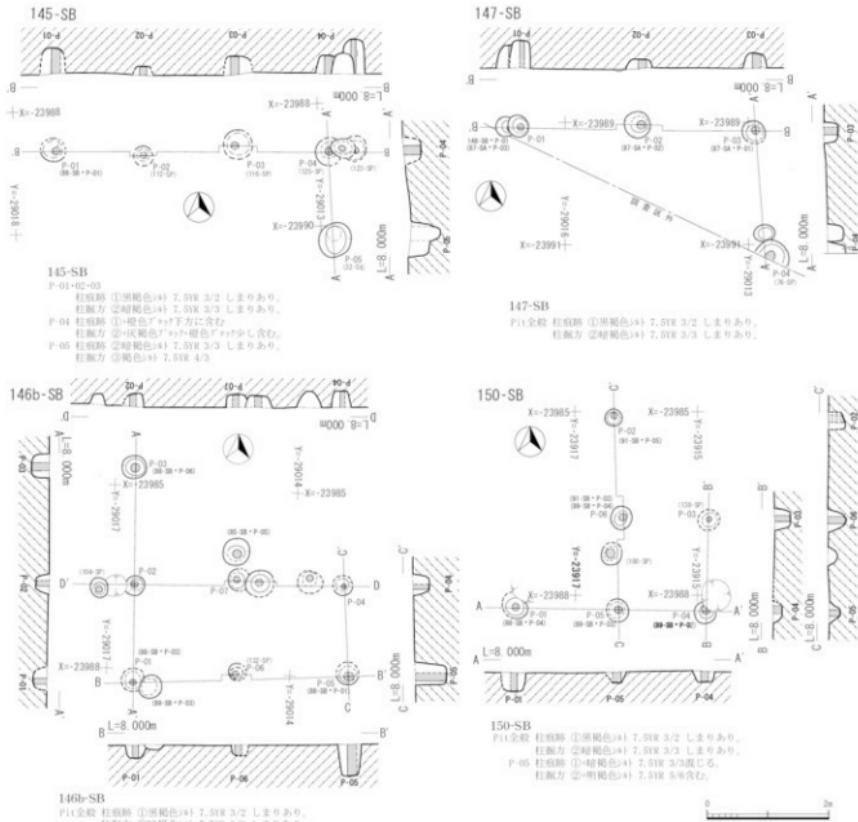


第14図 VI区218-SP・32-SX遺物出土状況平面・断面図(1/20)

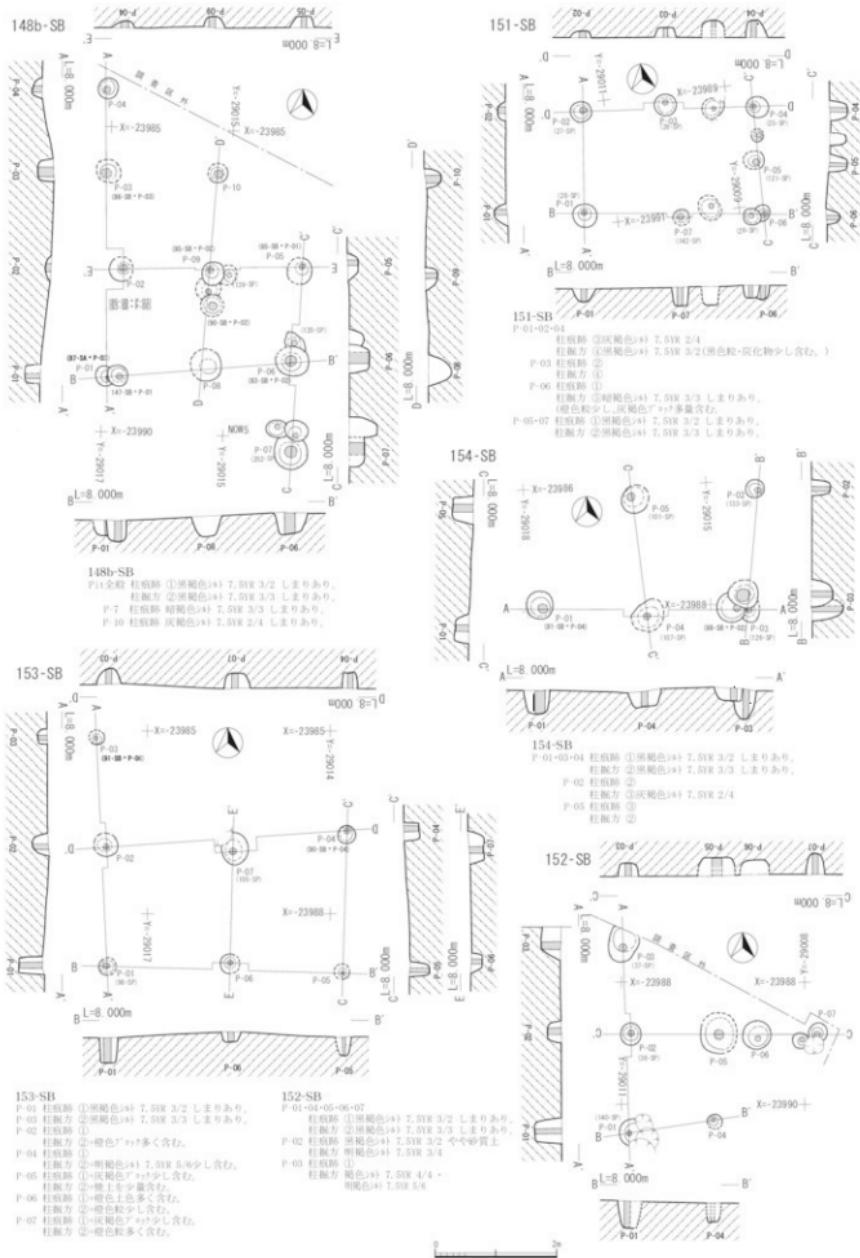
VI区 III b・IV層検出掘立柱建物配置図



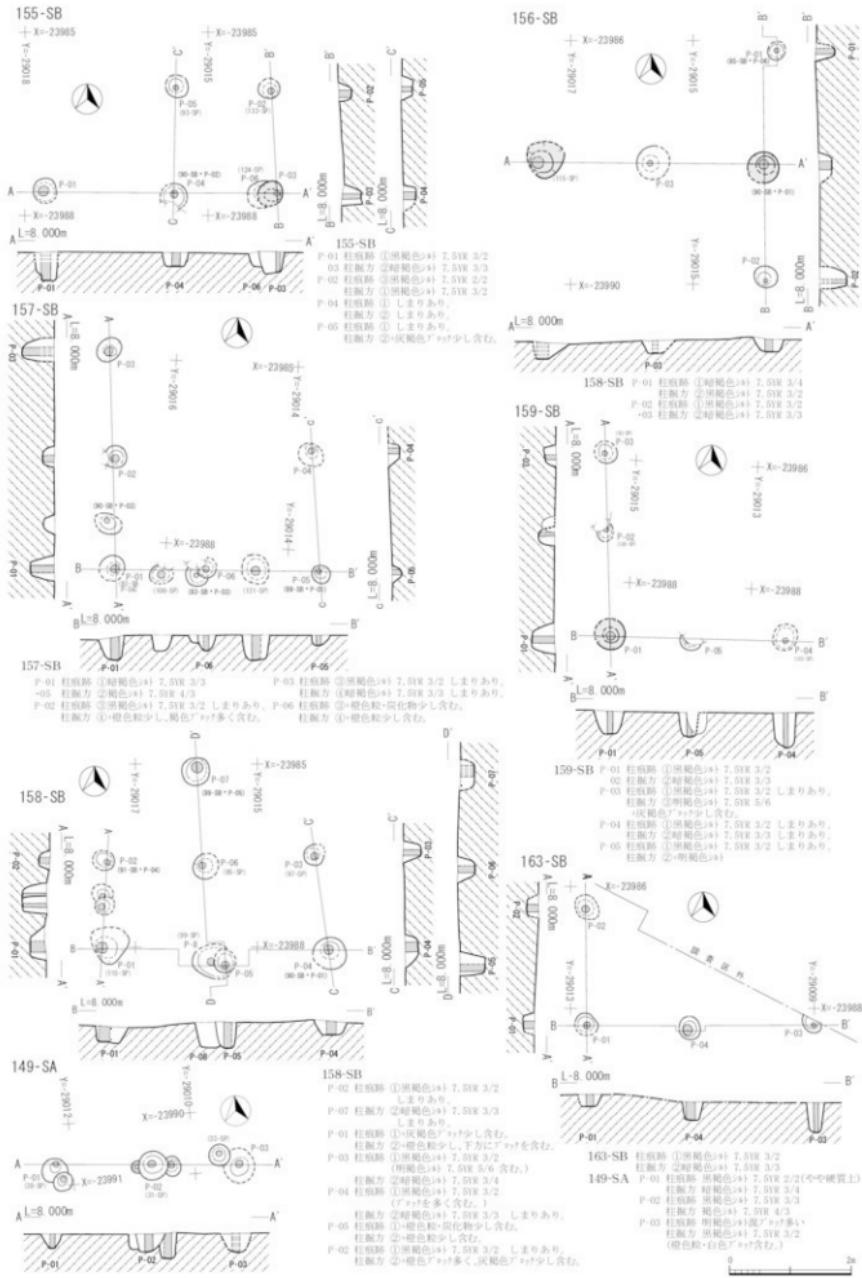
第15図 VI区 遺物包含層IIIb・IV層検出掘立柱建物配置図(1/100)



第16図 VI区 145-SB・146b-SB・147-SB・150-SB平面・断面図(1/80)

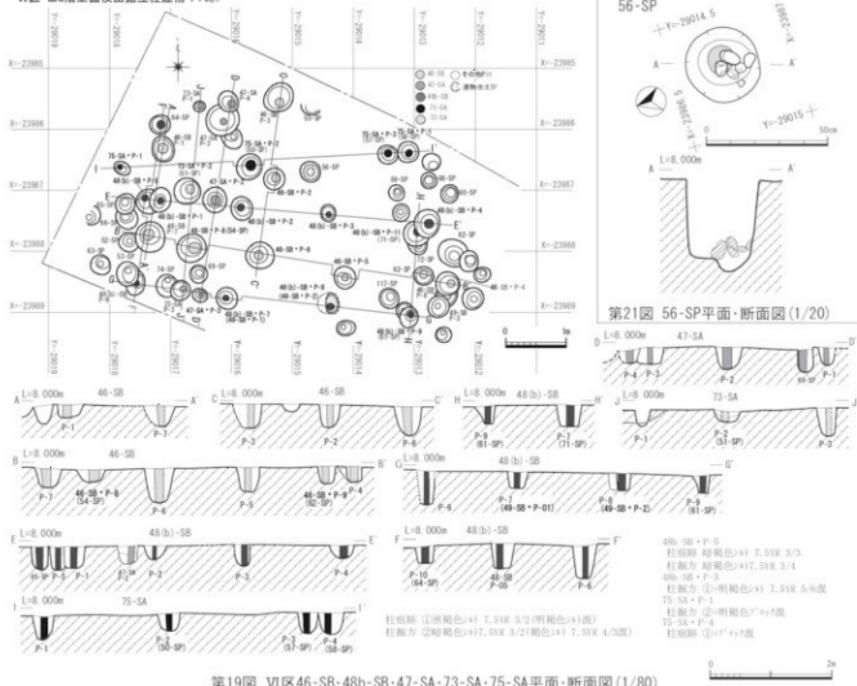


第17図 VI区148b-SB・151-SB・152-SB・153-SB・154-SB平面・断面図(1/80)



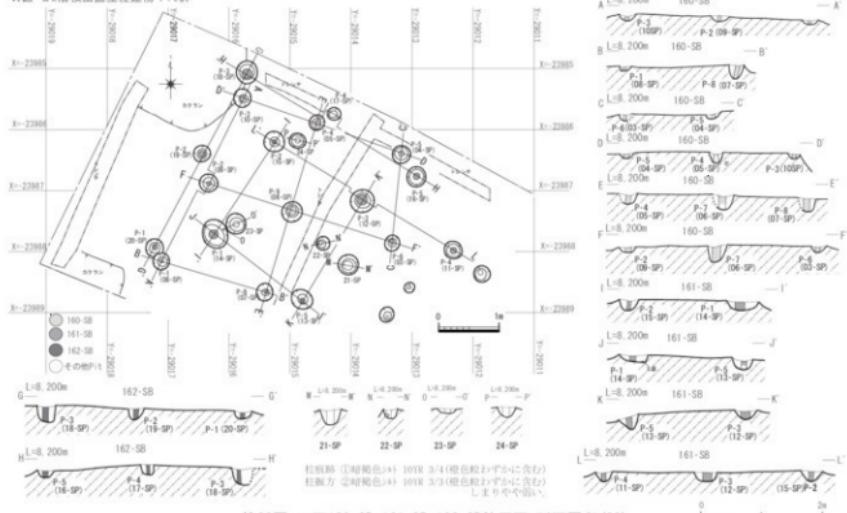
第18図 VI区155-SB-156-SB-157-SB-158-SB-159-SB-163-SB-149-SA平面・断面図(1/80)

VI区 IIIa層上面検出掘立柱建物・Pit群



第19図 VI区46-SB・48b-SB・47-SA・73-SA・75-SA平面・断面図(1/80)

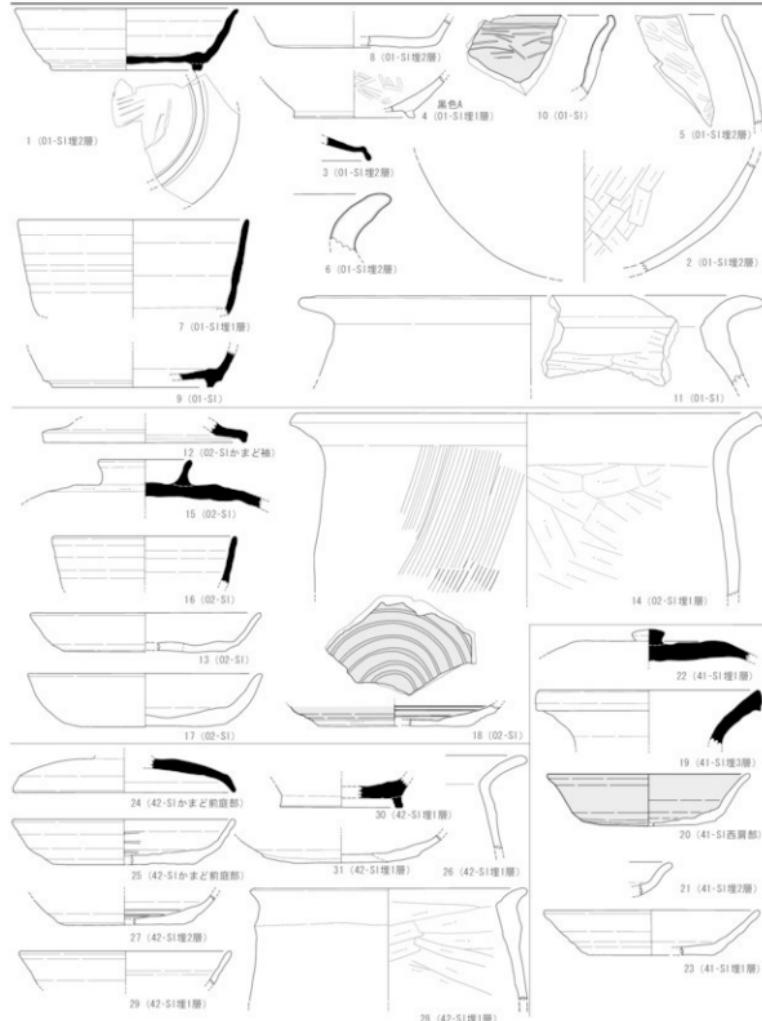
VI区 IIb層検出獨立柱建物・Pit群



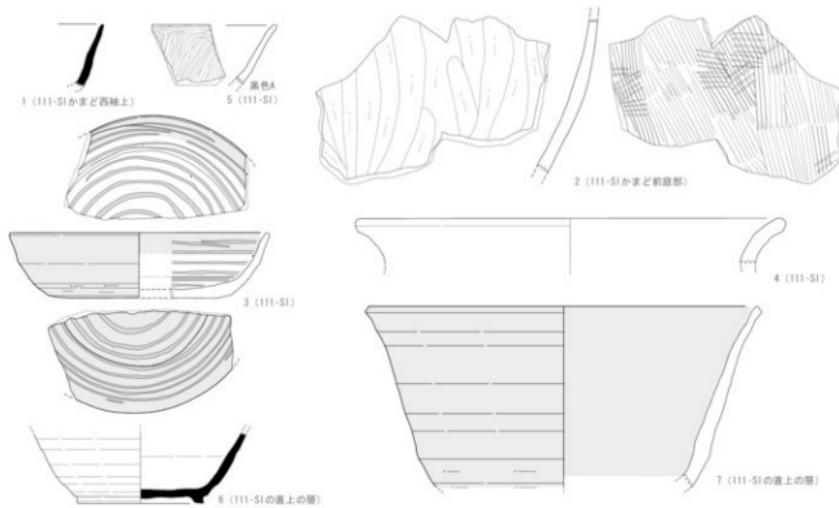
第20図 VI区160-SB-161-SB-162-SB他平面・断面図(1/80)



第22図 VI区出土縄文土器実測図 (1/3)

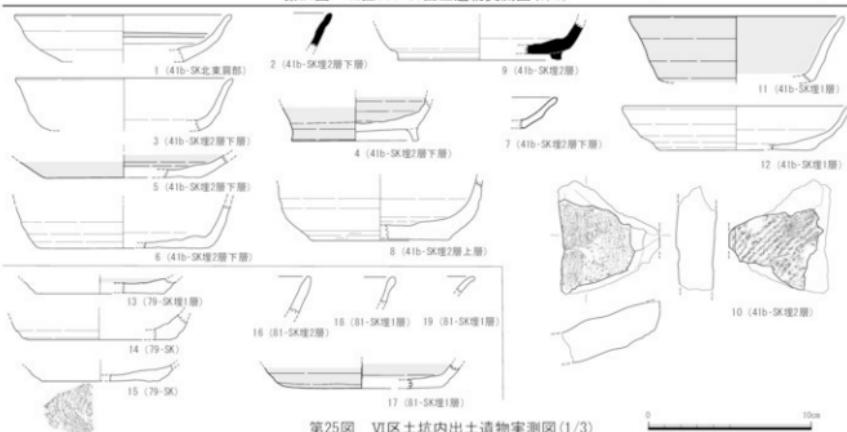


第23図 VI区01・02・41・42-SI内出土遺物実測図 (1/3)



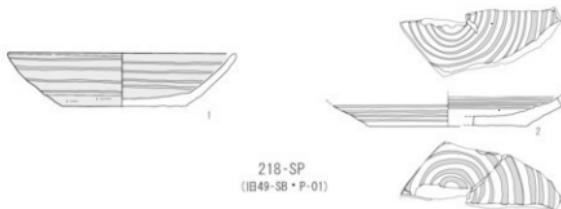
第24図 VI区 111-SI出土遺物実測図(1/3)

0 10cm



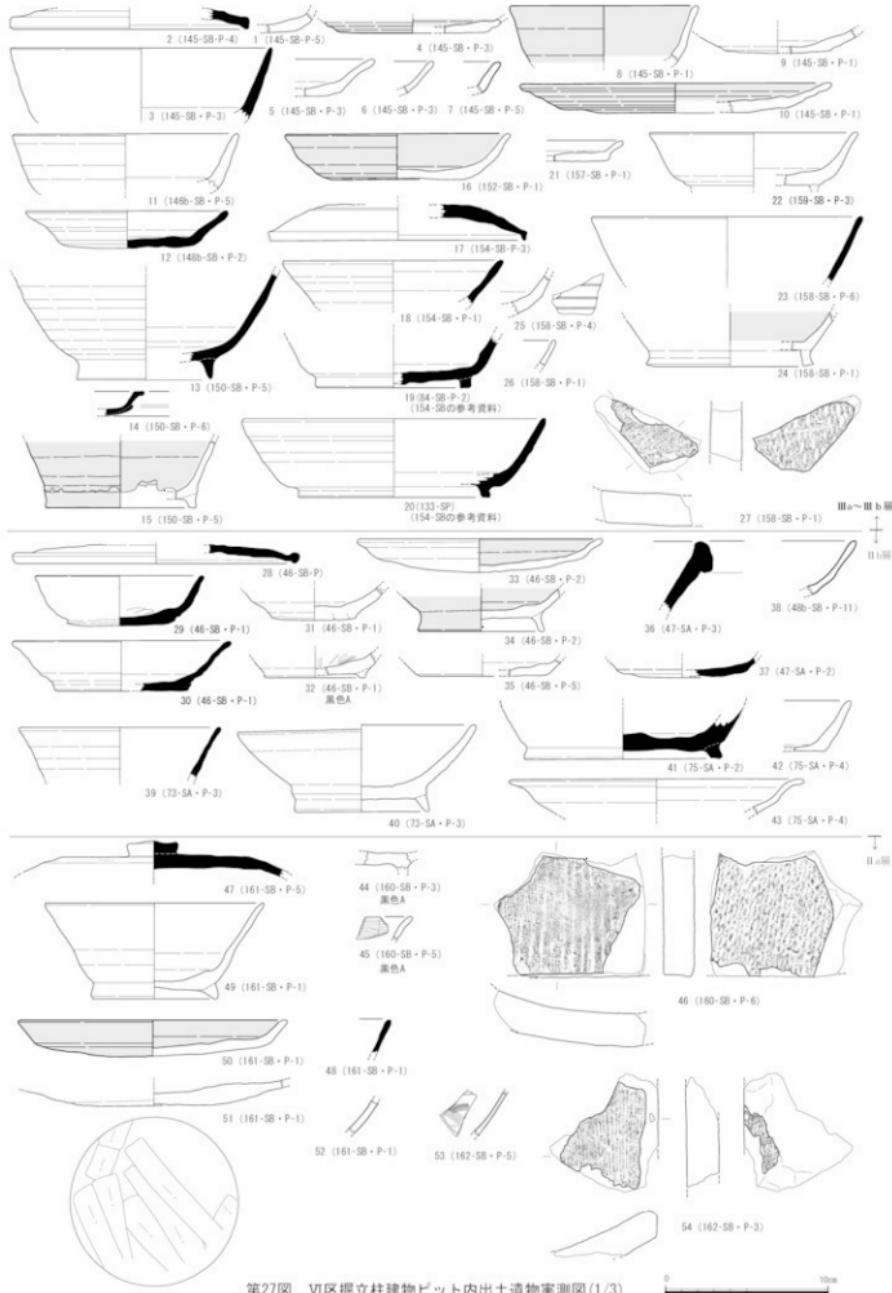
第25図 VI区 土坑内出土遺物実測図(1/3)

0 10cm

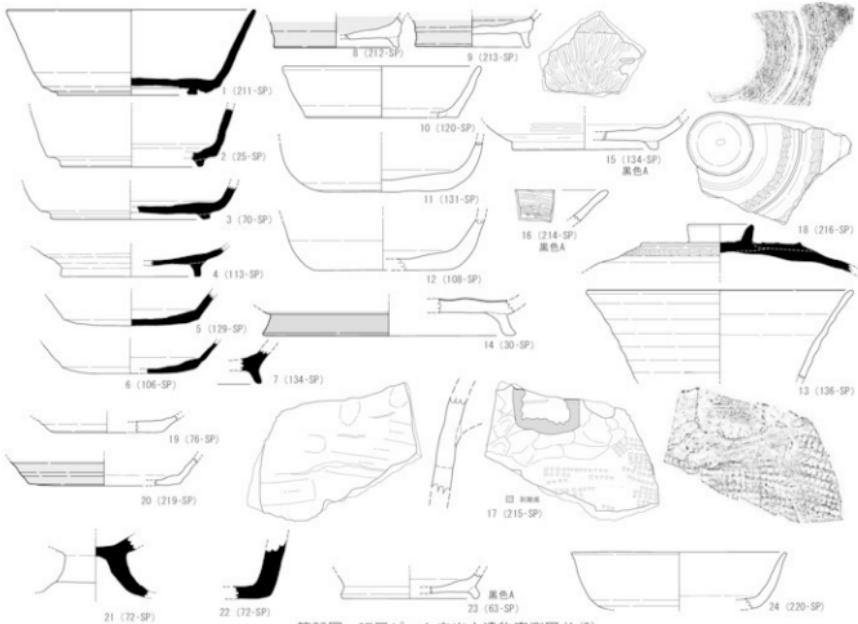


第26図 VI区 218-SP内出土遺物実測図(1/3)

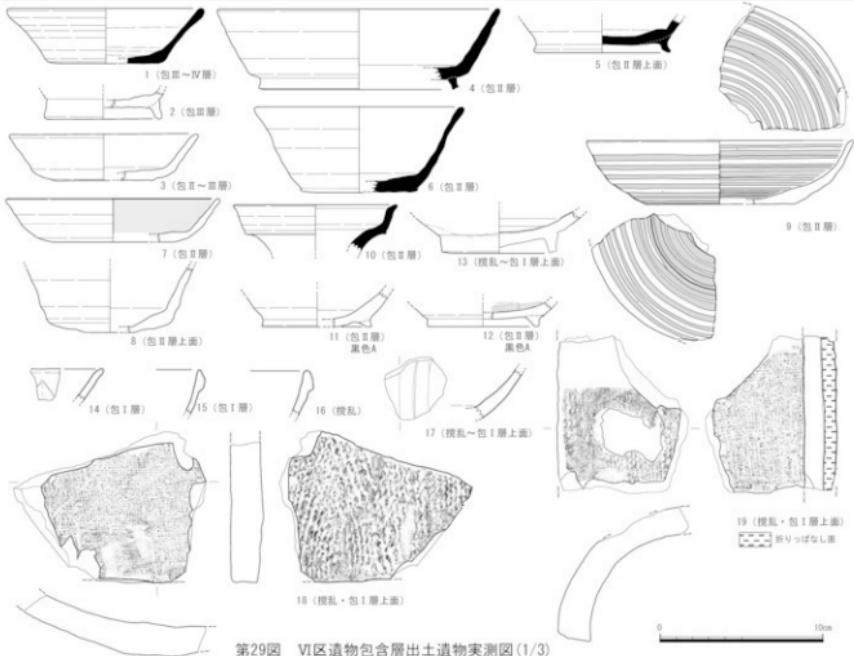
0 10cm



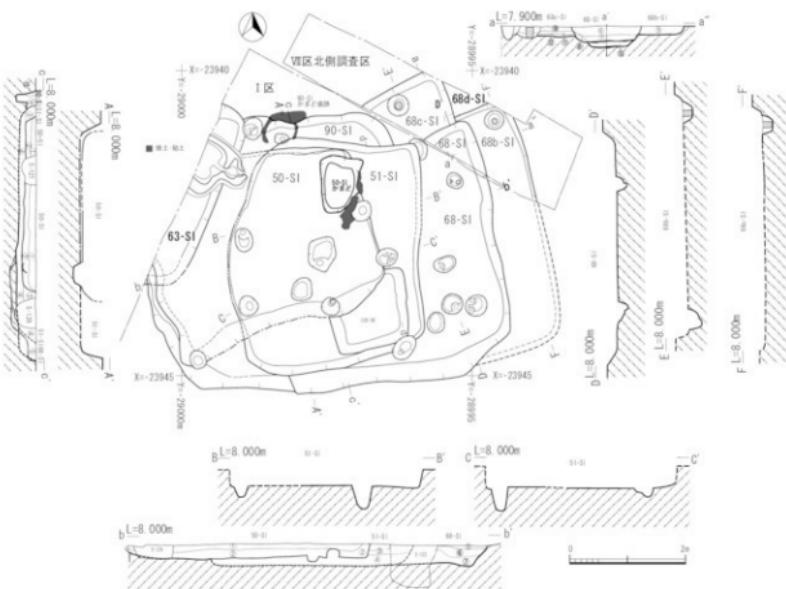
第27図 VI区掘立柱建物ピット内出土遺物実測図(1/3)



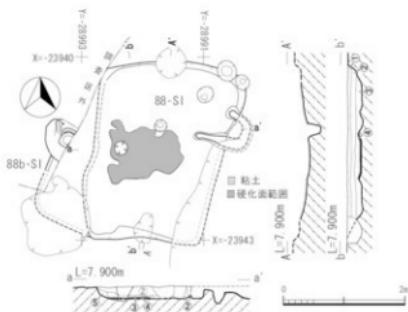
第28図 VI区ピット内出土遺物実測図(1/3)



第29図 VI区遺物包含層出土遺物実測図(1/3)



第31図 VII区北侧調査区・I区 68-SI・68 (b-c-d) - SI・50-SI・51-SI・90-SI・63-SI平面・断面図 (1/80)



88-51

- ①埋1箇
蘭褐色斑点上、7.0mm×4.3mm(しま)あり、黃褐色粒子含む。

②埋2箇
蘭褐色斑点上、7.5mm×4.2mm(しま)あり、黃褐色粒子含む。
土源(土耕部)片を含む。

③埋3箇
に5~6枚蘭褐色(じゆうしょく)上、10mm×4.2mm(しま)りやうせい、
黃褐色(じゆうしょく)7mm×3~2mm(しま)白色粒子を含む。

④硬化面
灰黃褐色(けいじゆうしょく)7mm×1~4mm(しま)を多く含む。

⑤埋4箇
蘭褐色(じゆうしょく)10mm×3.2mm(しま)りやうせい含む。
黃褐色(じゆうしょく)7mm×3mm(しま)を多く含む。
白色粒子・赤色粒子を多く含む。

88b-SI

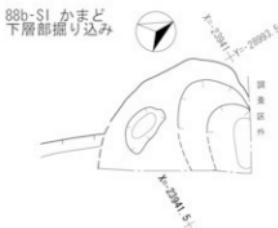
- ①単1層
暗褐色(?)
②複2層
紫褐色(?)
混黒褐色(?)
③複4層
暗褐色(?)
(?7?状)

④焦灰褐色(?)
混焼上、斑
⑤黒褐色(?)
焦灰褐色上(?)
⑥白(?)
暗黃褐色(?)
焦上、點狀
⑦白(?)
暗褐色(?)
焦上、點狀
⑧黑褐色(?)
暗黃褐色(?)
焦上、點狀
⑨黃褐色粘上(?)
暗褐暗褐色(?)
⑩點狀、燒上


鉛褐色(?)
混黒褐色(?)
(?)

第32図 I区・VII区北側調査区

88b-SI・88-SI 平面・断面図 (1/80)



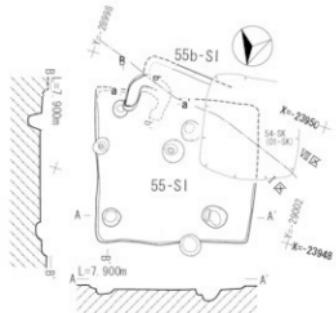
88h-S

-

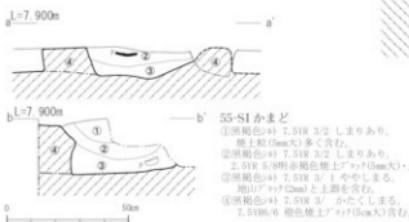
第33図 VII区北側調査区

88b-SI かまど平面・断面図(1/20)

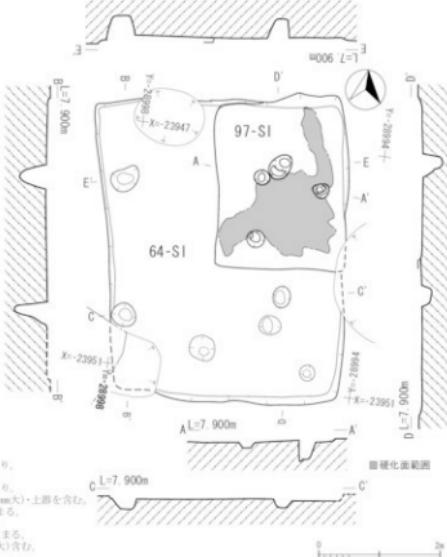
88b-SI・88-SI平面・断面図(1/8)



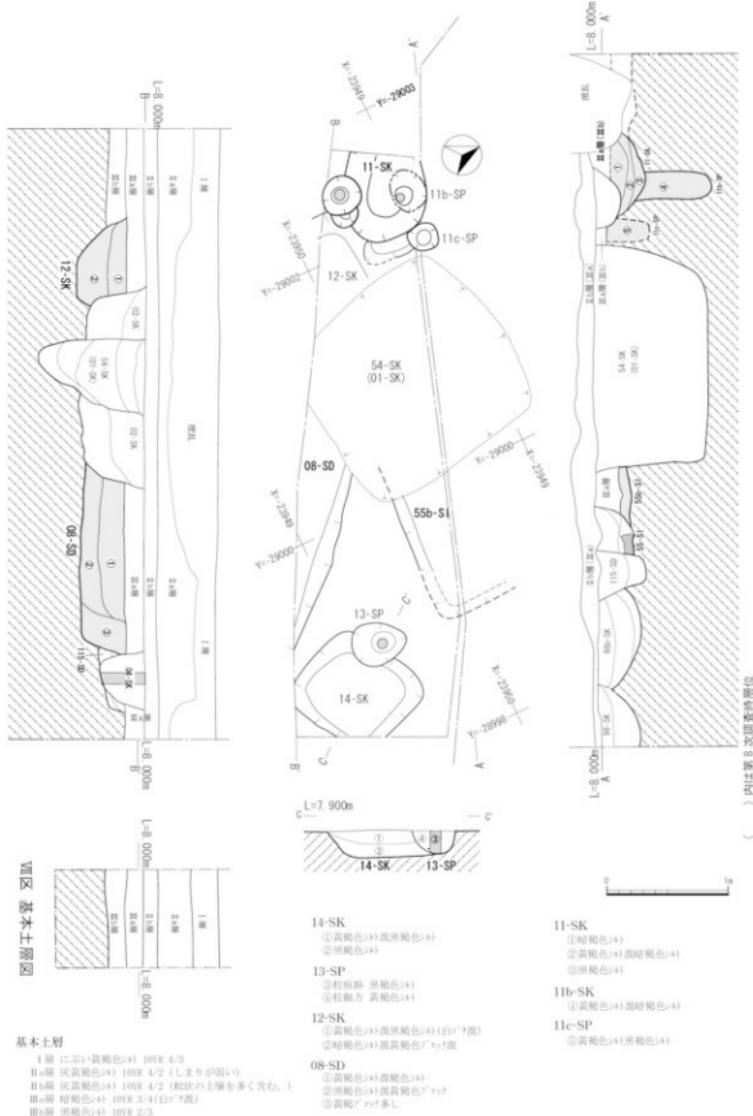
第34図 I区55-SI平面・断面図(1/80)



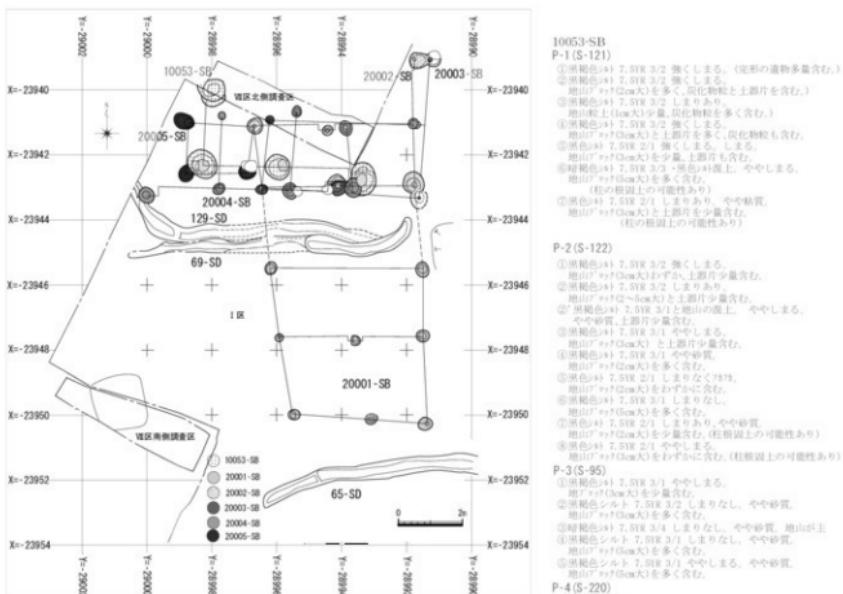
第35図 I区55-S1かまど断面図(1/20)



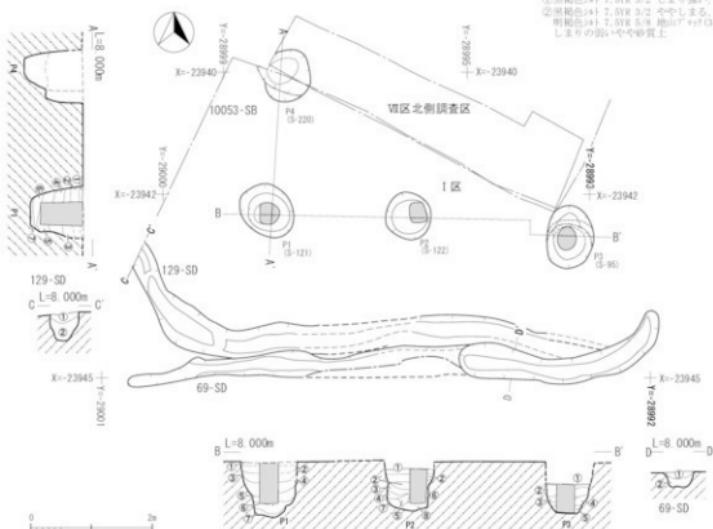
第36図 I区64-S1・97-S1平面・断面図(1/80)



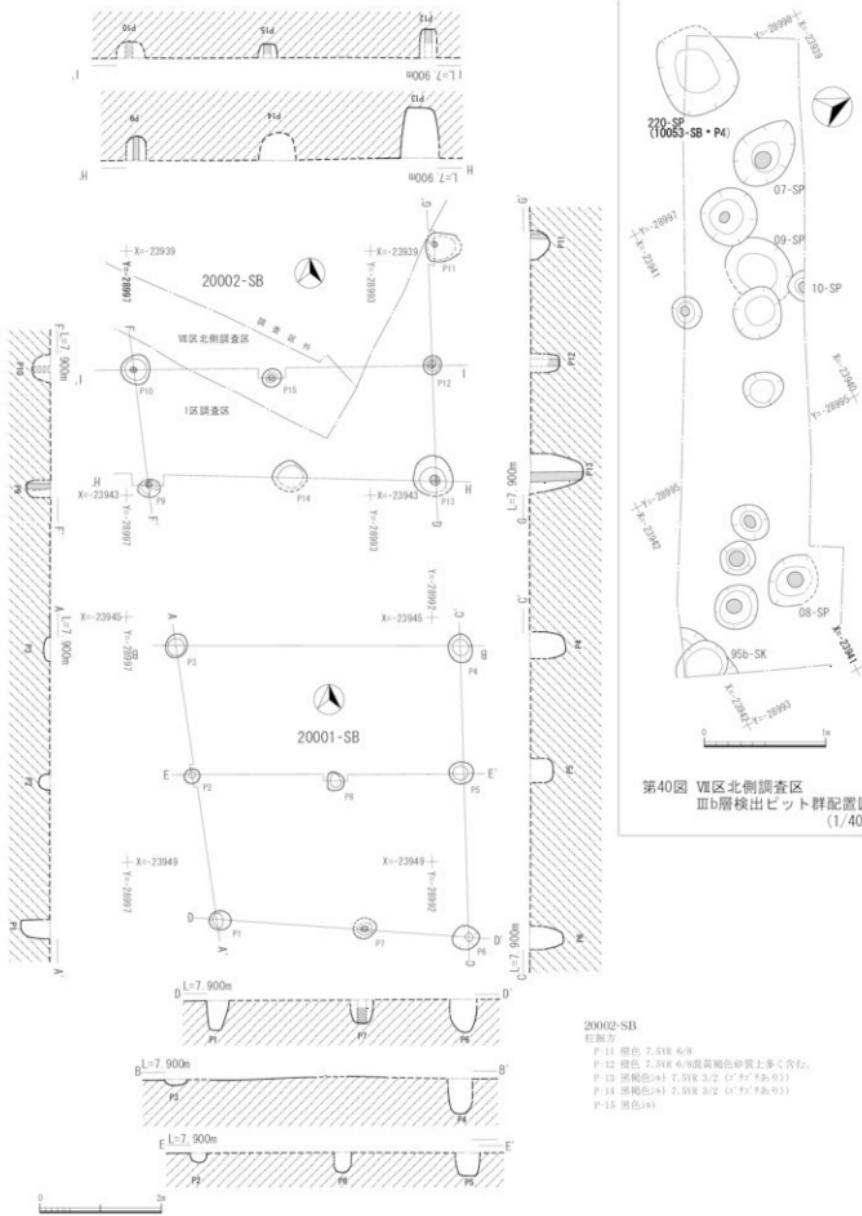
第37図 VII区南側調査区Ⅲb層検出遺構平面・断面・土層図(1/40)



第38図 I区・VII区掘立柱建物配置図(1/150)

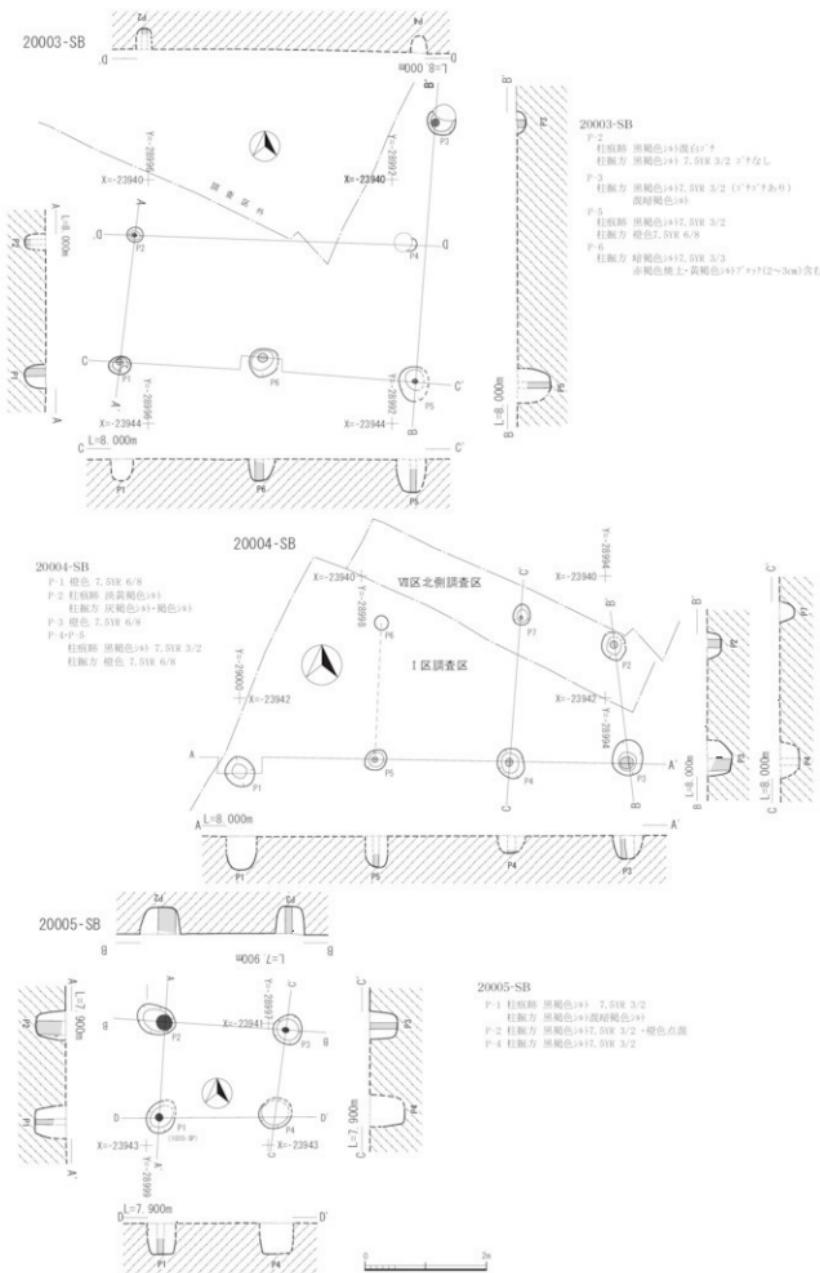


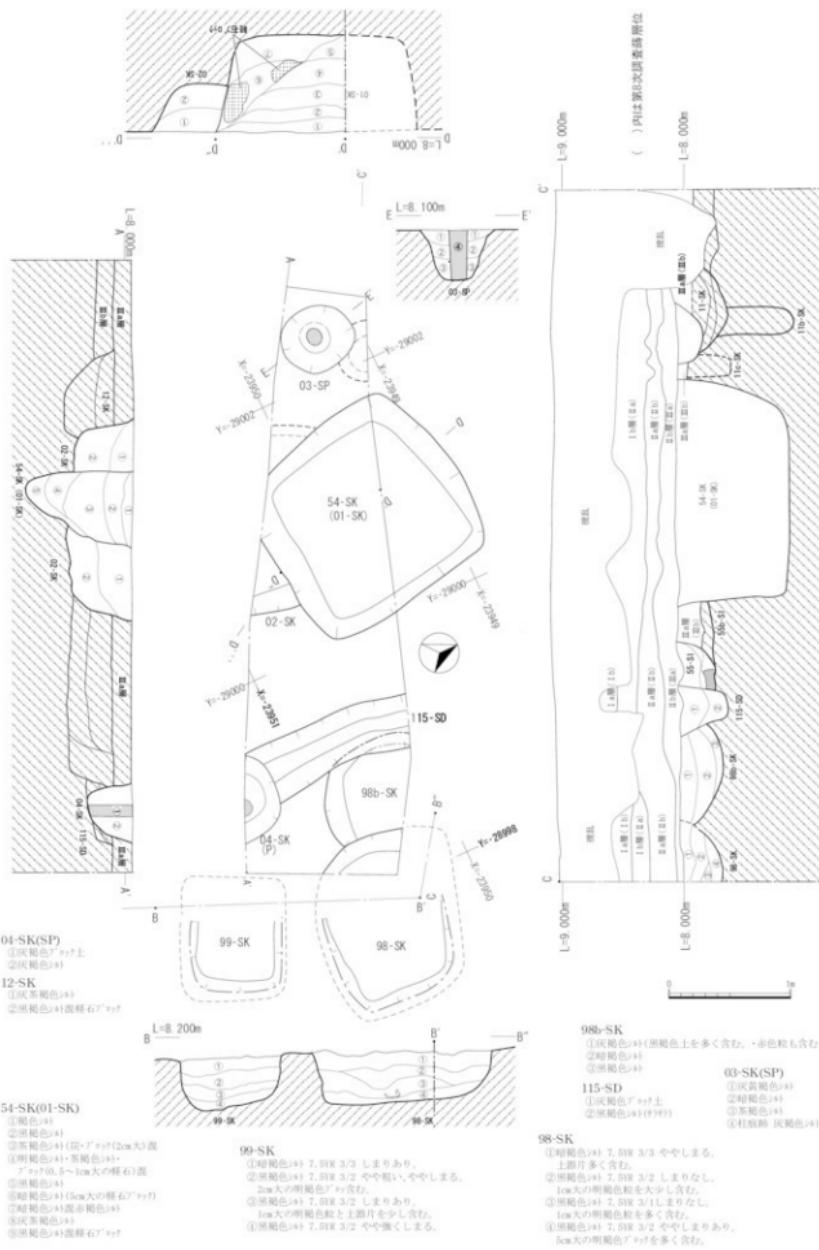
第39図 T区・W区北側調査区10053-SB:他SD平面・断面図(1/80)



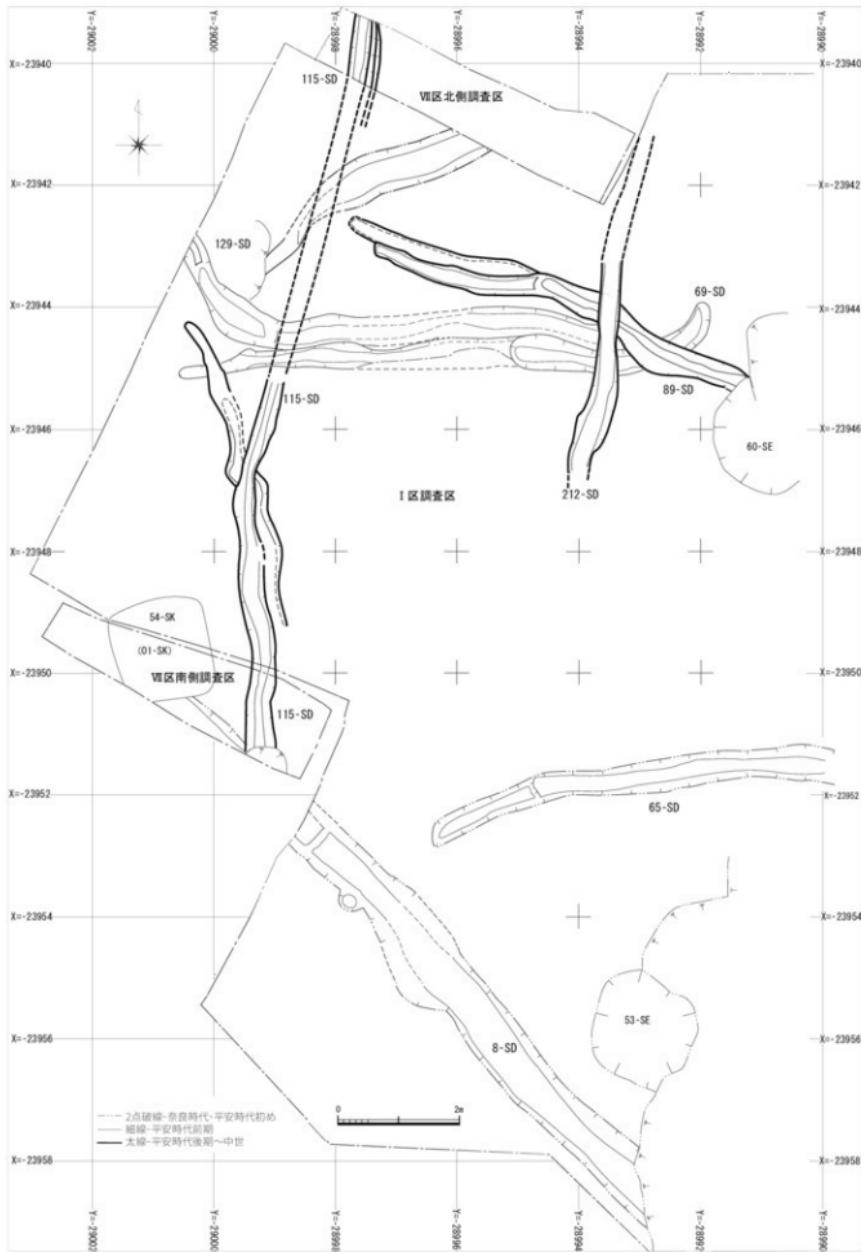
第41図 I区・VII区北側調査区20001-SB-20002-SB平面・断面図 (1/80)

第40図 VII区北側調査区
IIIb層検出ピット群配置図
(1/40)

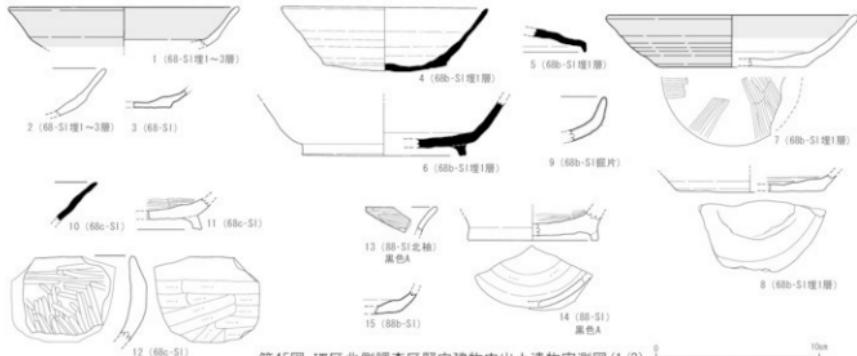




第43図 VII区南側調査区・I区IIIa層検出遺構平面・断面図(1/40)



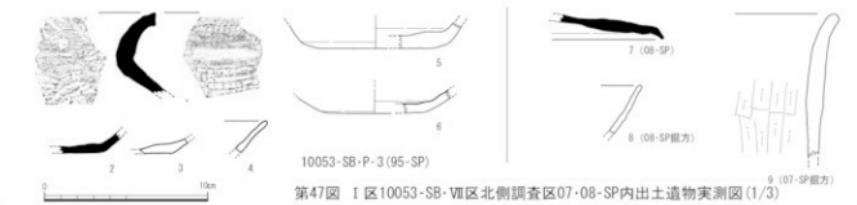
第44図 I区・VII区溝配置図(1/80)



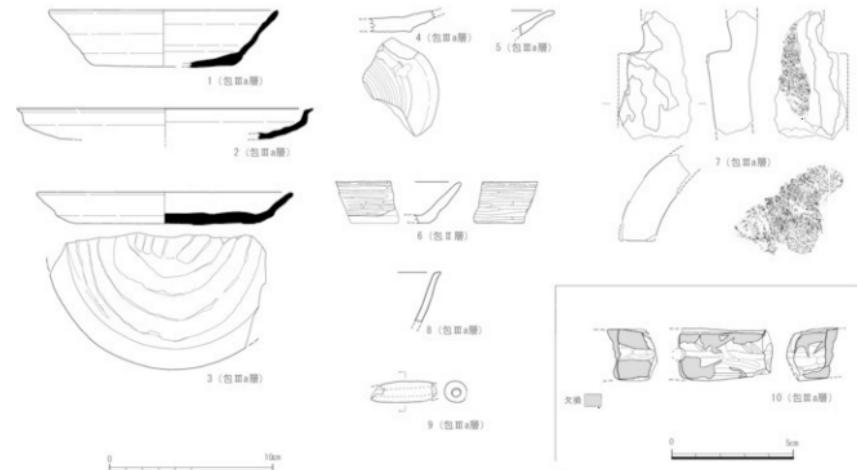
第45図 VII区北側調査区竪穴建物内出土遺物実測図(1/3)



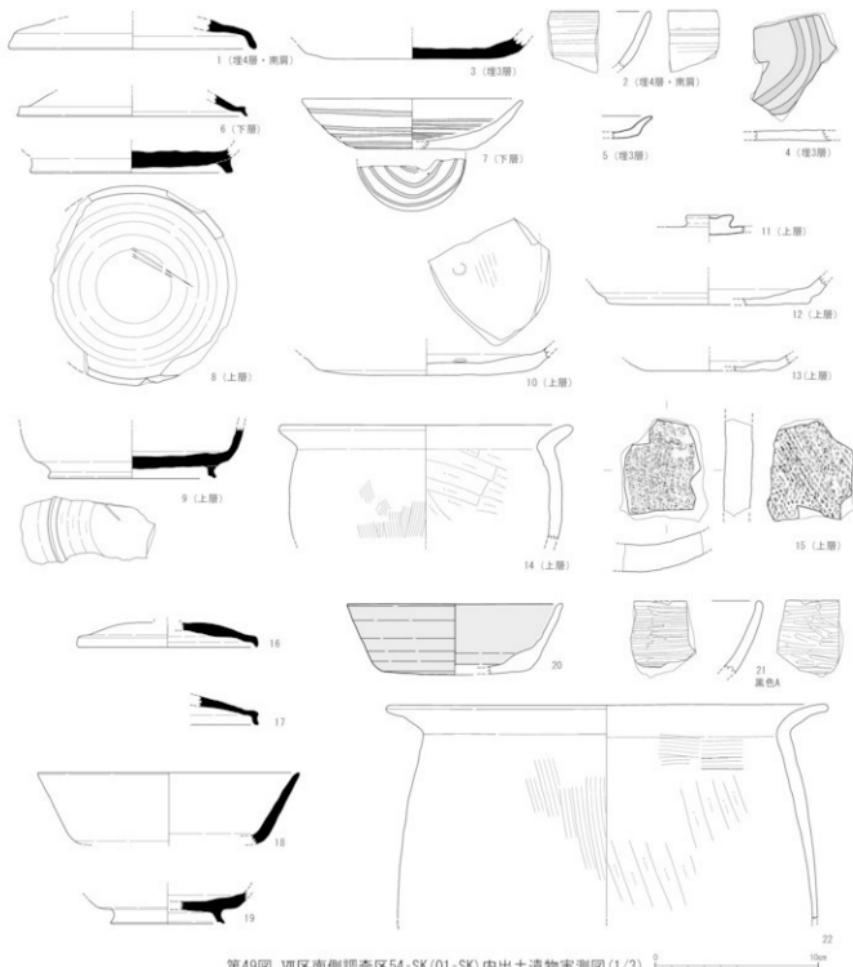
第46図 VII区南側調査区IIIb層検出土坑内出土遺物実測図(1/3)



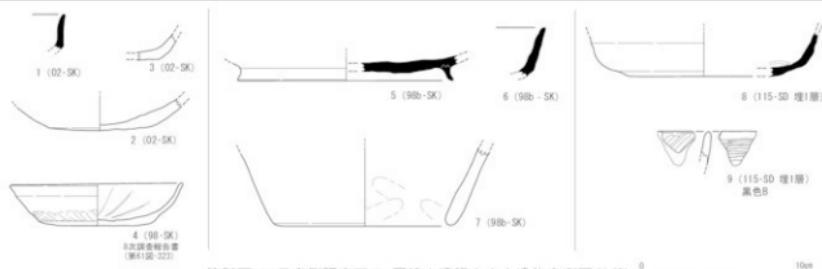
第47図 I区10053-SB・VII区北側調査区07-08-SP内出土遺物実測図(1/3)



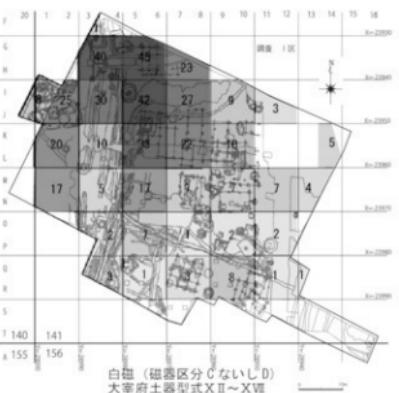
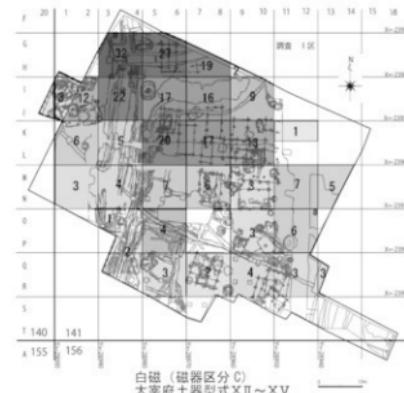
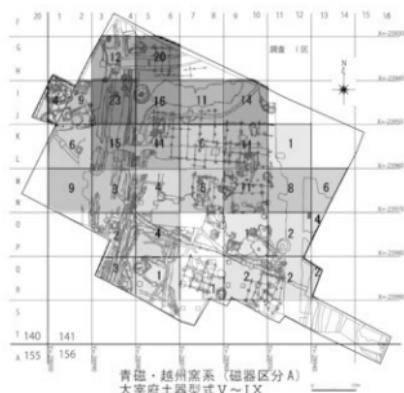
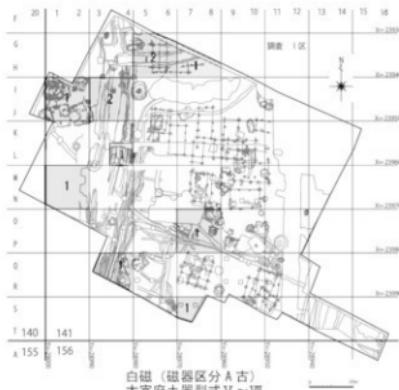
第48図 VII区IIIa層出土遺物実測図(1/3・1/2)



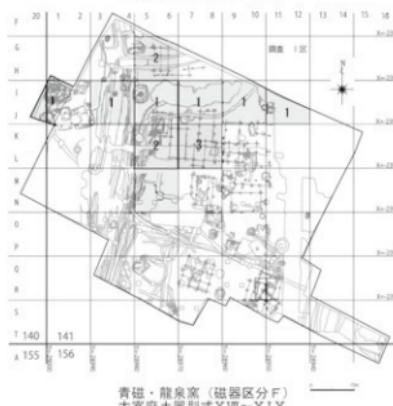
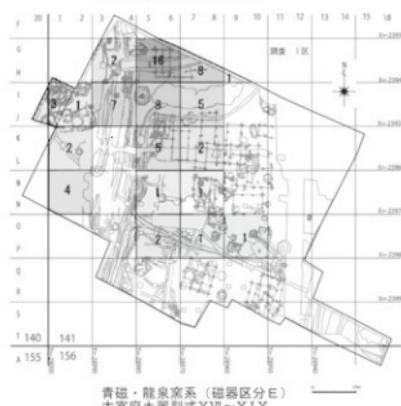
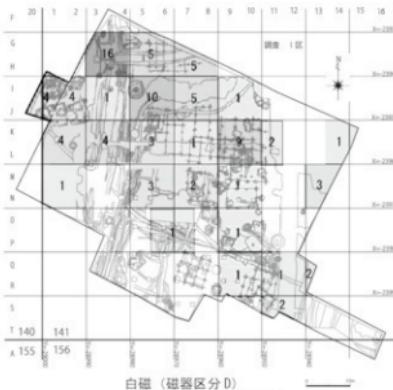
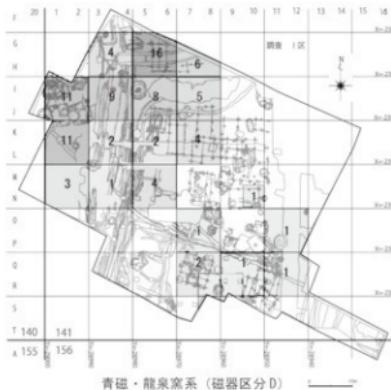
第49図 VII区南側調査区54-SK(01-SK)内出土遺物実測図(1/3)



第50図 VII区南側調査区IIIa層検出遺構内出土遺物実測図(1/3)



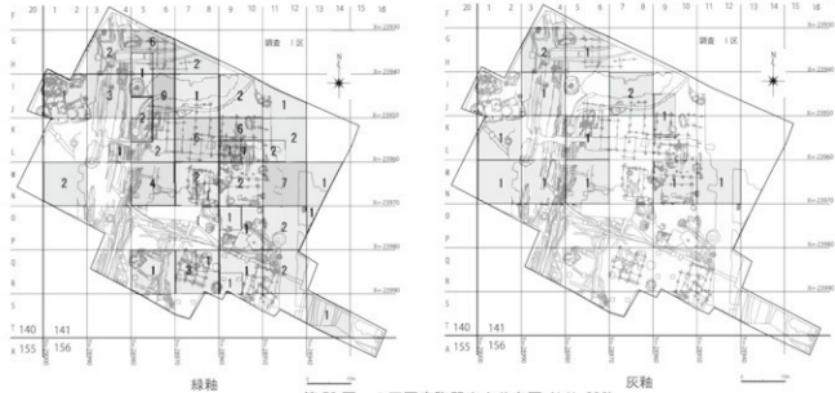
第 51 図 I 区輸入陶磁器出土分布図 (1/1,200)



凡例

1. 出土した陶磁器片の分類ならびに磁器区分は、Pl. 27 第54図大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年による。
2. 陶磁器片の出土地点を示すブロック・グリッド設定は本文中の凡例による。
3. グリッドは原則10m×10mで設定し、出土地点の範囲を示しているが、その範囲を延長・短縮している場合もある。
4. 図中に示した数値はグリッドごとの範囲で出土した陶磁器片の数である。接合された物については、それぞれの破片の出土したグリッドの集計に加えている。
5. 遺構：41-SD・43-SD・46-SD・48-SD・185-SD・612-SDは磁器区分Aのみ、03-SD・07-SD・08-SD・09-SD・10-SD・11-SD・56-SD・59-SD・78-SD・239-SP(SD:溝 SP:ピット)出土陶磁器片については、該当するグリッドの集計に加えている。それ以外の遺構から出土した陶磁器片は集計に加えていない。

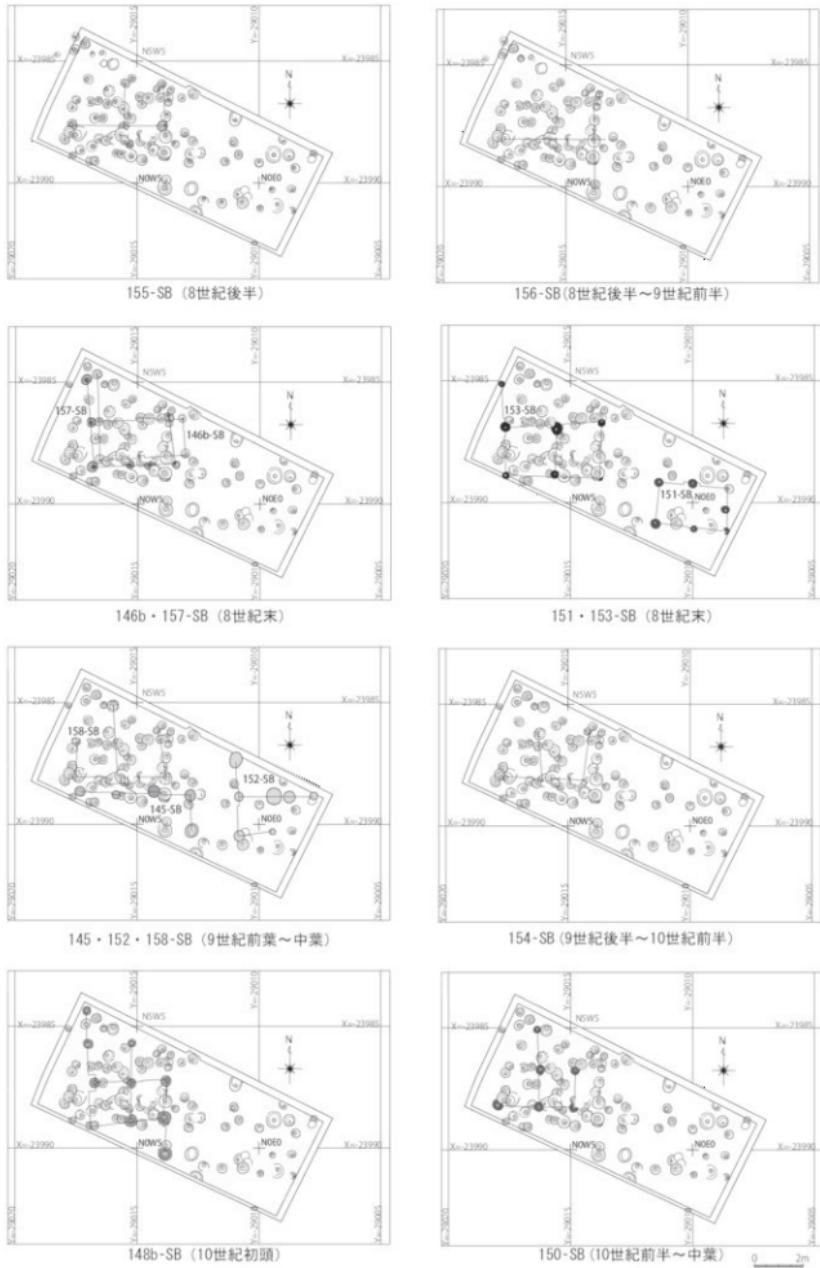
第52図 I区輸入陶磁器・国産陶器出土分布図 (1/200)



第53図 I区国産陶器出土分布図(1/1,200)

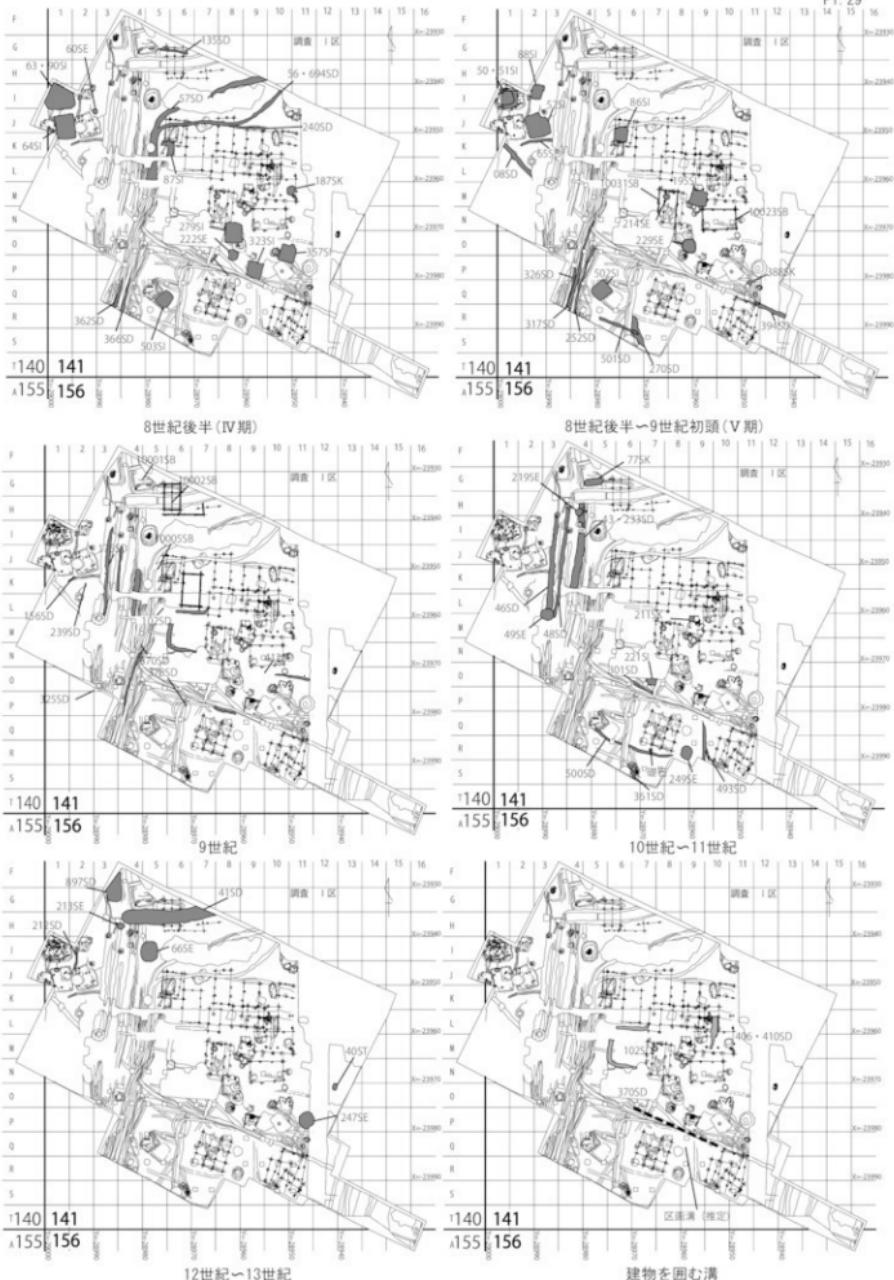
紀年資料 ⑦A. 927 慶歷五年、大字府 74 号 S205A 錄
⑧A. 1091 延祐五年、平安京右衛門町 98 号 F7
⑨A. 1224 寶治二年、大字府 33 号 S106S 錄
⑩A. 1394 至大二年、大字府 109、111 号 S202B 錄
⑪A. 1396 至大二年、大字府 105 号 S120B 錄
⑫A. 281 神武元年、御殿前 102 号 S102A 錄
⑬A. 1459 - 1460 正徳二年正月、福岡市中央区
⑭A. 1991 久慈元年、大字府 70 号 S200 錄

第 54 図 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年
平成 16 年「大宰府条坊跡 26 第 225 次調査」より引用一部改変 編小



第55図 VI区包III・IV層検出掘立柱建物変遷推定図(1/200)(第15図参照)

0 2m



第56図 二本木遺跡群県第8次調査遺構変遷推定図(1/1,000)

※ローマ数字は網田編年



第57図 I区主要遭構配置図(1/500)



1. 二本木遺跡群周辺航空写真（南から）



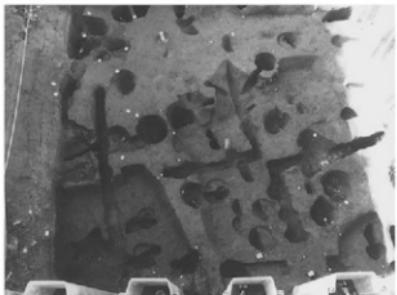
2. 二本木遺跡群調査Ⅰ区俯瞰航空写真



3. 調査区VI区（南西から）



4. 調査区VII区（南から）



1. 調査区東側 堅穴建物調査状況（東から）



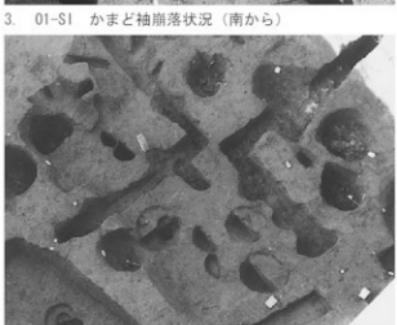
2. 01-S1 調査状況（南東から）



3. 01-S1 かまど袖崩落状況（南から）



4. 01-S1 かまど調査状況（南東から）



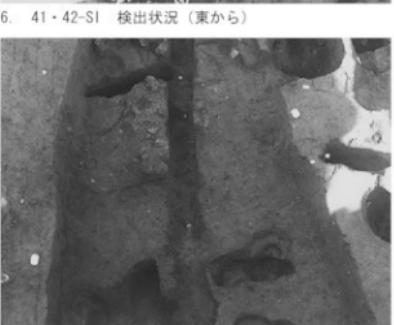
5. 02-S1 検出状況（南東から）



6. 41・42-S1 検出状況（東から）



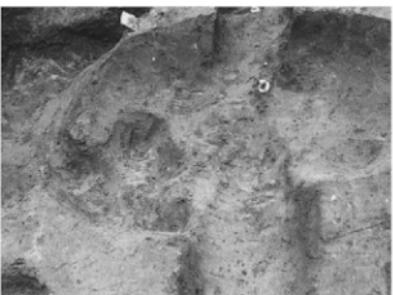
7. 41・42-S1 かまど検出状況（東から）



8. 42-S1 かまど検出状況（東から）



1. 41-SI かまど造成時掘方状況（東から）



2. 41-SI かまど造成時掘方状況（東から）



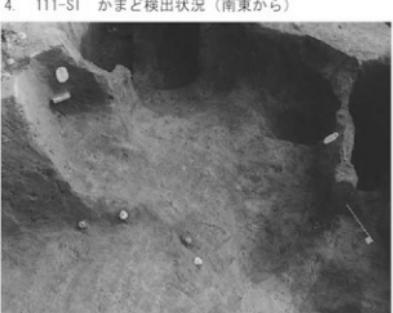
3. 111-SI 調査状況（南東から）



4. 111-SI かまど検出状況（南東から）



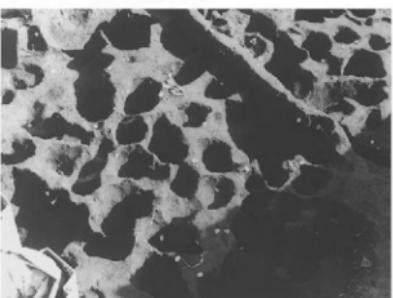
5. 41b-SK 完掘状況（東から）



6. 79-SK 完掘状況（南から）



7. 80-SK 検出状況（西から）



8. IIIb・IV層検出掘立柱建物(柱穴)検出状況（南西から）



1. VI区 IIIa層検出掘立柱建物(柱穴)検出状況(南西から)



2. VI区 218-SP 土師器坏出土状況(南から)



3. VI区 IIb層検出掘立柱建物(柱穴)検出状況(南東から)



4. VI区 32-SX 獣骨出土状況(北から)



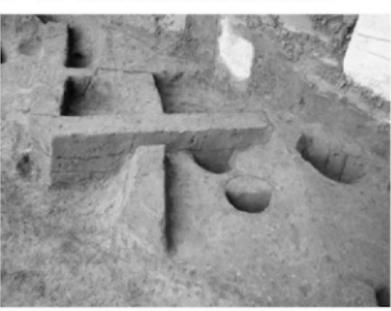
5. VII区 南側調査区全景(北西から)



6. VII区 北側調査区遺構検出状況(南東から)



7. VII区 北側調査区IIIb層検出遺構調査状況(南東から)



8. VII区 68-SI・68b-SI 土層断面(南東から)



1. 10053-SB P-4・07-SP 他検出状況（南東から）



2. 北側調査区Ⅲb 層調査状況（南東から）



3. 88b-SI かまど検出状況（南西から）



4. 88b-SI かまど抽粘土検出状況（南西から）



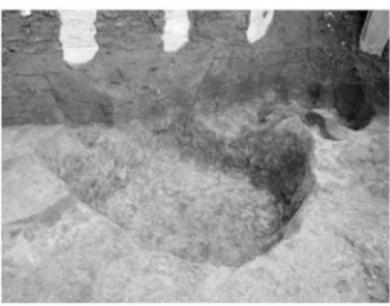
5. 南側調査区Ⅲb 層調査状況（北東から）



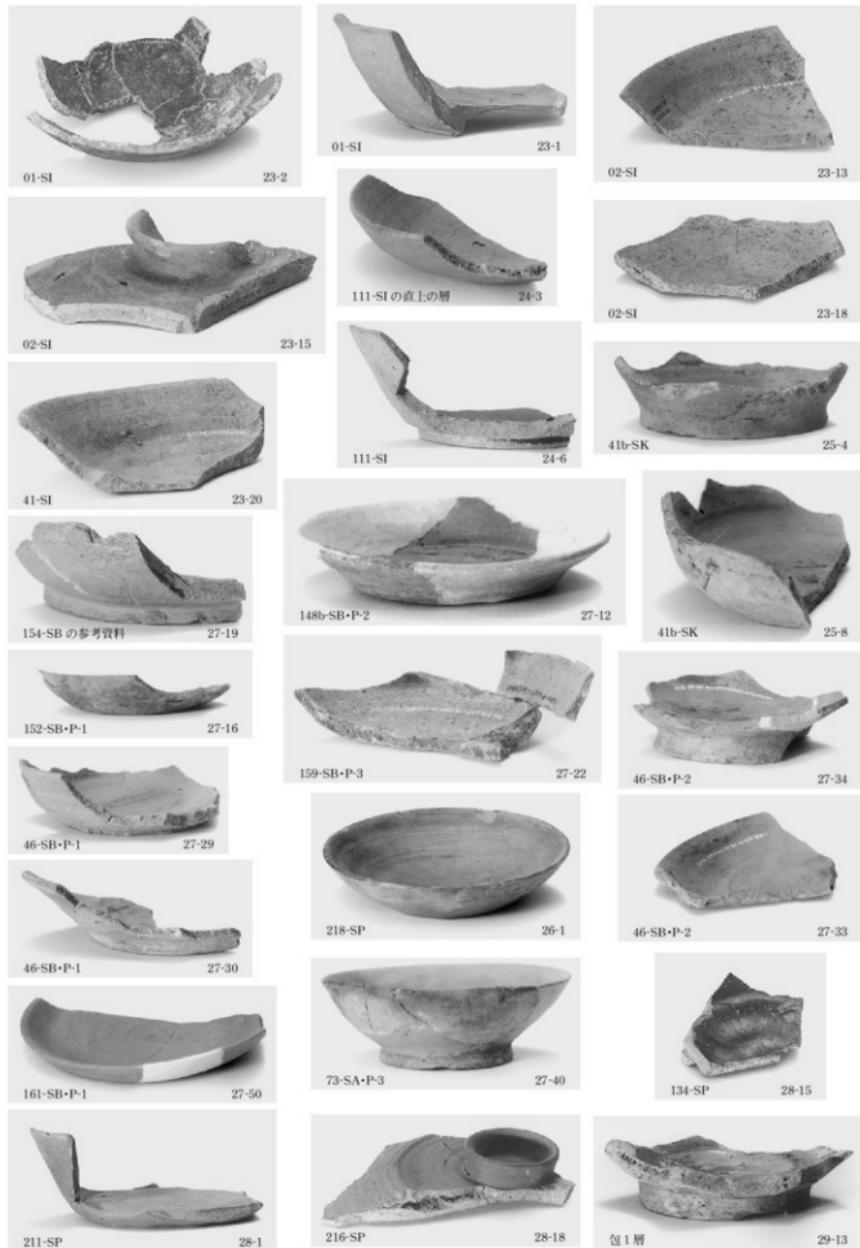
6. 南側調査区Ⅲa 層遺構検出状況（北から）

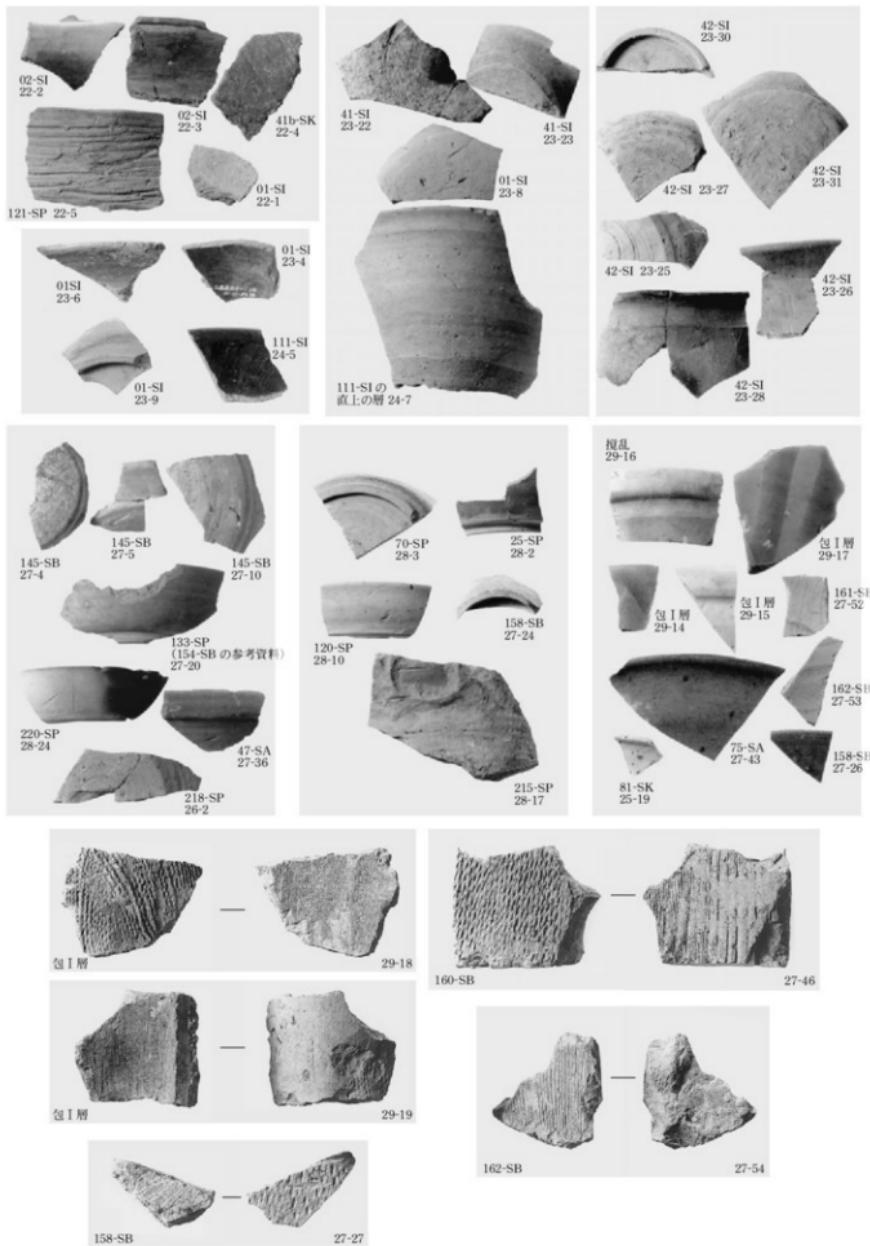


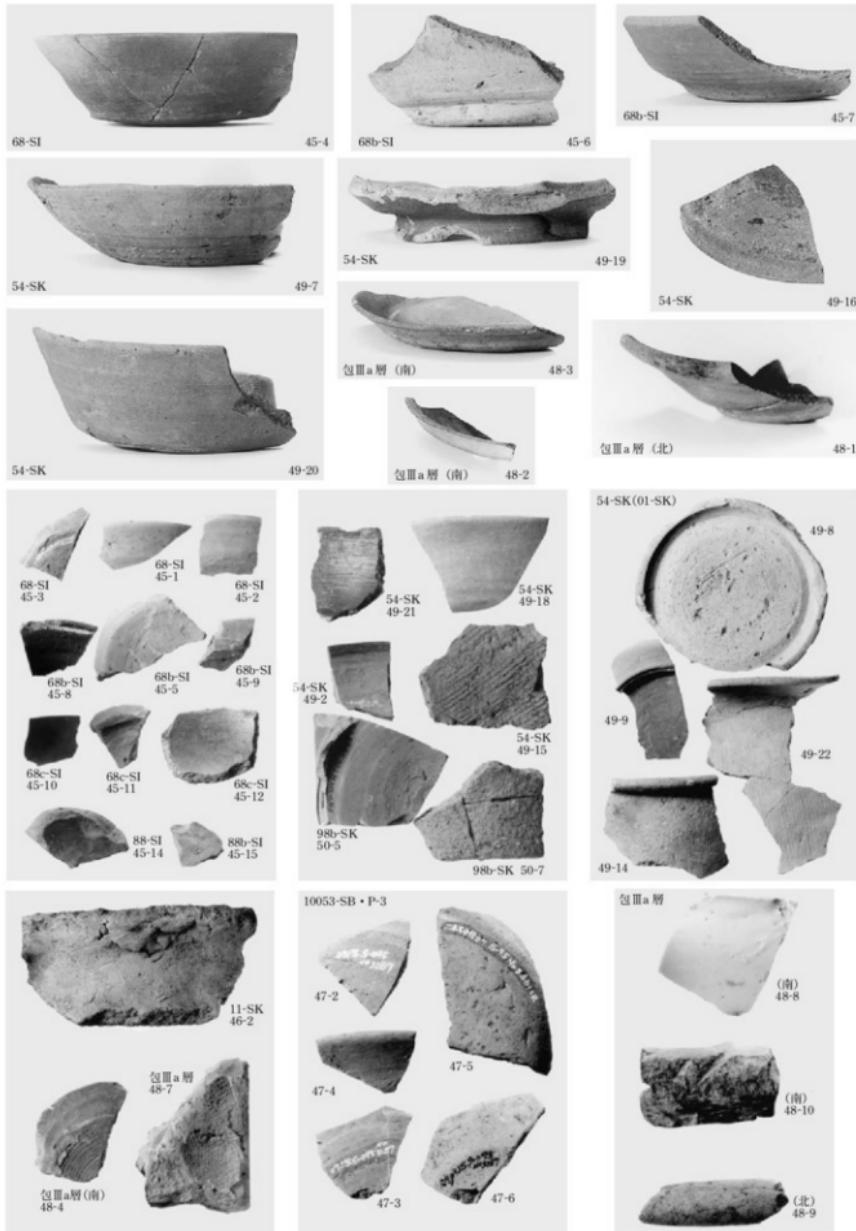
7. 南側調査区 54-SK(01-SK) 土層断面（北東から）



8. 南側調査区 54-SK(01-SK) 完掘状況（北から）







報 告 書 抄 錄

ふりがな	にほんぎいせきぐん
書名	二本木遺跡群4
副書名	春日地区県第12次埋蔵文化財発掘調査（熊本地方合同庁舎A棟新営工事に伴う）
卷次	熊本県文化財発掘調査報告書
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第262集
編著者名	龟田 学
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8570 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にほんぎいせきぐん 二本木 遺跡群	くまもとけん 熊本県 くまもとし かずが 熊本市春日	43201	265	32° 47'	130° 41' 36"	2009年 ~12月 2010年 1月	約75m ²	熊本地方 合同庁舎 建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二本木遺跡群	官衙、集落	古代 中世	堅穴建物、 掘立柱建物、 土坑、溝	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦、輸入陶 磁器、国産陶器、獸 骨	

要約	二本木遺跡群は熊本県教育委員会第13次調査において大規模な建物群(6号建物)が検出され、それに伴う建物も検出されている。8世紀中頃～後半にかけての建物が存在したと見られ、その規模から官衙に伴う遺構と推定されている。遺物についても輸入陶磁器、硯、国産陶器、瓦等が出土している。今回の調査区は、その地点から西側に約250mに位置し、官衙区域と居住区域の境界付近に推定されているところである。隣接する県が実施した第8次調査では、堅穴建物、区画溝、掘立柱建物等を検出している。遺物についても輸入陶磁器、錠前、硯等多様な遺物が出土している。
	今回県第8次調査に隣接する地区を小規模ながら発掘したことにより、遺構の続きを確認し、遺構の掘削面や時期を再検討することができた。
	本調査区周辺は、居住域及び倉庫域等と推定できる。

熊本県文化財調査報告 第 262 集

二本木遺跡群 4

—春日地区県第 12 次埋蔵文化財発掘調査—

(熊本地方合同庁舎 A 棟新営工事に伴う)

平成 23 年 3 月 31 日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒 862-8570 熊本市水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印刷・製本 株式会社 太陽社

〒 862-0972 熊本市新大江 2 丁目 5 番 18 号

22 教委 教文
② 006

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 262 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：二本木遺跡群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>